勇み立ち、益〻士卒を勵まして、競ひ掛かる、重成、

『あの敵を、追ひ立てよ』

と呼はり〳〵、自ら眞先きに、進み出づれば、士卒、亦、後れじと競ひ進み、ドツと叫んで、右京の備に、突き蒐かる。

右京、亦、鯨波を合はせて、奮ひ闘ふ、庵原助右衞門、

『あれ見よ、中白の四ツ目結の旗、銀の瓢箪の馬標を立てたるは、正しく、敵の大將木村長門守ぞ、面々、討ち取つて、高名せよや』

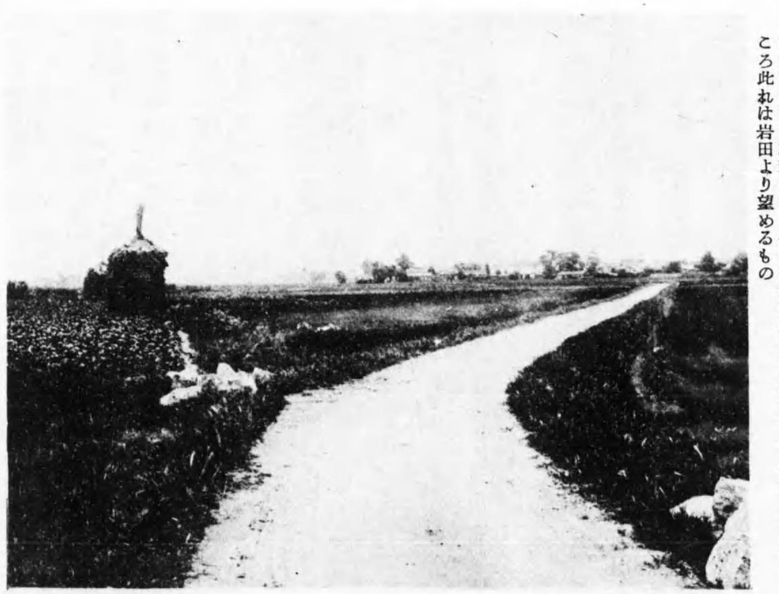
と勵ませば、士卒、何れも、勇みに勇んで、馳せ進む。

兩軍、駈け入りては、引き返し、引き返しては、又馳せ進む、彼我の陣容、混亂して、殆ど、味方を辨ぜず。

奮戰、半晌ばかり、右京の兵、新鋭の敵に、突き立てられて、次第に、色めき渡る。

重成、益〻麾を打ち揮り〳〵、嚴しく、士卒を鼓舞して、奮闘すれば、右京の兵、終に怯へず、一時に、揮と崩れ立つ。

長野十郎左衞門、三浦與右衞門の二人、それと見るより、



若江其二

河内國中河内郡若江村は井伊直孝の兵と木村重成の兵と奮闘激戰せしところ此れは岩田より望めるもの

部下を率ゐて、突進し來り、

『敵は小勢ぞ、押つ取込めて、一人殘らず、討取れや』

と呼はりつゝ、右京に代つて、攻め戰ふ、部下には、甲州の兵多し。

『敵を崩すは、此時なるぞ』

と叫びも敢へず、鋒を揃へて、突き捲くれば、重成の兵、忽ち、半ば討たれて、後に殘れるもの、五百人ばかり、皆、

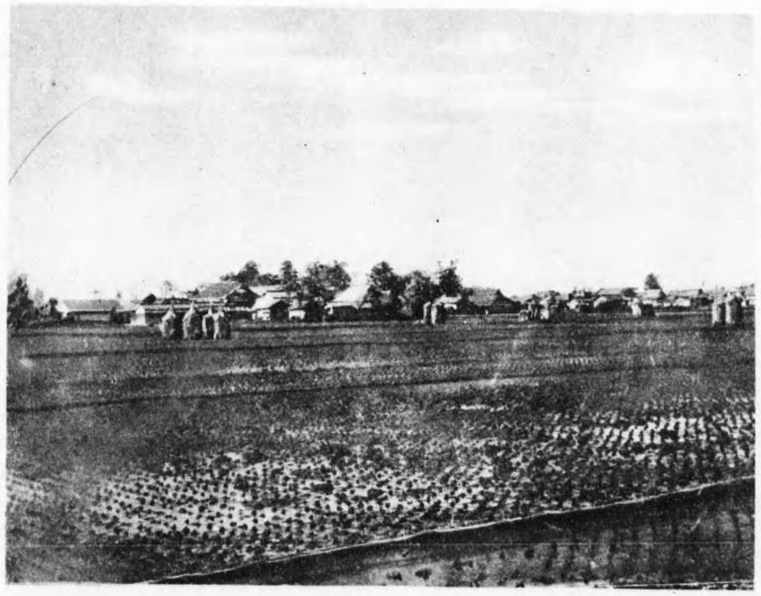
『命、生きて、何にかせん、死ねや〳〵』

と口々に呼はり、流るゝ血汐を含んで、咽喉を沾ほしつゝ、皆、一死を期して、進み戰ふ、漠々たる砂塵、飛んで、雲霧の如し。

血戰少時、十郎左衞門等の部下、亦、決死の城兵に、當りがたく、終に、崩れ走ること二三町。

木俣右京、再び敗兵を集めて、取つて返し、重成の兵を圍んで、嚴しく、攻め立つれば、左しもの城兵も、數度の接戰に疲れて、討たれ死するもの、算なし。

斯かる所へ、重成の部將眞野藏人助宗、手兵を提さげて、猛進し來り、側面より、右京の兵を、襲ひ擊つ。



若江其三

此れは河内國中河内郡若江村の眞景にして山口重信の墓前より西方若江の民家を望むもの實に當年血戰の地なり

右京の兵、意外の敵に驚きて、再び崩れ走れば、重成、大に勇み立ち、

『イザ井伊の本陣を、突き崩せや』

と呼はりつゝ、直孝の中軍を、目掛けて、突進し、助宗も、亦、續いて、馳せ進む。

直孝の麾下、敵の猛然として、突貫し來るを見るより、想はず、踏跙逡巡して、進まず、既にして、重成の軍容燦然たるを望み見て、俄かに、

『あれこそ、敵の大將なれ、イデ生捕つて、高名せん』

と犇めきつゝ、鋒を揃へて、進み擊ち、士氣、俄然として、復た勇み立つ。

重成は、萬夫不當の勇將、馬を縱横に驅りつゝ、槍を揮うて、敵を突き伏せ〳〵て、獅子奮迅の勇を、振うて戰ふ。

重成の部下、亦、槍を揃へて、我れ劣らじと、突き進む。

直孝の麾下、復た崩れ掛かれば、直孝、憤然として、怒り、

『扨ても、卑怯なる者共の振舞かな、此上は、我れ、一槍働かん』

と言ひさま、馬を馳せて、陣頭に、躍り出でんとす。

『這は、何事に候ぞ、我等の候ものを』

と云ひつゝ、バラ〳〵と、進み出でしは 十本槍と呼ばるゝ廣瀨左馬介、今泉源右衛門、藤田四郎左衛門、岡部惣右衛門、成瀨彦右衛門、內山五左衛門、河野彌兵衛、戸渡太郎左衛門、左山八郎左衛門等の面々、各〻槍を揮うて、サッと、突き進む、鋒尖鋭利、奔電の如く、向ふところ、皆、披靡す。

勝敗の機、忽ちにして、一轉すれば、重成、眞先に、躍り出でつゝ、

『引くな者共、掃部を討取つて、冥途黃泉の先驅けせよや』

と振ひ勵ます、上村金右衛門、河崎和泉、水谷忠助、佐久間藏人、村上十太夫、篠岡右京、大塚勘兵衛、牟禮彦三郎、松浦左吉、青木四郎兵衛、早川茂太夫、黑木藤七、山口智德院等、聲に應じて、進み戰ふ。

畑角太夫、葛原五郎左衛門、淺井淸兵衛、小川勘左衛門、松浦彌兵衛、瀧波彌四郎、飛木田源六等、近侍の勇士、亦、續いて、馳せ進み、

『只、討捨てにせよ、首を取るな』

と呼はり〳〵、萬死を冒して、奮鬪す、劒戟、相擊ち、鞍馬、相觸る。

奮擊突戰十數合、直孝の家臣加藤庄九郎、酒井勘之助、雨宮吉九郎等の勇士、枕を並べて、馬前に斃るゝもの、四十九人、直孝の麾下、復た又大崩れに、崩れんとす。

膽略絕群の直孝、少しも、怯まず、忽ち、大音を張り上げて、

『敵は入り替るものなき小勢にあらずや、これに敗らることやある、只、押つ取込めて、一人殘らず、討取れや』

と呼はれば、士氣、復た忽然として振ひ、咄嗟に、備を立て直して、三方より、嚴しく、圍み擊つ。

家康の麾下河野權左衛門通重、不興を蒙むりて、直孝の軍に屬す。

『生きて、甲斐なき我身なり、イデヤ、進んで、討死せん』

と言ひつゝ、栗毛の馬を驅つて、進み出で、太刀を揮うて、

馬場一郎の屋敷
河內國中河內郡若江村に馬場一郎の屋敷あり若江合戰の時木村軍の負傷者を收容せし家なりと言ひ傳ふ重成の墓は同家の裏手四五町の處に在り

矢庭に、一敵を斬つて落す。

直孝の部下、亦、敵を撃ち靡け〳〵、益〻進んで、重成を撃つ。

一勝一敗、形勢の變化、端倪すべからず、重成の勢ひ、今や、漸く蹙まる。

大井河右衞門、早川茂右衞門、青木四郎右衞門等、何れも、重成の馬を控へて、

『斯かる小勢の味方を以て、多勢の大敵を、五度までも、打ち靡け給ふ、其御武勇の程、誰れかは及び候はん、此上は、一旦、此處を引揚げ給ふとも、聊か御名折には候まじ、一先づ、城中に歸りて、秀頼公に、御名殘を申上げ給はんこそ、然るべけれ』

と諫むれば、重成、聞きて、頷づきつ〻、

『汝等の申すところ、道理なり、左れども、諸方の合圖、盡く、相違して、戰勝の見込とてもあらず、君の御運も、早、一兩日の中とこそ、覺ゆれ、此上は、君、御存生の中に、花々しき討死を遂げて、我が二心なき心底を、見せ參らせんとこそ、存ずるなれ、これ見よ、我が志、此の如し』

と言ひつ〻、結びの下より、切り捨てし兜の忍の緒を、指し示す、一同、それと見るより、

『扨ては、然る御覺悟にて候ひしか、今は、何をか申すべき、此上は、諸共に、潔よく、討死仕つり候はん』

と言ひ放てば、大井河右衞門、ハラ〳〵と、涙を垂れつ〻、

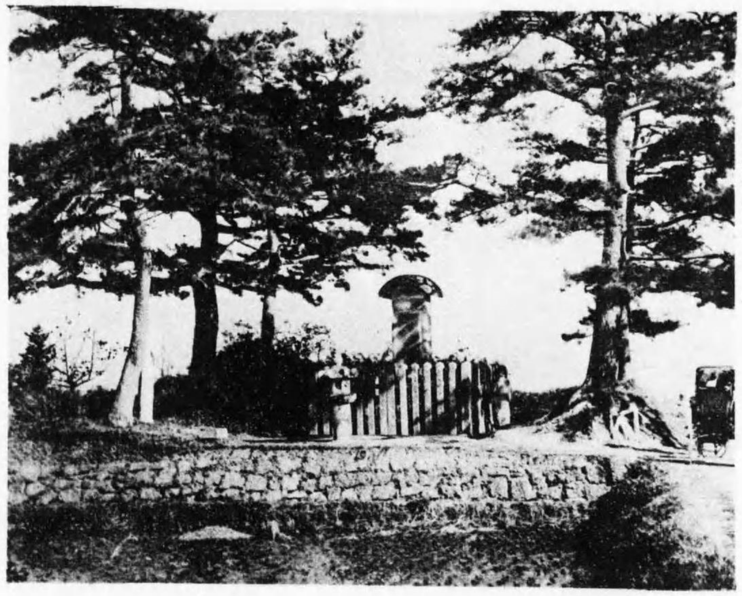
『去年、今福に於て、重傷を負ひ、既に落命すべき所を、君の御蔭を以て、一命を拾ひたるにて候、今日こそ、敵を惱まして、御恩を報い奉つり候べけれ、然らばに候』

と言ふより早く、猛然、馬を驅つて、敵陣に馳せ入り、槍を揮うて、無二無三に、直孝に、突き掛かる。

直孝、少しも騷がず、槍を執つて、應戰するを、河右衞門、透間もなく、突き立て〳〵、一聲、曳と叫んで、直孝の肩先を、突き立てんとす。

直孝の部下、突と、馳せ來つて、懸け隔て、河右衞門を、中に包んで、突き立つ。

庵原助右衞門、亦、麾を採つて、士卒を勵まし、四方より、重成主從を、圍み擊つ。



山口重信の墓
山口重信の墓は河内國中河内郡若江村の南方に在りて木村重成の墓と相接す四方に石柵を繞らし中に石碑を立つ石川丈山の篆額林羅山の譔文に係る墓背の山は生駒山なり

助右衞門の子主税、生年十五、眞先に進んで、青木四郎右衞門と、槍を合はせ、突と、躍り掛かりて、ムンヅと、引つ組む。

助右衞門、見て、馳せ來れば、小腕の主税、忽ち、下に組み敷かる、助右衞門、大音を張り上げて、

『助右衞門、此れに在り、憶すな主税』

と呼はれば、主税、忽ち、曳やと、刎ね返して、四郎右衞門の首を掻く。

格闘、諸所に起りて、上村金右衞門、山口智德院の二人も討たれ、川崎和泉、水谷忠助、佐久間藏人、篠岡右京、大塚勘右衞門、牟禮彦三郎、松浦左吉、早川藤太夫等の面々も討たれ、眞野藏人助宗も、亦、正木舍人の爲めに、討たる。

重成、大小十七ヶ所の創を、蒙むりて、鮮血淋漓、鎧上に溢れ、左腕の創、最も、痛楚（いたみ）を覺ゆ。

『イデ、此上は、掃部と刺違へん』

屹と、鞍頭に突つ立ちて、向ふの方を、見遣れば、直孝、馬を赤旗の下に立て〻、士卒を指揮す。

『素破や、掃部ぞ』

重成、一鞭、ハッシと策てば、鐵蹄、忽ち、宙を飛んで、驀地に、馳せ出づ。

主人の一大事と見て取る助右衛門、一散に、馬を驅つて、其前途を立ち塞ぐ、重成、憤然として、

『汝は、何者なるぞ、其處避けて、通すべし、斯く申す我れは、木村長門守重成なり』

と呼はれば、助右衛門、

『井伊掃部頭の執權庵原助右衛門朝昌なり、イザ、參らん』

と言ふより早く、槍を執つて、サッと、突き進む、重成、

『左らば、來れ』

と言ひさま、同じく、槍を揮うて、無二無三に、突き立つ、鋭鋒、閃電の如く、眼も眩めくばかり。

助右衛門、秘術を盡して、奮鬪すること數合、其力、敵せざるを見て、忽ち、槍を引いて、走り退く。

重成、何處までも、逐ひ駈く、忽ち、一矢、飛び來つて、馬の前脚に、突つ立てば、馬、跳ねて、重成、撞と、地に落つ。

助右衛門、透かさず、馳せ返し、槍を伸べて、グザとばかりに、重成を突き刺し、其儘、飛び降りて、首を掻かんとす。

浪士安藤長三郎、年十七、直孝の軍に屬す、此時、一散に、馳せ來り、

『某、未だ好き敵に出合ひ申さず、其首、某に賜り候へ』

と請へば、天性鷹揚なる助右衛門、敢て惜むべき色もあらず、

『安き程の事かな、これは木村長門守重成と名乘りつて、甲斐々々しく働きたり、虚實を知らねど、武具と曰ひ、如何さま、長門守とこそ、覺ゆれ、合戰も、今日明日なれば、最早、此首ほどの武士を、討ち給はんこと、叶ふまじ、イザ、其許に、取らせ申さん、早々、討取つて、御感賞に預かり候へ』

と言へば、長三郎、大に悅び、

『左らば、申受け候はん、辱けなし』

と言ひさま、首を掻きて、馳せ出す、助右衛門、呼び止めて、

『これ〳〵、御待ち候へ、駿府の大御所は、武邊の御吟味、却々酷し、これは、母衣武者と曰ひ、特に、一騎當千の大將なり、母衣、采配をも取つて、其首に添へ候へ、然りとは、粗忽千萬かな』

と語り示す、長三郎、ハッと、心付きて、取つて返し、

『實にも、宣ふ通りなり』

と言ひつゝ、手早く、母衣と采配とを取つて、星田の本營へと、馳せ赴く。

此時、助右衛門の從士、馳せ來つて、大に驚き、

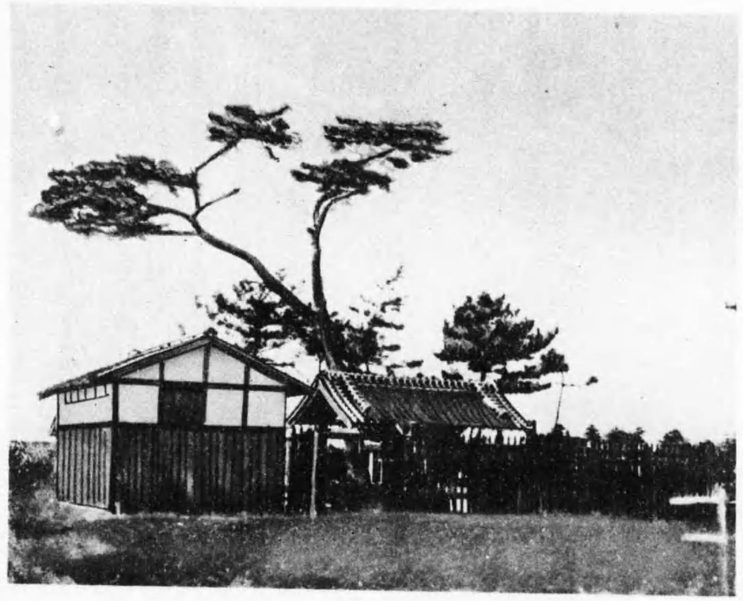
『あれ程の好き首を、人に渡し給ふことや候、某、取り返し候はん』

と言ひ捨てゝ、馳せ出ださんとす、助右衛門、首を掉りつつ、

『これ〳〵、要らざる事かな、我が手柄は、殿こそ、御存知なれ、捨て置きて、若者を助くべし』

と告げて、平然たり、從士、尙も、無念に堪へやらず、

『切めては、後日の證據を、殘し候はん』



木村重成の墓地

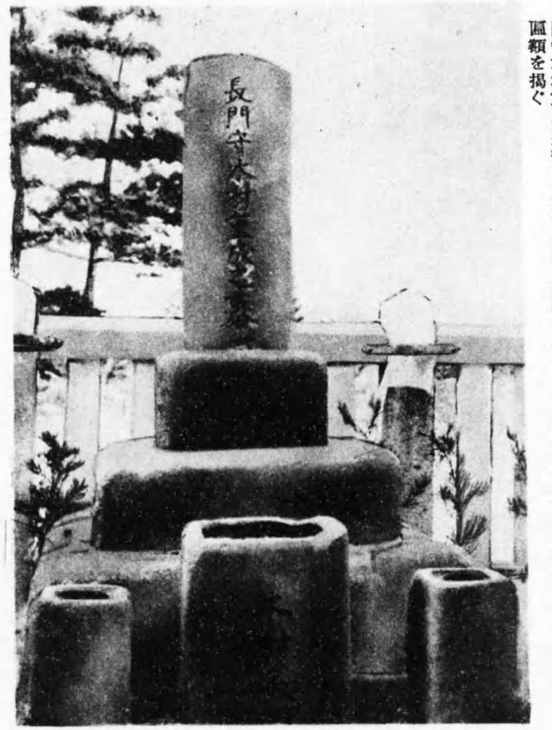
木村重成の墓地は河内國中河内郡西郡村の北端若江村に接する處にあり墓は樹下に在りて南に面し掩ふに瓦屋根を以てす圖中左手の建物は針術灸術營業吉村吉三郎の宅

重成の母衣に附けたる金の捻竹の印を、取つて還へる。

重成、既に、死すれば、皆、駭き散ず。

大井河右衞門、此時までも、尙、死力を盡して、奮ひ鬪ふ、

重成の討たるゝを見るより、



木村重成の墓
河內國中河內郡西郡村に在り三間四の石柵を繞らし中に三段の石を重ね上に墓を建て「長門守木村重成之墓」の九字を刻す石柵の上に屋根を設けて正面に「耐忍」の二字を刻せる匾額を掲ぐ

『今は、誰が爲めにか戰はん、イデ〳〵、我れも、死して、冥途黃泉の御供せん』

と思ひ極め、群がる敵を、逐ひ拂ひて、重成の死骸の側に、馳せ往き、思ふさま、敵を惱まして、終に、亂槍の下に殪る。

長屋平太夫、靑木七郎左衞門の二人、亦、重成の戰死を聞くより、

『味方、敗軍に及びぬるこそ、無念なれ、此上は、敵中に、紛れ入り、掃部頭と、引つ組んで、勝負を決せん』

と言ひ合はせ、死者の首を取つて、劍頭に、突き貫ぬき、打ちかたげて、直孝の陣中に、紛れ入る。

直孝の隊は、皆、赤し、直孝、早くも、異色の二人を、見認めて、

『あれ見よ、敵兵二人、我が備へ、紛れ入りたり、生捕れや面々』

と呼はれば、丸山八郎右衞門、成瀨彥左衞門の二人、聲に應じて、躍り出で、平太夫を、目蒐

けて、曳やと引組む、七郎左衞門、キリ〳〵と、齒を切み、

『扨ては、露顯せるか、無念なり』

と言ひさま、直孝の馬前に、馳せ進み、太刀を揮うて、曳とばかりに、斬り付く。

直孝、麾を揮うてサッと、、拂ひ退け、更に、二の太刀を、打ち込むところを、突と、馬を乘り違へて、ムヅと、引つ攫み、其儘、揑と投げ飛ばすこと、四五間ばかり。

『それ生捕れや』

と呼はれば、家臣、馳せ寄りて、難なく、取つて押ふ。

此隙に、八郎右衞門、彥左衞門の二人、亦、平太夫を、取つて押へて、繩を掛く。

秀忠の軍監近藤石見守用政、乃ち二人を引いて、本營に還る。

直孝、勝ちに乘じ、走るを逐うて、久寶寺の方に向ふ。

五六　岩田の合戰

若江の合戰、未だ終らず、其北方の岩田にも、亦、對戰あり。

木村長門守重成の若江に達するや、其叔父木村主計頭宗明を招きて、

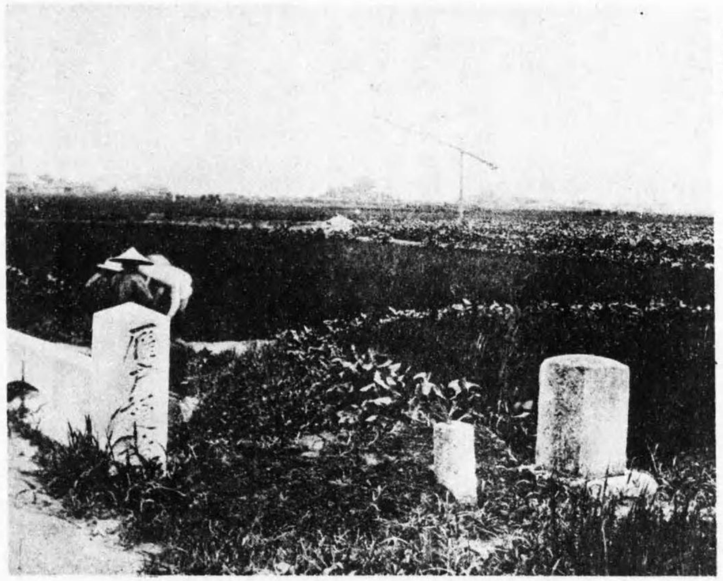
『我れは、今日の合戰に、討死せんと存ずるなり、敵、若し、横矢を入れ候はんには、思ふ儘に、戰はんこと、叶ひがたし、彼處の横堤に、備を立てゝ、敵の横矢を、防ぎ給へ、吳々も、今日は、討死無用なり、明日は、眞田が最後の一戰候べし、其時、花々しく、勇戰して、高名を顯はし給へ、味方の軍、散ずれば、早々、城中に、引き返して、我が戰死の模樣を、秀頼公に言上し給ふべし』

と語れば、宗明、部下の兵を卒して、岩田に馳せ向ひ、銃手を、玉串川支流の堤下に備へ、自身は、其西方の小丘に陣して、白地に『八幡』と書したる旗二旒を、押し立つ。

東軍の將小笠原兵部大輔秀政、榊原遠江守康勝等、奈良街道の松原に在り。

秀政は、家康の子淸康の女婿にして、夙に、猛勇を以て著はる、敵兵の岩田に顯はるゝを、見るより、

『素破や、敵は、押し寄せしぞ、イデ〳〵、蹴散らさん』



飯島三郎右衛門の墓
河内國河内郡若江村と岩田との境なる細路川の南詰に飯島三郎右衛門の墓あり此者は若江村の里正にして木村重成の嚮導者なり五月六日の戰に討死す

自ら進んで、撃退せんとす、左れども、玉串川の水、岐れて、又となり、東西二流の間、河水氾濫して、湖上の如し、軍監、藤田能登守信吉、

『こゝは、深田ならん、徒歩にては、進むべからず、御控へ候へ〳〵』

と制すれば、秀政、乃ち迂回して、奈良街道を、西に向ふ。康勝は、式部大輔康政の子なり、兵を玉串川の東流に進め、沼田を隔てゝ、小銃を發す。

宗明の銃手、亦、此れに應じて、銃戰し、彈丸習々、空中に、飛び交ふ。

既にして、八尾に、若江に、吶喊の聲、荐りに起り、銃劍、の音、烈しく響く、康勝、大に心焦らち、

『諸方の合戰、早、盛りなり、何時までか、銃戰のみに、時刻を移すべき、疾く〳〵、此處を、乘り越せや』

と呼はり〳〵、士卒を叱して、前面の沼田を、押し渡らんとす、家臣、大に驚き、

『こゝは、深田に候、馬足、立つべきには候はず』

と諫むれば、家勝、

『父康政の遺言狀に、沼田、深田の物見の事あり、深田の刈株は、斜にして長く、平田の株は、莖より揃へりと言はれたり、イデ、我れ試みん』

と言ひつゝ、只一騎、畦畔を、乘り廻はし、

『ヤア〳〵、此處は、平田なり、深田にあらず、稻の刈株、皆、莖より揃へるぞ、進めや進め』

と呼はれば、信吉、又も、制して、許さず。

三枝勘兵衛、貴志覺之丞の二人、馬首を並べつゝ、

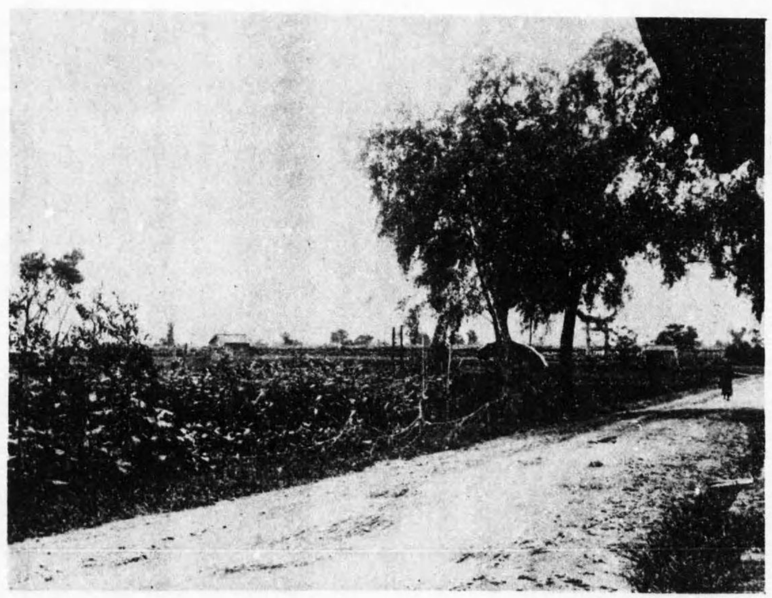
『大海さへ、越さば越すべし、斯ばかりの沼田を、越さんこと、何かあるべき、只、渡せや〳〵』

と言ひつゝ、サッと、馬を乘り入るれば、水底、思ひの外に淺し、康勝、見て、悅び勇み、麾を采つて、

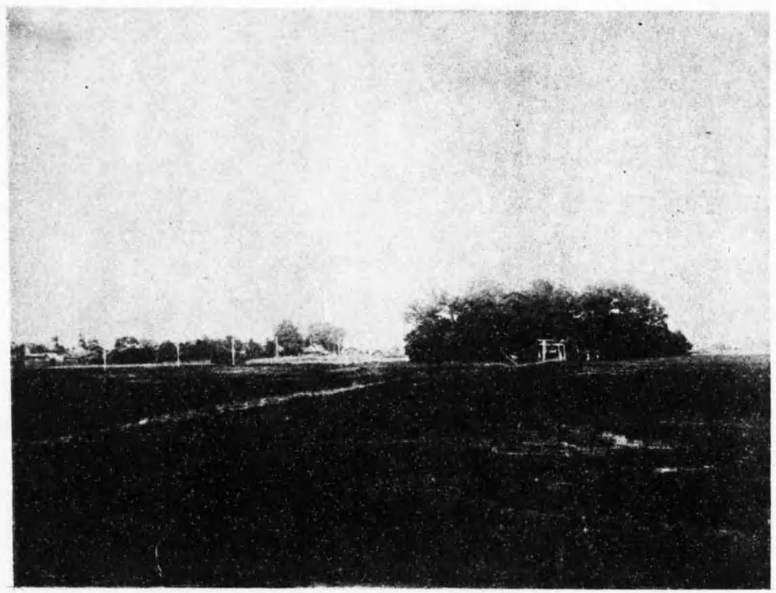
『あれ見よ、田は淺きぞ、總軍、懸かれや懸かれ』

と呼はれば、全軍、皆、勇み立ちて、平一面に、押し渡る。宗明の銃手、斯くと見るより、盛んに、銃火を浴びせ掛く。康勝の兵、事ともせず、犇々と、押し寄せて、玉串川西流の岸に迫る。

三枝勘兵衛、眞先に、流れを越えて、堤上に、躍り上がれ



岩田　其一
河内國中河内郡玉川村大字岩田は柳原康勝と木村宗明と戰へる處此れは松原より望める眞景にして鳥居は河内山の第一の鳥居なり



岩田　其二
此れは河内國中河内郡玉川村大字岩田の西口石田神社の眞景なり

ば、宗明の部下田屋三郎右衛門、槍を揮うて、突き掛かる。勘兵衛、引つ外して、組み付き、矢庭に、捻ぢ伏せて、首を掻きつゝ、

『三枝勘兵衛、一番首』

と大音に呼はる、康勝の部下、續いて、流を越えんとすれども、敵の銃火猛烈、容易に、冒進すること能はず、康勝の老臣伊藤忠兵衛、

『敵は小勢ぞ、彼方よりこそ、越すべけれ、續けや者共』。

と呼はりつゝ、手兵を率して、上流に馳せ行き、難なく、流れを渡りて、宗明の陣に、押し寄す。

宗明、斯くと見るより、槍を揃へ、鬨を作つて、高所より、突き下れば、忠兵衛の部下、あしらひ兼ねて、撞と、崩れ走る、忠兵衛、赫と怒りて、

『穢なき味方の有様かな、イデヤ、目に物見せん』

と言ひさま、只一騎、槍を揮うて、敵中に、躍り入る。

敵の勇士三人、各〻槍を執つて、三方より、突き立て、終に忠兵衛を、突き落して、其首を取らんとす。

忠兵衛、屈せず、太刀を抜きて、横薙ぎに、薙ぎ拂ひ、一人を斬つて倒し、一人の腕を、斫つて落せば、他の一人、驚き恐れて、走り退く。

忠兵衛の從兵、其隙に、馳せ來り、忠兵衛を、肩に引つ掛けて、引き退く。

康勝、味方の敗るゝを見るより、大に怒り立ち、

『續けや者共』

と言ひさま、自ら槍を執つて進む、康勝、時に、瘍を疾む、膿血、迸發して、鎧に滿つれども、屈せず、意氣、壯更に壯。

麾下の面々、今は、何かは躊はん、各〻鋒を揃へて、烈しく、突き進む。

宗明、陣を眞丸に備へて、サッとばかりに、馳せ進み、馳せ退く、疾きこと、旋風の地を捲くが如し。

康勝の勇士高津長左衛門、工藤助左衛門、畑仁右衛門、安松矢之助、江坂四方之介等、見る〳〵、討たれ死するもの、十七人、貴志覺之丞、亦、奮闘して、重傷を被むる、康勝、憤然として、

『斯ばかりの小勢に、敗るゝことやある、父康政以來の武功も、地に墜つべきぞ、只、討死せよや』

と大音に、呼はれば、士卒、皆、俄然として、奮ひ立ち、曳々、鯨波を發して、透間もなく、攻め立つ。

宗明の兵、此勢ひに恐れて、辟易すれば、康勝、益〻士卒を勵まして、奮ひ擊つ、宗明、大に怒り、

『イデヤ、花やかに、一戰して、討死せん』

今や、馬を驅つて、敵中に、馳せ入らんとす、不圖、南方若江の方を見遣れば、味方、既に敗れて、四方に散じ去る、

『扨ては、長門は、早、討死しつるか、今朝の一言、既に、遺言となれるこそ、悲しけれ、此上は、其言葉に從ひて、一先づ、引返さん』

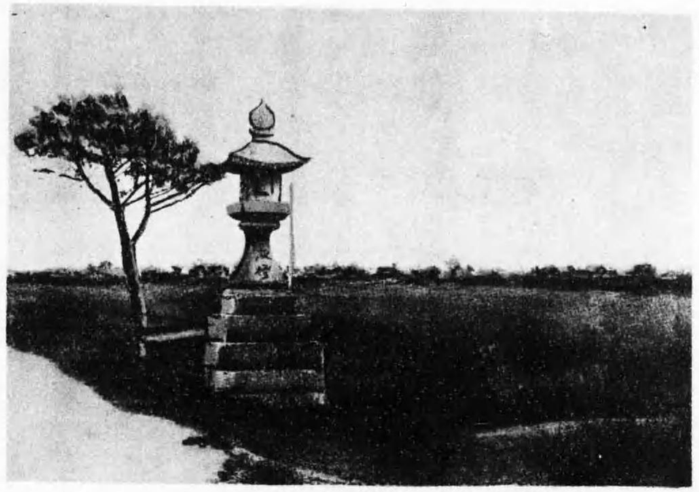
と思ひ返し、殘兵を纒めて、靜々と、天王寺の方に、引き退く、隊伍、整然として、紊れず、康勝、望み見て、

『天晴、敵や、若し、逐ひ擊たば、大返しに返し戰はん、窮兵は、逐ふべからず、只、捨て置きて、引き取らせや』

と呼はりて、復た逐はず、高く凱歌を奏して、軍を班す、首を獲ること、七十八級。

秀政、迂回して、岩田に到れば、敵兵、既に去りて、空し

く、機を失ふ。



岩田　其三
此れは河内國中河内郡玉川村大字岩田より若江方面を望むの光景

家康、星田の營に在りて、康勝の功なきを聞き、

『者奴が子、何を爲せるぞ、鷹が鳶を生めりとは、此事なり』

と恚む、既にして、康勝の使者、來つて、敵首を獻ずるや、家康、

『鷹の子は、矢張、鷹ぞ』

と言ひつゝ、快然として哂ふ。

五七　城兵の退却

眞田左衛門佐幸村、毛利豐前守勝永等の諸將、尙、藤井寺に陣して、東軍の來り戰ふを待つ。

申の刻過ぐる頃ひ、黃母衣一騎、砂を蹴立てゝ、馳せ來る、これぞ、秀賴の使番、

『御諚に候、早々、城內へ、引取られ候へ』

と述ぶれば、幸村、

『扨ては、若江の合戰も、敗北せしか』

と思ひつゝ、高所に登りて、遙に、北方を、見遣れば、八尾、久寶寺のあたり、馬烟、濛々として、天を掩ふ、

『ムゝ、長門守、宮內少輔の手も、愈〻敗北せしと覺えたり、敵の大軍、此口より、直に城へ押し寄せなば、味方は、脇へ崩れて、城內へ入らんこと、叶ふまじく、明日の一戰も、覺束なし、我が今日の役目は、道明寺表、

若江表の味方を援けて、城中へ、引入るゝに在り、當表の敗兵は、既に、引揚げたり、此上は、若江表の人數を、引揚げて、重ねて、關東勢と、一戰せん、若江表、敗軍の上からは、必定、長門守も、討死しつらん、今は、猶豫すべからず』

と思ふ折りしも、秀賴の使者、治長の使者、交〻來りて、八尾、若江の敗績を報じ、且、退却を促がすこと、甚だ急なり。

幸村、附近に陣せる諸將を會めて、進退如何を、謀れば、何れも、

『此上は、疾く〳〵、城內へ、引取るの外は候はず、去りながら、八尾、若江の味方、敗軍の上からは、關東勢は、早、平野あたりを、取切り候はん、敵を前後に受けては、一大事に候、惣軍を分けて、二隊となし、抽籤を以て、前後を定め候はん』

と說く、幸村、

『惣軍を纏めて、退くは、幸村の役目なり、抽籤には、及び候はず、某こそ、殿軍候べけれ』

と言へば、血氣の諸將、

『左衛門殿、後に留まり給はゞ、我等も、踏み留まりて、討死仕り候べし、何とて、獨り退き候はんや』

と述べて、聞入れず、明石掃部助守重、亦、座に在り、

『左衛門佐殿、御所望ならば、後に留まりて、慕ひ來る敵を、喰ひ止め給へ、我等は、前を遮ぎる敵を、蹴散らして通るべし』

と述べて、先づ、兵を班へば、諸將、亦、續いて、引き退く。

幸村、獨り留まりて、後に在り、諸將、既に、五六町を、引き取れども、尙、自若として動かず、諸將、工藤一郎右衛門を遣はして、

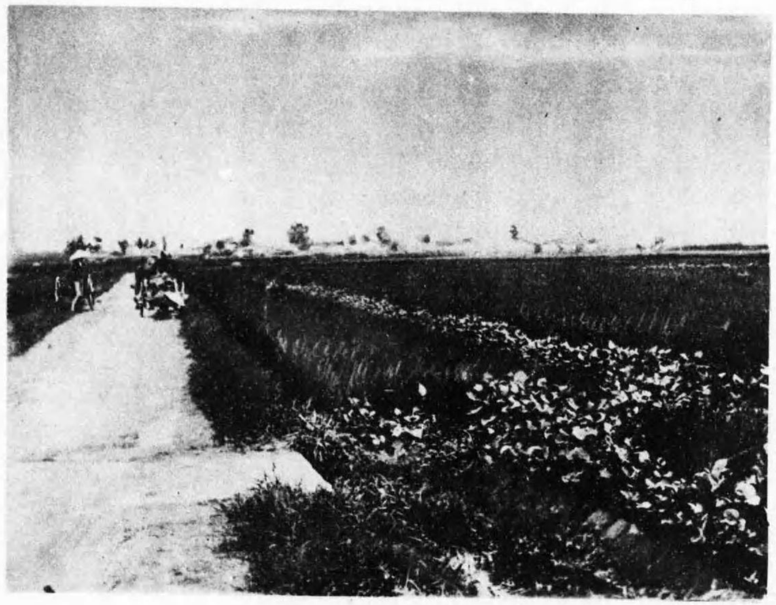
『早々、御引き候へ』

と促がせば、幸村、

『敵、餘りに、間近し、若し、慕ひ來らば、味方の難儀に候はん、今二三町、退き給はゞ、引き取り候べし』

と答へて、尙、動かず、諸將大に、怒りて、

『餘りと言へば、傍若無人の一言かな、此上は、以前の



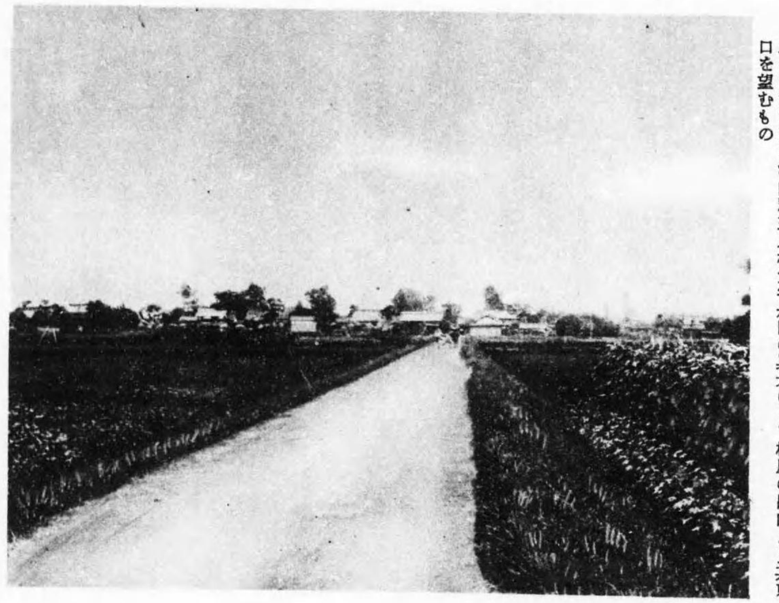
岩田　其四
此れは河内國中河内郡玉川村大字岩田の眞景にして若江より望めるもの

評議を破りて、面々の存分に、働き候はん』
と主張すれば、守重、
『左衛門佐の申すところ、過分に似たりと雖も、武士の勇氣を好むものは、誰れも、斯くこそあるべき本意に候へ、所詮は、秀頼公の御爲めに候、早く引き取らんこそ、然るべけれ』
と說きて、其儘、引き退く、諸將、亦、此れに從ひて退き、重ねて、妹尾平三郎を遣はして、
『各〻引き取り候、疾く、御陣を引き拂はれ候へ』
と促がせば、幸村、
『今は、仔細候はず』
と答へて、陣を徹し、兵を二隊に分ちて、悠々として、引き退く、東軍、此體を望み見て、
『扨ても、思ひ切つたる眞田の退口かな、迂濶に、追ひ擊たば、人數を損せん』
と評し合ひ、何れも、固く兵を勒めて、敢て尾擊せず。
城兵、既に、敵の追擊を免かれ、又要擊をも受けず、長原、平野を經て、無事に、天王寺に、引き退く。

五月六日の合戰、此に終る。

五八　兩將軍の前進

將軍秀忠は、砂の本營に居り、家康は、星田の本營に在り。
家康、今日は、此地に、滯留せんと欲す、辰の刻の頃ひ、安藤對馬守重信、秀忠の使者として、馳せ來り、
『先手藤堂和泉守、井伊掃部頭より、敵兵、八尾、久寶寺へ、討つて出でたれば、卽刻、合戰に取り掛かるべき旨注進の候、これに因りて、上樣には、早、御出馬あらせて候、早々、御旗を、枚岡まで、進めさせ給へとの仰せに候』
と述ぶれば、家康、
『城兵、足長に、打つて出でしからは、味方の勝利、疑ひなし、左らば、我れも、追つ付け、出陣せん』
直に、令を下して、星田を發す。
軍監久貝因幡守正俊、高木筑後守正次の二人、藤堂高虎の陣より、馳せ來り、
『彼我兩軍の間に、大堤の候、味方、取り敷き候へども、小勢にして、保ちがたし、早々、二の見の詰め寄せ候やう、御下知あらせ給へ』
と請へば、家康、忽ち、怫然として、
『高虎ほどのものが、其れ程の了簡なきか、敵、若し、堤を取らば、取らすべし、堤を賴りに、捷たんと申すこと、高虎にも、似合はざることかな』
と叱して、取り合はず、斯かる所へ、軍監小栗又市忠政、井伊直孝の陣より、馳せ來り、
『掃部頭、只今、敵に取り掛かり候へ、其間に、横堤ありて先づ、之れを取りたるもの、勝利なるべしと、掃部頭の家老共、申陳べ候、此儀、言上仕つり候』
と陳べて、別に、援軍派遣の事を、明言せず、家康、頷づきつゝ、
『實にも、堤を取りたる方、勝つべし』
と告げて、氣色、釋然たり、左右に侍せる面々、
『斯かる場合に、御出馬を請ひ奉つらんこと、然るべからず、御備を進め給へば、危ふく、進め給はざれば、敵を恐るゝに似て、諸軍の憶氣を生ぜん、同じことながら、



岩田　其五
此れは河内國中河内郡玉川村大字岩田の眞景にして松原の出口より其東口を望むもの

小栗の申し方上手なり』

と言ひ合へり、既にして、銃聲、喊聲、諸所に起りて、八尾、若江の戰鬪、漸く、猛烈を極む、家康、乃ち軍を忍ヶ岡に駐めて、後報を待つ。

稍〻ありて、河野權右衞門通重、只一騎、井伊直孝の陣より、馳せ來りて、本多上野介正純に就て、敵の首級を獻ずれば、家康、直に、勘氣を赦し、其面前に召して、先鋒の戰況を問ひ、且、

『今よりは、此處に留まりて、我れに供奉せよ』

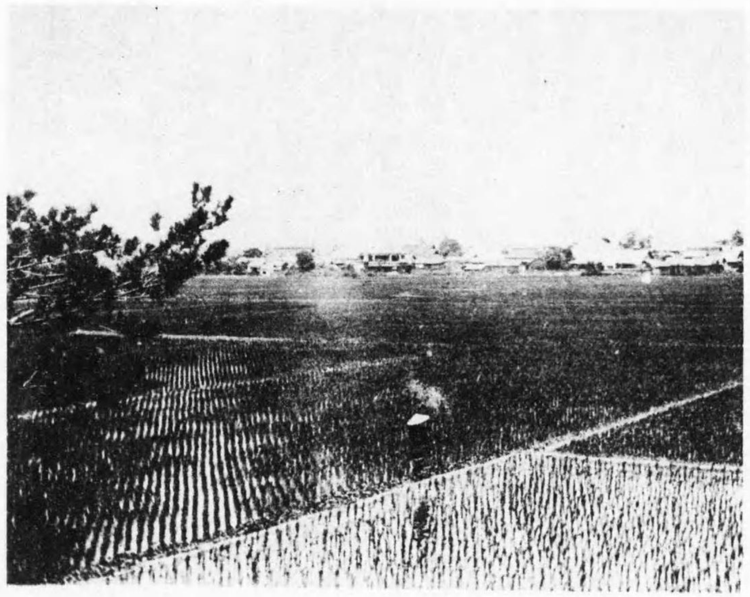
と命ずれば、權右衞門、

『御前の首尾を、掃部頭に、申し聞かせて、悅ばせ候はん』

と答へて、直に、引き返す。

これより、諸方の捷報、頻々として達す、大和口の先鋒水野日向守勝成の家臣竹本廣助、松田金左衞門の二人、道明寺より、馳せ來り、

『城中より、後藤又兵衞、片山に、打て出で候へば、味方の諸軍、押し寄せて、一戰に及び、又兵衞を、討ち果



砂　其一
河内國北河内郡甲可村字砂は將軍德川秀忠の陣營を置きたるところ此れは高野街道より望めるもの

たし候、此儀、取敢ず、御注進に及び候へ』

と報ずれば、家康、欣然として悅び、厚く、使者を賞す。

既にして、軍監近藤石見守用政、若江より、馳せ來りて、家康の前に出で、

『若江表の合戰、御味方の御勝利に候、敵の大將木村長門守を、掃部頭の手に、討ち取つて候』

と述べて、敵の首級を獻じ、且、捕虜長屋平太夫、青木七郎右衞門の二人をも、引き渡せば、家康、牀几に懸かりて、首級を檢しつゝ、

『石見、今日は、若やぎ候ぞ』

と語りて、莞爾たり。

續いて、安藤長三郎、重成の首を、白母衣に包みて、携へ來り、家康の前に、進み出でて、

『此首、拾ひ首には候へども、名ある首なれば、是非、差上げ候へと、掃部頭の申付けて候』

と言ひつゝ、包みを開けば、奇香、馥郁として、四方に薫ず、家康、

『長門が首か、其仲、何時の間に、左樣には、心付きた

るか、扨ても、優さしき心榮かな』

と語りて、ハラ〳〵と、涙を垂る、左右に侍せる面々、

『恐れながら、長門守は、初めより、討死を覺悟せりとは、存じ候はず、其仔細は、月代、殊の外長く候』

と申せば、家康、

『イヤ〳〵、左にあらず、月代の剃立は、兜下の心地、悪しきものなれば、夫等の爲に、剃らざりしか、但しは、香の氣を、強く留めんと思ひて、殘せしならん、此事、一つを以て、討死の覺悟なかりしと言ふべからず、兜を取り寄せて、忍の緒の、有るか、無きかを檢べ見よ』

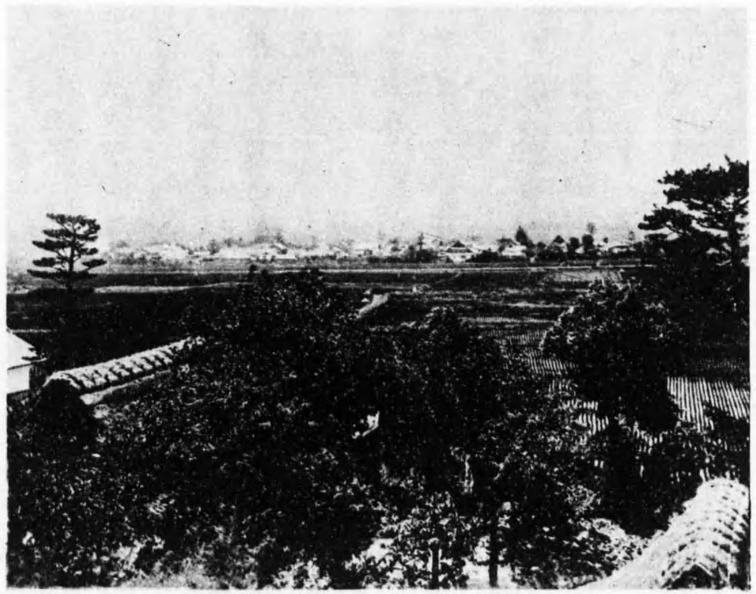
と告ぐ、侍臣の一人、馳せて、重成の兜を、持ち來り、其忍の緒を見れば、果して、ブツリと、切捨てあり、

家康、

『如何に、討死は、初めよりの覺悟にあらずや』

と言へば、侍臣、皆、家康の烱眼に服し、且、重成の勇士に感ず。

家康、侍臣に命じて、重成の首を、彼方此方へ向けしめて、熟〻と見遣り、



砂　其二
此れは河內國北河內郡甲可村字砂の光景にして同村岡山の忍岡城址より望見せるもの

『去年の冬には、目の前にて、見たるものを、早、斯樣になりしこそ、不憫なれ、長門は、花も實もある城中一の勇士なり、厚く葬りて、取らせよ』

と言ひつゝ、又も、涙を垂れ、長三郎には、黃金十枚を賜ふ。

直孝の家臣八田金十郎、亦、山口左馬介弘定の首を獻ずれば、家康、又親しく、之れを實檢す。

家康の側用人松平右衞門大夫正綱は、弘定の父山口玄蕃允正弘の女婿なり、既に、妻を去りしと雖も、昔日の舊誼を思ひ、家康の前に出でて、

『左馬介は、某の小舅に候、先年、妻を離別して、今は、元の他人にこそは候へ、昔の所緣を以て、弔ひ遣はさんと存するにて候、此首、拜領仕つりたうこそ』

と陳ずれば、家康、

『苦しからず、汝に取らすべし』

とて、卽座に、之れを許す、正綱、大に悅びて、星田の寺院に、預け置き、戰終りて、後、厚く之れを葬むる。

五九　幸村の奇計

五ヶ所の戰鬪、東軍、盡く捷ちぬ。

片山に於ては、後藤又兵衞基次を殪し、道明寺に於ては、薄田隼人正兼相、井上小左衞門正利、山本佐兵衞晴宣を斃し、八尾に於ては、長曾我部宮內少輔盛親を走らせ、增田兵部盛次を斃し、若江に於ては、木村長門守重成、山口左馬介弘定、內藤新十郎長秋、眞野藏人助宗を倒し、岩田に於ては、木村主計頭宗明を走らす。

注進の人馬、旁午として、宛ども、織るに似たり。

家康、軍使を、藤堂和泉守高虎、井伊掃部頭直孝、榊原遠江守康勝、酒井左衞門尉家次、前田筑前守利常等の陣に、遣はして、追擊を命ずれば、諸將、直に、兵を進めて、平野に入り、更に、進んで、天王寺に、迫らんと欲す。

天王寺には、諸方の敗兵、盡く、還り集まる、遙かに、東軍の平野に來るを望み見て、皆、色を失ふ。

眞田左衞門佐幸村、亦、藤井寺より、歸り來りて、此處に在り。

『敵兵、若し、此れへ、寄せ來らば、味方、無事に、城中に引き入らんこと、叶ふまじく、イデヤ、我れ、敵を拒がん』

直に、兵を進めて、畑中に陣し、銃を並べ、槍を揃へて、待ち構ふ、唐人笠の馬標、陣頭に在り。

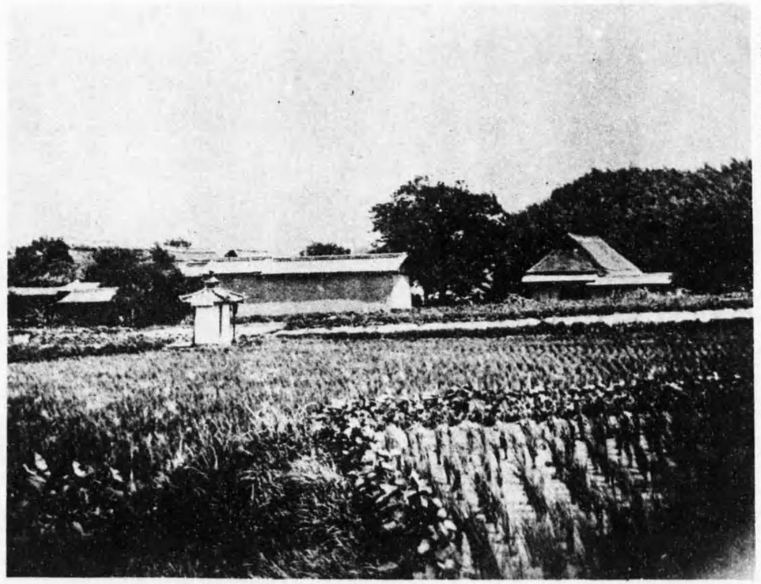
藤堂高虎、此體を望み見て、使者を、味方の諸陣に遣はし、

『あれなる敵の備は、眞田の勢とこそ、見受けられ候へ、僅かなる小敵を、恐るゝにあらずと雖も、日も、早、黄昏に及びて候、夜中に至りて、諸方の敗兵、盡く、集まらば、敵も、却つて、大軍に及び、味方の合戰、難儀なるべし、粗忽の一戰、無用たるべく候』

と告ぐれば、諸將、亦、幸村と、鋒を接せんことを欲せず、乃ち其意に從ひ、兵を勒して、敢て進まず。

幸村、東軍の來り迫らざるを見て、諸軍を、入城せしめ、其家臣眞田與左衞門、杉田五左衞門に命じて、武士一人毎に、餅一個、團飯二個、雜兵一人毎に、團飯二個づゝを頒つ、士卒、皆、大に悅びて、飢を凌ぐ。

餅一萬個の內、殘れるもの、二千九百八十四個、團飯八萬



星田　其一
河內國北河內郡星田村は前將軍德川家康の本營を置きたるところ此れは同村新宮山麓の新景なり

個の內、殘れるもの、九千四百七十六個、幸村、

『扨ては、城內に入りたる武士は、七千十六人、雜兵は、二萬八千二百四十六人なりしよ』

何の苦もなく、其員數を知る。

幸村、亦、續いて、城中に入らんとす、東軍の、備なきに乘じて、來り迫らんことを虞れ、天王寺附近の土民を、招き寄せて、

『我等、城に引き入らば、關東勢、直に、馳せ來つて、亂暴狼藉に及ばんこと、必定なり、斯くては、汝等の難儀なるべし、これを防がんとならば、今宵終夜、此五ヶ所の篝火を、焚き續くべし、敵は、我等、此處に籠ると見て、來つて狼藉することなからん、汝等の爲めには、此れに越したる名策なし』

と說き諭せば、土民等、我身の難儀と聞くより、異議なく、此れに應じ、老若、爭ひ來つて、篝火を焚き續く。

東軍、遙に此火影、人影を見て、城兵なりと思ひ、皆、敢て、來り迫らず、幸村の奇計、果して、其圖に當る。

六〇　家康の激厲（一）

關東の兩將軍、復た旗を進め、秀忠は、千塚に次し、家康は、枚岡に宿す。

最後の決戰は、明日に在り、家康、使番佐久間河內守政實、軍監橫田甚右衞門尹松の二人を、井伊掃部頭直孝の陣に、遣はして、其軍狀を視せしむ、政實、先づ、馳せ還り、

『掃部頭、今日の一戰に、勝利をこそ得て候へ、川手主水、滿座七郎右衞門を初め、大將分のもの、多く討死仕つり候、明日の御先手を仕つらんこと、思ひも寄らず、餘人へ、仰付けられ給ふべし』

と述ぶれば、家康、聞かざる爲して、

『今日は、中々、精出したり』

と獨語ちつゝ、政實の方を、見向きもせず、斯かる所へ、尹松、亦、馳せ還り、

『河內守より、早、言上仕つり候はん、掃部頭は、今日の合戰に、大利を得て候へば、中々以て、勇々しき體に候』

星田　其二
此れは河内國北河内郡星田村新宮山の麓より田岡山を望むの光景

と左も勇まし氣に、述ぶれば、家康、氣色、忽ち、快然として、

『左もあらん』

と言ひつゝ、打ち頷づく、尹松（たゞまつ）、少しく、膝を進めて、

『なれども、恐れながら、此處は、御分別どころかと存じ奉つり候、今日の合戰は、中々以て、目覺ましく、井伊家歴々の勇士も、數多、討死仕つり、軍勢も、亦、殊の外、疲勞の體に候、明日の御先手とても、其身は、勇んで、相勤め候はんも、新手の城兵に、駈合はせての一戰は、如何候はんか、誰れか、餘人と、御振り替へあらせ給はんこそ、然るべけれ、去りながら、掃部頭に於ては、容易に、合點仕つるべしとも存じ候はず、御使番を以て、強て仰せ下され給ふべきや』

と述ぶれば、家康、又、

『左もあらん〳〵』

と答へて、再び打ち頷づく。

家康、既に、直孝の軍況を聞き、又藤堂和泉守高虎、水野日向守勝成等の軍にも、死傷多かりしと聞きて、胸を痛め、

『今日の合戰に、木村、後藤、薄田等を、討ち取りたると雖も、城中には、尚、眞田左衞門佐を初め、伊木、津川等の面々あり、其軍勢も、まだ六七萬はあるべし、特に、明日は、眞田が手詰の一戰に及ぶべしと申せば、必定、其鋒先も鋭からん、身命を捨てゝ、働くべきもの、二頭、三頭なくては、叶ふまじ』

と思ひつゝ、彼れか、此れかと、先鋒の將を擇ぶ。

時に、諸將、續々、來りて、戰捷を賀し、皆、次室に控ふ。

家康、既に晩餐の膳に向ひつゝ、諸種の報告を聞みす、如何にしけん、風もなき蠟燭、頻りに流る、侍臣、これを取り換ふること、兩三度に及べども、尚、流れて、止まず、

家康、

『本多出雲持參の蠟燭あらんに、それ點せよ』

と命ず、侍臣、

『此蠟燭こそ、出雲守獻上の品に候へ』

と答ふれば、家康、

『ナニ、出雲獻上の品とや、蠟燭までが、流れて、役に立たぬぞ』

と叱す、本多出雲守忠朝、時に、來りて、次室に在り、斯くと聞くより、思はず、ハラ〳〵と、涙を垂れ、其儘、突と馳せて、我が陣に、立ち還る。

忠朝は、中務大輔忠勝の二子にして、美濃守忠政の弟なり、驍名、夙に高し、十八歳の時、關ヶ原の役に從うて、奮戰し、功を以て、上總大多喜五萬石を食む。

去年の役、忠朝、城東今福に陣す、十二月七日、家康、此れに、前進を命ずれば、忠朝、

『某の陣前には、大沼ありて、進みがたし、攻口を、御取換へ、給ふべし』

と請ふ、家康、怫然として、

『呆氣たることを、申すものかな、汝が父忠勝ならば、斯樣の事をば、申すまじ』

と叱すれば、忠朝、赤面して退く。

既に、昨年の不興あり、又今日の一言あり、忠朝、我が陣中に、還るや否や、直に、諸臣を召して、聲を顫はしつゝ、

『我が不肖より、重ね〳〵、亡父の名まで、汚がせしこそ、無念至極なれ、今は、生きて、人に面を合はせがた

星田　共三
此れは河内國北河内郡星田村の新宮山にして家康の旗掛松此處に在り今は枯れて存せず家康の營址平井家を距ること約五町

し、明日の合戰には、思ふ存分に、働きて、討死せんと存ずるなり、汝等、我れに、一命を差し出さんや、如何に』

と問へば、諸臣、

『何とて、一死を惜み候はんや、必ず、冥途黄泉の御供、仕つり候べし』

と言ひ放ちて、即座に、連判の誓紙を獻ず。

忠朝、取つて、之を見れば、加藤忠左衛門、大屋作左衛門、藤井治右衛門、臼杵七兵衛以下、名を連ぬるもの、四十四人、獨り、老臣小野勘解由、これに與からず、忠朝、大に怒りて、屹と、勘解由に向ひ、

『こりや勘解由、汝は、憶病者ぞ、祿盗人ぞ、唯今限り、暇を遣はす、疾く〳〵、此處、立ち去れや』

と叱咤すれば、勘解由、落ち付き拂ひて、

『殿、何事の候て、左様に仰せられるぞ、勘解由、一圓、合點仕つりがたし』

と答へて、恐るゝ色もあらず、忠朝、益〻怒りて、

『何事とは、何事ぞ、諸人、必死を極めて、我れと與に、

討死せんと申し、これ此通り、神文まで、差し出したるに、汝、我が家老として、高祿を食みながら、獨り、此れに取り合はず、斯くても、尚、憶病者にあらずと申すか、疾く去れ、遲々すれば、手は見せぬぞ』

と威丈高に罵れば、勘解由、忽ち、カラ〳〵と笑ひ、

『ホホウ、何事かと存ずれば、其儀にて候ひけるか、勇士の戰場に於て、討死せんことは、豫ての覺悟に候、他人は、存ぜず、某に於ては、若年より、合戰に出づる度毎に、只の一度も、生きて還らんと存じたることの候はず、今日とても、其通りに候、何を事々しく、神文を差し出すことや候、申す迄もなく、明日の働きは、三ケ條に極まつて候、上は討死、中は城の一番乘、下は高野山、只、これ丈に候、殿、今日の恥辱を、思召して、討死し給ふに、家老たる某一人、赤面かゝへて、遁げ歸られ候べきか、言はずとも、知れたる事に候はずや』

と言ひ切れば、忠朝、釋然として、

『能くぞ申せし、左らば、明日は、主從倶に、死途の山に登らん』

と言ふ時、家康の本營より、軍使、馳せ來りて、

『明日、天王寺表の御先手、仰付けらる、左様、御心得得へ』

と告げて、馳せ歸れば、忠朝、

『扨ては、眞田を、切り崩すべき役目ぞ、好し〳〵、魂限り働きて、討死せん』

と言ひつゝ、勘解由と、顏見合せて、莞爾として、打ち笑む。

六一　家康の激厲（二）

小笠原兵部大輔秀政、亦、枚岡の本營に、伺候して、次の室に在り。

家康、尚も、諸報告書を讀みつゝ、晩餐を喫す、給仕の小小姓、書類を踏まんことを恐れ、廊下を廻りて、家康の側に到れば、家康ジロリと、其顏を見遣りて、

『汝は、小笠原兵部に、能く似つるものかな、道を廻はり、時を移して、イザと言ふ時の、間には合はず』

と叱し、尚も、次室に聞えよがしに、聲を高めて、

星田　其四
此れは星田村に於ける妙法池にして新宮山麓に在り

『あの兵部の祖父は、大膳大夫長時とて、弓矢の道に秀で、父強敵武田信玄を相手として、武勇を爭ひ、父の右近大夫貞廣も、亦、勇猛無双にして、武略、父にも優りしものぞ、然るに、兵部は、其子と生れながら、今日の振舞は、何と申す態ぞ、足場を選んで、遠く廻はり、若輩の榊原遠江に、先を越されし始末にあらずや、それに較ぶれば、兵部が嫡子忠脩（たゞなお）は、見上げたものかな、今度は信州松本に留守すべきを、我が軍を助けんとて、態々上洛せり、我が曾孫を褒むるにあらねど、流石に、忠脩は、感心なり』

と語るを、秀政、次の室にて、殘らず、聞き取り、

『我れ、御當家の御緣に連なりて、粉骨碎身せんと存じながら、藤田能登守の一言に、誤まられて、由なき迂回をなし、終に、榊原遠江守の爲めに、先を越されしこそ、返す〳〵も、無念なれ、弓矢の冥加も、既に、盡き果てたり、明日は、武勇を振うて、花々しく、討死せん』

と思ひ定め、其儘、我が陣營に、還り來られば、間もなく、家康の許より、軍使、馳せ來り、

『明日、天王寺表の御先備本多出雲守相備、申付くるとの御諚に候』

と告ぐ、秀政、諸臣を招きて、

『明日は、我れ、討死せんと存ずるなり、汝等、必死に働きて、敵の備を、切り崩し、我が今日の恥辱を、雪ぐべし』

と命じ、直に、忠朝の陣に到りて、

『申すも、詮なしと雖も、今日、藤田能登守の爲めに、不覺を取りしこそ、無念至極に候へ、明日の合戰には、一尺を進むとも、一寸も退き申すまじ』

と語れば、同氣の忠朝、

『某とても、同然に候、生きて、人に面を對はせ候まじ』

と述べて、俱に死を約す。

忠朝の兄美濃守忠政は、道明寺に在り、忠朝、馳せて、石川の堤上に到り、忠政の子中務大輔忠刻、甲斐守政朝、庸之助の三人を、招き寄せて、

『今日、城方より、討つて、出でたる毛利眞田をば、何とて、當手に於て、討ち留めざりしぞ、誠に、本田家の名折なり、向後とても、武勇の道は、必ず、祖父兵部大輔殿を、手本と致し候へ、我等も、明日は、天王寺表の御先手を、仰付けられたり、生前の喜悅、死後の面目、此上もなし、天晴、忠戰せんと存ずるところぞ、此儀、美濃守殿へ、御傳へ候へ』

と語り、忠政の陣中より、贈り來れる酒を酌んで、それとなく、永訣の意を告げ、夜半に及んで、還り來る。

忠朝、秀政の二人、既に、死を決す、其鋭鋒、如何ばかりぞ。

六二　家康の激厲（三）

家康、既に、本多出雲守忠朝を以て、天王寺口の先鋒となす、更に、越前少將忠直、前田筑前守利常の中を以て、岡山口の先鋒となさんと欲す。

忠直は、年少にして氣鋭、容易に、人言を容れず、前夜より、四條畷の營に於て、酒を煽り、終に、六日の戰に會せず、家康、乃ち利常を以て、先鋒となす。

忠直の老臣本多伊豆守富正、本多飛彈守成重の二人、未だ

之れを知らず、相携へて、忠直の前に、立ち出で、

『今日、八尾、若江の合戰に於て、御先手の藤堂、井伊等、嚴しく戰ひ、手負、死人も、少からず、隨つて、御先手は、別人に仰付けらるゝ由、其噂の候、殿は、大御所の御孫と言ひ、御大祿の御身と申し、一際、御働きなくては、叶ふまじく候、然るに、今日の合戰にも、御出合ひ遊ばされざりしこと、返す〳〵も、口惜しき次第に候はずや、明日は、是非に、先陣を申し請ひ、晴れやかに、御城乘りあらんこと、肝要に候はん、能く〳〵、御思慮あらせ給へ』

と諫むれば、忠直、

『我れも、左こそ思ふなれ、汝等兩人、急ぎ、御本陣に、馳せ往きて、此儀、大御所に、願ひ奉つれ』

と命ず、富正、成重の二人、直に、馬を驅つて、枚岡の本營に、馳せ往き、本多上野介正純に就て、執達を請ふ。家康、チラリと、二人の顏を、見るより、正純を召して、

『あれに居るは、何者ぞ』

と問ふさま、常にもなく素々し、正純、ハッと、首を下げて、

『越前家の兩本多に候』

と答ふれば、家康、

『越前の者共、今日は、晝寢でもしつらん、今頃、何しに參りしぞ』

と言葉荒らかに問ふ、正純、

『別儀にも候はず、明日の御先手を、承はらん爲め、其御願ひに、參候仕つりて候』

と言へば、家康、冷然として、

『左樣か、其儀ならば、先刻、既に、加賀の利常に申付けたり、此方には、用なしと申して、逐ひ還せよ』

と告げ、更に、正純に向ひて、

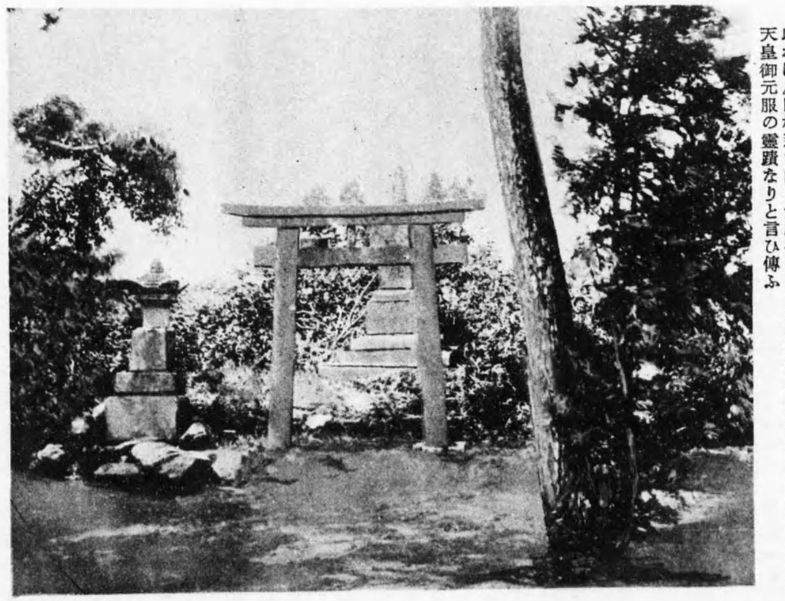
『今日の合戰に、藤堂、井伊、水野、榊原を初め、小身の面々まで、皆、必死に、働きたりと申すに、越前の者共は、彼の合戰をも知らで、今まで、何を爲しつるぞ、忠直の父秀康は、我子ながら、天下無双の猛將にして、剛敵の上杉さへも、聞き怖ぢしたるぞ、忠直は、其子と生れて、大國を領し、大軍を持ちながら、肝腎の合戰に

も、出合はざるやうにて、何の役に立たせる積りぞ、昨年、利常と並んで、眞田丸を攻めたる時にも、加賀勢よりは、其働き、少しく劣りし由に、聞き及び、今、若し加賀勢と並んで、先手を勤むるとも、又々憶病を働きて、加賀勢に、先を越されなば、祖父たる我れまでの外聞に、係かるべきぞ、越前の者共に致しても、先陣に在りながら、他家に、先を越されては、武道も、立ちがたからん、斯くては、家人共まで、殘らず、靑道心となるの外あらじ、それよりは、矢張り、後から、ボツ〳〵と押すが、安全なるべし、捨て置け〳〵』

と言ひつゝ、口を開きて、カラ〳〵と、打ち笑ふ。

意外なる不首尾に、富正、成重の驚愕、大方ならず、早々、馳せ還りて、逐一復命すれば、一刻短慮の忠直、見る〳〵、火の如くに憤ほり、

『扨ても、思ひの外なる仰せを、承はるものかな、忠直の武運も、盡き果てたり、今は、生きて、何にかせん、無二無三に、敵陣に、押し寄せて、潔よく、討ち死せん、イヤ〳〵、加賀勢に劣ると仰せられしこそ、死後までの



星田　其五
此れは星田村新宮山の元服碑にして家康の旗掛松此邊に在り此地は應神天皇御元服の靈蹟なりと言ひ傳ふ

無念なれ、此上は、大軍の加賀勢に、突き入りて、執れが強く、執れが弱きかを、御覽に入れ申さん、各〻諫言無用ぞ』

と躍り上がりて、罵しるさま、狂氣の如し。

左しもの富正、成重等、唯、呆氣に、取られて、暫し、言葉もなし。

忠直の弟伊豫守忠昌、時に、年十九、徐かに、進み出でて、忠直に向ひ、

『這は、仰せとも、覺えざるものかな、他家、他門のものならば、イザ知らず、大御所の孫たる我等、左樣なる不了簡を仕つらんこと、甚だ以て、然るべからず、上總介殿を初めとして、兎角の疑ひを受くるもの〻今日、若し、味方の陣中に、押し寄せて、雌雄を決し給はゞ、必定、叛逆の汚名を、蒙むり給はん、斯くては父君の御名をも汚する道理に候はずや、左程、御無念に、思召さば、軍令を破つて、眞先きに、押し進み、天晴、城乘りして、武勇を天下に顯はし給へ、左すれば、今日の汚名も、自から雪がれ候はずや、萬一、武運、拙くして、合戰に、打ち負けなば、其時こそは、主從、枕を並べて、潔よく、討死仕つり候べけれ』

と諫むれば、富正、成重等、ハタと、膝を拍ちつ〻、

『天晴、金玉の御名論に候ものかな、今日に於ては、此れに優したる手段とても候はず』

と說けども、忠直、未だ兎角の事を言はず、富正、重ねて、

『然らば、軍師、武者奉行を召されて、事の可否を、問はせ給へ』

と言へば、忠直、實にもと頷づきつ〻、命じて、軍師吉田修理重利、武者奉行岡部豐後守の二人を召す、二人は、老功を以て、夙に、諸人の爲めに、推重せらる、忠直、

『我れ、明日の合戰に、御先手を、申し請ひしに、大御所、曾て御許しなきのみか、却て、我れを憶病なり、卑怯なりと仰せられしこそ、無念至極なれ、此上は、如何にせば、然るべきか、兩人の心底、包まず、申し述ぶべし』

と言へば、二人、富正より、篤と家康の言葉を、聞き質して後、忠直の方に、向き直り、

『如何さま、御當家は、第五陣、加賀家は、第六陣なるに、明日の先陣を、加賀勢の爲めに、取られ候ひては、御當家弓矢の瑕瑾たること、勿論の儀に候、此儘、指を啣へて、止むべきには候はず、我等兩人の愚存を申さば、今日、取らせ給ふべき御手段、只、三ヶ條より外は候はず』

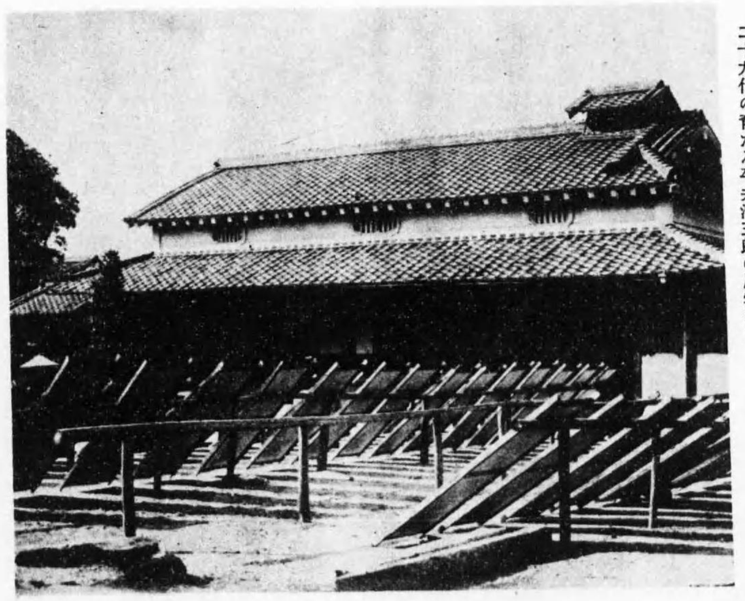
と陳じ掛くれば、性急の忠直、

『シテ〳〵、其三ヶ條とは』

と言ひつ〻、思はず、膝を進む。

修理、豐後守の二人、徐かに、四方を、見廻しつ〻、

『左ればに候、御軍令を破つて、第一番に、城に乘り、死力を盡して、御一戰あらせ給ひ、若し、敵はざれば、總切死と心得申すべき事、是れ一つ、越前の總人數、盡く、武道を捨て〻、高野山に入る事、是れ二つ、急ぎ、越前に、馳せ歸つて、先君以來、御當家を慕ふものを語らひ、大阪、越前、關東と、三國鼎足の勢ひを張る事、是れ三つ、此外には、差當り分別も候はず、但し、此三つの內、高野山に入らん事は、女々しくして中策、越前



星田の本營
河內國北河內郡星田村大庄屋平井清貞方は家康の本營を置きたる處にして邸內に營址の碑あり舊幕時代には朱印地數十石を附せらる此れは清貞二十九代の裔たる平井治三郎の居宅なり

へ退かん事は、逆意にして下策に候、唯、城乗りせん事は、法令を犯すと雖も、勇々しくして上策に候、此三ケ條の内、何れなりとも、御心に叶へるものを行はせ給へ、他軍の後より、押さんこと、最も然るべからず候』

と說き立つれば、忠直、

『然らば、上策を取り、軍令を破つて、眞先に、城に乗り入らん』

と告ぐる言葉に、決意あり、二人、

『左らば、我等兩人に任せ給へ、時節柄、短夜の事にも候へば、此儀、御決定の上は、今より、直に、御用意あらせ給ひ、天王寺へ、眞先に、押し寄せ給ふべし、萬一、後日、御咎めも候はゞ、修理、豐後守の兩人、大御所より、御上意を蒙むりしと、打つて出でしと仰せられ候へ、某等兩人さへ、御咎めを蒙むり候へば、御家に障はらんこと、露ばかりも候まじく、是れにて、事は、濟み候べし、イザ、左らば、用意を整へて、先陣仕つり候はん』

と言ひ切つて、忠直の前を退く、一死、主家の爲めに、盡さんと欲するの決意、其辭色に露はる。

二人、次の室に入りて、富正、成重に向ひ、

『我等二人、眞先に進み候べければ、御兩所にも、後より、押し給ふべし、大御所の御言葉を、察するに、此れには、深き仔細の候べし、努め〳〵、御怨みあるべからず、抑〻明日の一戰には、城兵、皆、死物狂ひに働かんこと、必定に候、別けて、眞田左衞門佐を初め、七組の面々、死力を盡くして、押し懸り候はゞ、御麾下とても、危しとの御懸念も候はん、御當家は、人數も多く、武勇も優れ候へば、尙、必死の上にも、必死を極めしめんとの御謀略より、御心にもなき事を仰せ出でて、殿を初め、一同の志を勵まし給へるものに候べし、左れば、假令、御軍令に背き給へばとて、決して、御咎のあらん筈も候まじく、御心置きなく、忠戰を勵み給へ』

と說き示せば、富正、成重の二人、忽然として、目の覺めたる如く、

『いしくも、心付かれたり御兩所の思召は、左こそ候べけれ、此上は、心置きなく、奮戰候はん、去りながら、此に一つの難儀あり、加賀勢、既に、先陣たるからは、却々、一歩も、先きへは、通すまじ、此儀は、如何に』

と言へば、二人、莞爾として、

『御軍法をさへ恐れざる面々、何ぞ、相備を、恐れ申すべきや、加賀勢、若し、押し止めなば、兎角の問答は、無益なり、只、無二無三に、押し通り候はん』

と言ひ捨てゝ、急ぎ、其陣に、馳せ還る。

既に、忠朝、秀政の決心あり、今又、忠直の憤慨あり、家康の計略、益〻効あり。

六三　家康の激厲（四）

家康、既に、本多出雲守忠朝を以て、天王寺口の先鋒と定め、前田筑前守利常を以て、岡山口の先鋒と定む。

是に於て、軍使を、平野なる藤堂和泉守高虎、井伊掃部頭直孝の陣に、遣はして、

『今日の働き、神妙に候、明日は、將軍家御麾下の先備として、忠戰を勵むべし』

との命を傳ふれば、二人俱に、異議なく、命に應ず。

家康、又使番間宮權左衞門伊治、目付豐島主膳信滿を、道明寺なる水野日向守勝成の陣に、遣はして、

『今日、數度の戰ひに、盡力、少からず、明日は、旗本の先隊として、休息がてら、住吉に陣すべし』

との旨を傳ふ、勝成、今日の戰鬪に、眞田左衞門佐幸村、毛利豐前守勝永等を逸して、痛憤、言ふべからず、

『イデ〳〵、明日は、思ふ存分に働きて、天晴、敵味方の目を、驚かさん』

と思ひ極めし折柄、計らずも、此命に接して、赫と怒り、

『何と申さるゝ、近き敵を捨てゝ、遠き住吉へ參れとの儀に候よな、人は、知らず、勝成に於ては、一死を期して、戰場に臨みたるものに候ぞ、何しに、人の合戰を、餘所に見て、休息せんや、如何に御兩所、斯樣の仰せを蒙むらば、早速、御請け仕つるべき勝成と存ぜられて、御使ひに參られたるや、若し、左樣に存ぜられては、弓矢八幡、此場は、無事に還し申すまじ、返答如何に』

と陣刀、押つ取りて、詰め寄る、信滿、怵へず、

『這は、日向守殿の一言とも、存ぜざるものかな、勇士、戰場に在つては、生命を、鴻毛よりも、輕んずること、

弓馬の常なり、誰れか、其を存ぜざるものや候、御邊只今の一言、一季半季の青侍か、左なくば、當季新參の者共の申すところ、數代高恩を蒙むりたる水野殿の言葉とも、存ぜられず、能く〳〵、御考へ候へ、一身の功名を、心に掛けて、全軍の利害を思はず、疲れ果てたる士卒を以て、新手の敵軍に當り、若し、散々に、敗北を取らば其身の恥辱は格別、實に、兩御所の御外聞に候はずや、それをも察せず、只今の荒言、甚だ以て、心得がたし、今一言、申され候へ、如何にも、勝負を決し候はん』

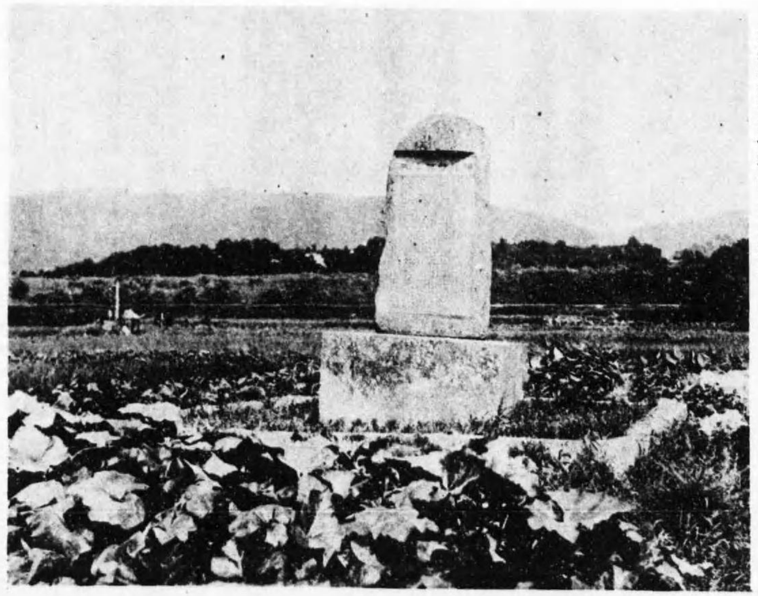
これも、刀を按じて、詰め寄れば、慧敏の勝成、忽ちに、色を和らげて、

『如何さま、此れは、勝成の疎忽なり、上意、畏まり奉つる』

と答へて、二使を還す、左れども、機を見て、一快戰せんと欲するの念、勃々として、禁ずること能はず。

勝成の祐筆廣田儀太夫正家、此日、片山の戰に、奮鬪して、敵の兜首を取る、心の中にて、

『明日は、住吉に向ひ給ふと雖も、天晴、敵と奮戰して、



星田營址の碑　其一
河内國北河内郡星田村平井治三郎邸内に於ける家康營址の碑なり昔時は其宅地六百二十坪ありしと云ふ

今日の鬱憤を、散じ給はんは、必定なり、斯くては、御身の上も、心元なし、御側を離るべきにあらず』

と思ひ極め、勝成に向ひて、

『仔細の候、明日は、御馬廻へ置き給へ』

と請へば、勝成、早くも、其意を察して、之れを許す、諸士、

『儀太夫、今度の御供は、今日の働きにて、事足れりと思へるにや、明日、馬廻に居らんと言ふは、卑怯なり』

と嘲り笑へども、正家、敢て、心にも介せず、只、一死、其主を護らんことを期して、天の明くるを待つ。

枚岡の本營に於ては、諸般の命令、粗〻終る、本多上野介正純、出で來りて、家康に向ひ、

『明日の御本陣は、何方に候や』

と伺へば、家康の胸中、既に、成算あり。

『明夜か、明夜は、茶臼山に備ふべし、總軍、去年の陣所々々に、乘り入るべし』

と無雜作に命ず、正純、心の中にて、

『茶臼山には、眞田左衞門佐、出張すべしと申すに、斯

様の上意あるこそ、心得がたけれ』

と訝かりつゝも、軍令、固より、背くべきにあらず、直に、其旨を、諸軍に命ず。

震天動地の大活劇、今や、愈〻一夜の後に迫る。

六四　城中の軍議（一）

城中に於ては、後藤又兵衞基次、薄田隼人正兼相、木村長門守重成、長曾我部宮内少輔盛親等の、兵を率ゐて、道明寺、若江の諸方面に、出軍してより、皆、首を伸ばして、吉報の來るを待つ。

心、此に在れば、樹を搖かすの風聲も、吶喊の如く、野を捲くの雲影も、砂煙に似たり、將士、皆、血湧き、骨鳴る。

既にして、戰報、次第々々に達す、一報は、一報よりも委し。

午の刻過ぐる頃ひ、盛親の軍使、馳せ來りて、敵の首級を獻ず。

續いて、重成の軍よりも、亦、使者來りて、同じく、首級を獻ず。

秀頼、欣然として、親から實檢し、命じて、三の丸西大手に梟す、就中、藤堂仁右衛門高刑、藤堂宮内高吉、藤堂新七良勝の首級は、高虎と同苗なるを以て、特に、三寶の上に載す。

城中の士卒、集まり見て、勇み悅び、軍氣、頓に振ふこと百倍。

稍〻ありて、形勢、忽ち、一轉し、片山の敗報、先づ達し、道明寺、八尾、若江の報敗、亦、續々達す。

秀頼、大に驚き、頻りに、急騎を發して、眞田左衛門佐幸村等を、召還す。

黄昏に到りて、盛親、只、從兵六七騎と與に、玉造門に、馳せ歸る、人々、迎へて、

『八尾表の容子、如何候ぞ』

と問へば、盛親、

『此樣の爲體に候』

と言ひ捨てゝ、城中に、馳せ入る。

此日、大將として、出軍せるもの四人、基次、先づ死し、兼相、重成、亦、死して、其還り來るもの、盛親、唯一人のみ。

城兵、敗を聞きゝ、愕然として、色を變じ、復た、皆、生色なし。

戌の刻の頃ひ、幸村、諸方の敗兵を收めて、城中に、入る。

星田營址の碑　其二

此れは星田營址の碑を大きく撮影せしもの小田原城主大久保忠貞侯の諡文福山城主阿部正精侯の書なり

七隊長速水甲斐守守久、中島式部少輔氏種、野々村伊豫守雅春、堀田圖書助正高、眞野豐後守頼包等、深く、感嘆し、直に、打ち揃うて、秀頼の前に出で、

『大野父子の軍略、盡く、齟齬して、後藤、木村の諸勇士、皆、討死仕つり候へること、如何にも、無念至極に候、幸ひに、眞田左衛門佐の在りたればこそ、諸方の人數を繼めて、城中に、引き入りて候へ、左もなくば、皆、擊ち破られて、四方へ、散亂せしこと、必定に候』

と言ひつゝ、ジッと、秀頼の顔を、見上げて、

『斯くなり候も、皆、是れ、大野父子の、軍略を誤まりたる爲に外ならず、返す〳〵も、口惜しき次第に候はずや、事、既に、遲しと雖も、左衛門佐を以て、城中の總大將となし、其采配に依つて、花々しく、最後の御一戰に及ばせ給へ、某等、亦、其指揮に從うて、快よく、討死仕つり候べし、重ねて、大野父子の愚策に、惑ひ給ふこと勿れ』

と涙と與に、諫むれば、秀頼、豁然として、初めて、夢の覺めたるが如し。

『左らば、我が所存を告げたる上にて、兎も角もせん、疾く〳〵、面々を、此れへ、召し寄せよ』

と告げ、命じて、諸將士を招く。

頓て、召しに應じて、千疊閣に來り入るもの、眞田左衛門佐幸村、大野修理亮治長、大野主馬助治房、郡主馬首良列、津川左近允親行、明石掃部助守重以下數十人、秀頼、愁然として、一同を見渡し、

『我れ、不肖にして、人の忠奸、事の理否を辨ぜず、片桐兄弟の忠臣を卻け、眞田、木村、後藤の武略を用ひず、謀破れ、戰敗れて、終に、今日の非運に、陷いれるもの、皆、是れ、秀頼が致すところ、復た誰れをか怨み、誰れをか尤めん、思へば、今日の一戰に、木村、後藤等の勇士を失へること、返す〳〵も、殘念の至り、面々を見るにつけても、今も、其俤の眼前に見ゆる心地するぞや』

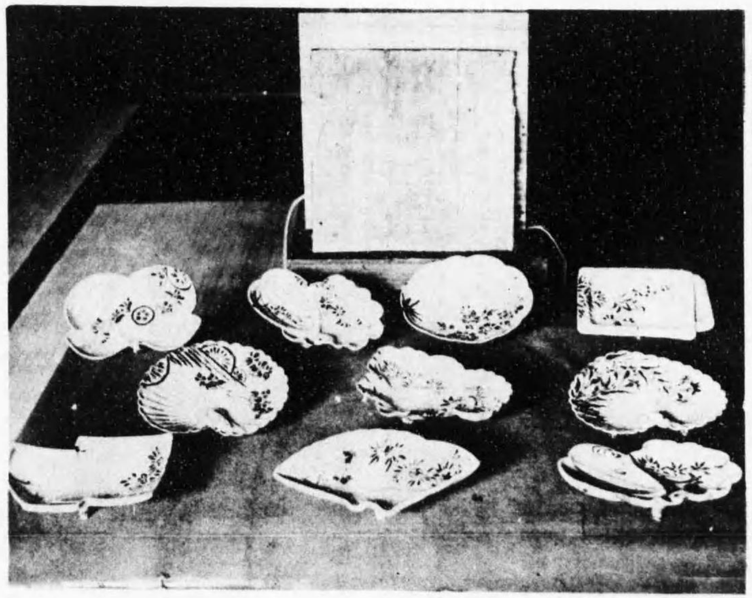
と言ひつゝ、落涙、數行に及べば、一座、皆、聲を呑みて、仰ぎ見るものなし、秀頼、重ねて、

『諸方の合戰、盡く、敗北する上は、敵の大軍、頓て、此れへ、押し寄せ來らん、秀頼の運命、早、明日に極ま

りたり、これに列なる面々、我れに於ては、左せる恩義もなきに、各〻、皆、粉骨して、大敵に當り、聊かも、身命を惜しむの心なきこと、秀頼、死すとも、忘るゝことあらず、去りながら、秀頼の運命、既に、窮まりて、復た開くべきの時あらず、微運の我れに從うて、空しく、討死せんよりは、今夜、敵の來り圍まざるに先だちて、疾く〳〵、此處を落ちよかし、我れ、滿足にこそ存ずれ、少しも、怨みとは思はざるぞ』

と告ぐる語氣、自から沈痛の音を帶ぶ、幸村、少しく、膝を進めて、手を突き、

『御諚の趣、誠に、恐れ多くこそ、存じ奉つりて候へ、抑〻此座に罷り在るもの、恐れながら、御運の程を、存ぜざるには候はず、只、君の御選みに、與かりし有難さに、一命を抛つて、籠城仕つりたる儀に外ならず、今更、何とて、此處を遁がるゝの心候はんや、假し、又此處を遁がれ候へばとて、一旦、天下に敵對仕つりたる者共、爭かで、其罪を免かれ候べき、忽ちに、搜し出されて、縛首の恥辱を受けんは、必定に候、武士は、名をこそ惜



家康使用の器物 其一
河内國北河内郡星田村平井治三郎の所藏に係る德川家康使用の器物にして此れは其皿なり

み候へ、君の御馬前に於て、天晴、花々しく、討死せんこそ、我等一同の本懷に候なれ、左樣の仰せは、御無用に遊ばされ、御討死に就ての御詮義あらせ給はんこそ、肝要に候べけれ』

と述べ、終りて、屹と、一同の方に、打ち向ひ、

『此座の方々、慥かに、御聞き候へ、今後は知らず、今日に於ては、弓矢取つて、關東の兩將軍に及ぶものは候まじ、我等の此大敵を引き受けて、花やかに討死仕つらんこと、誠に、末代までも、武門の冥加に候はずや、生あるものは死し、形あるものは碎く、我等、此處を遁がれたればとて、何時までか、生き存らへ候べき、況してや、生きて、恥を受くるよりは、死して、譽を受けんこそ、中々に、武士の本意に候へ、此上は、一同、心を協せは、力を戮はせて、關東の大敵に當り、腕の續かん限りに働きて、天晴、潔よく、討死せんと存ずるなり、此儀如何に』

と呼はれば、一同、口を揃へて、

『仰せらるゝまでも候はず、我等、皆、其覺にこそ、候へ』

と言ひ放ちて、意氣、自から凛然たり。

秀頼、熟〻此體を見て、悅ぶこと、大方ならず、

『扨ても、天晴、頼母しき心底かな、秀頼、滿足に存ずるぞ』

と告げ、終りて、更に、幸村に向ひ、

『左衞門佐、今日の働き、神妙にこそ存ずれ、今更、事、晩しと雖も、明日の一戰、汝に、總大將を申付くべし、秀頼の名代として、諸軍を指揮仕つれ、我が生死は、只、汝の一心に、任せ候ぞ、近う參れ』

と告げて、盃を賜ひ、尙、金にて、桐章を付けたる猩猩緋の陣羽織、幷に朱柄に、金革の采配を取つて、手づから、幸村に授け、

『此采配こそは、父太閤の明智光秀を誅伐せし時より、賤ヶ嶽、九州、小田原、幷に朝鮮征伐の諸陣に、用ひ給へる吉例の品なれ、一つには、左衞門佐の忠心を賞し、二つには、諸臣の戰志を勵まさん爲めに、汝に取らすべし、汝、此采配を以て、全軍を指揮仕つれ』

と言へば、幸村、感涙に咽びつゝ、兩手に捧げて、推し戴く。

『扨ても、有難き御諚を、承はり候ものかな、武運の冥加、弓矢の面目、何物か、此れに過ぎ候べき、抑〻去冬、關東と御手切れに及ばせ給ひてより、諸事、盡く、齟齬して、今日の末運に、立ち至り候ひぬ、孔明、再び世に出づるとも、復た施すべき術とても候はざらん、況して不肖幸村の如き、何の奇計妙策ありてか、此危急を救ひ候べき、左れども、御諚、最と畏こく、一身の成敗利鈍を以て、辭退仕つるべき時には候はず、此上は、一死、君の恩命に報い奉つり候べし、願はくは、城中七八萬の士卒に對して、某の總大將を仰付けられたる事、及び某の下知に從ふべき旨を、御觸れ示し給ふべし』

と請へば、秀頼、

『此儀、道理なり、疾く〳〵、一同へ、告げ知すべし』

急に、命じて、城中一般の士卒に、觸れ示す、昔者、漢王の韓信を以て、大將となすや、壇を築きて、親しく、天地を祭る、今や、事急にして、此崇禮を用ふべくもあらず、今まで、

『左衞門殿、采配を取つて、指揮し給ふにあらずば、爭でか、關東の大軍を、引受けて、勝利を得べき、御家の滅亡せんこと、明日を出でず』

と思ひ居たる士卒、斯くと聞くより、俄然として、勇み立ち、

『此上は、心力を盡して、敵軍を打破らん』

と語り合ひ、悅び合ひ、惣物頭以上の面々、我も〳〵と、千疊閣に、集まり來るもの、又數十人。

『左衞門殿の事と申せば、例も、目の敵の如く振舞へる大野父子、今日は、如何なる顏やしつらん』

と思ひつゝ、何れも、上座の方を、見遣れば、治長兄弟、只、つくねんとして、坐するのみ、敢て、一言の異議をも、發せず。

稍〻ありて、治房、屹と、思ひ極めたる體にて、幸村の方に向ひ、

『治房、今は、何をか申し候はん、今日よりは、偏に、左衞門佐殿を、頼み奉つり、萬事、御下知に從うて、働き候はん、願はくは、一方の大將にも用ひ給へ、死力を盡して、敵に當り、快よく、討死を遂げ候べし』

と言へば、幸村、

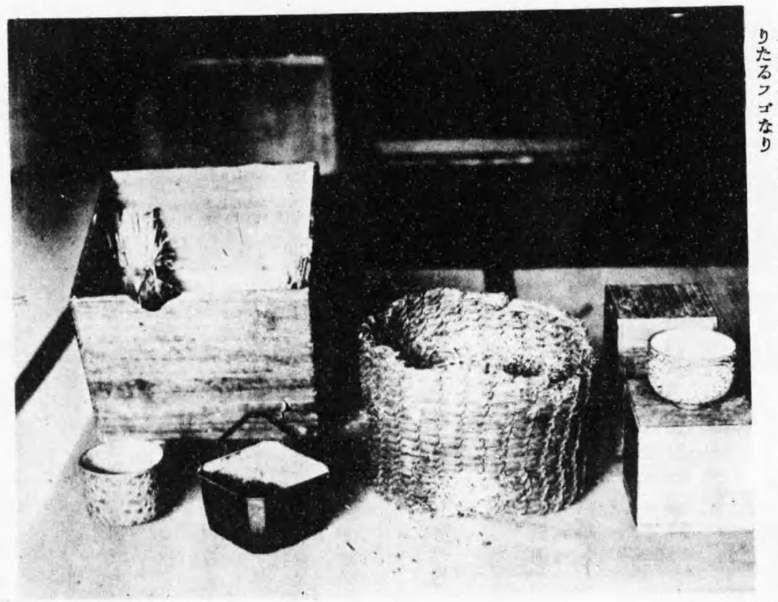
『潔よし其一言、斯くてこそ、先途の御用に、相立ち候べし、天晴、君の御爲めに、御盡し候へ』

と述べて、其志を勵ます。

六五　城中の軍議（二）

夜色、漸く、更けて、早、亥の刻を過ぐ、幸村、容を正して、徐かに、秀頼の方に向ひ、

『君、能く〳〵幸村の申すところを、聞召され候へ、是れまで、幾度か、言上候通り、平場の合戰に於て、大御所に及ばんもの、當時、日本國に覺え候はず、況して、敵は、勝ちに乘りたる大軍にして、味方は、勢ひの蹙まれる小勢に候、これと對揚の一戰に及びて、爭で、勝利を得るの望み候はんや、其難きこと、猫の額の物を、鼠の窺ふにも、過ぎ候はんか、去りながら、世の諺にも、窮鼠、却つて、猫を噛むと申すことの候、一概に、味方、



家康使用の器物　其二
此れも平井家に所藏する家康使用の器物にして湯呑、火鉢及び藁にて作りたるフゴなり

敗北すべしとも、限り候まじ、幸村、不肖と雖も、心を碎き、力を盡して、敵と、雌雄を決し候べし、返す〳〵も、幸村、討死せしと聞召されざる間は、御生害の儀、固く、御無用に候、それまでは、萬事、某の申す旨に、任かせ給ふべし』

と申せば、秀頼、

『左衞門佐の申すところ、道理なり、何事も、好きに計らへ』

と答へて、其意に任かす。

幸村、今は、平生の志望を達して、城中の惣大將となれり、必勝の算なしと雖も、最後の勇を示さゞるべからず、

『此上は、滿城の士氣を、鼓舞せんこそと、肝要なり』

と思ひ、屹と、一座の面々に向ひて、

『如何に各〻、幸村、既に、總大將たるべき恩命を蒙むる、何れも、皆、幸村の下知に從うて、進退せられ候へ、抑〻御運の決するところ、愈〻明日の一戰に在り、各〻の武名を、天下に顯すも、顯さざるも、只、此一擧に候ぞ、若し、敵の爲めに、あれ見よ、城中武勇の面々は、昨日の合戰に、討死し、後に殘れる者共は、皆、卑怯未練にして、合戰の法も知らずと、言はれなば、誠に、末代までの恥辱に候はずや、四面、皆、敵とならば、遁がれんにも、遁がれたく、降參せんにも、復た取次ぐ者も候まじ、所詮は、城外に於て、討死するの外なき我等の運命に候ぞ、此上は、花々しく、一戰して、天晴、武名を、天下後世に轟かさんこそ、武士たるもの〻本懷に候なれ、特に、明日は、我君にも、御出馬あらせて、親しく、諸士の働きを、御覽あらせ給ふべし、此一戰こそ、詰めの合戰、晴れの中の、晴れの勝負に候ぞかし、此時、奮戰せざれば、何れの時にか、奮戰すべき、義は、泰山よりも重く、命は、鴻毛よりも輕しとは、正しく、今日の時にて候ぞ、死すべき時に、死せざれば、死に優るの恥ありとこそ申し候へ、各〻一命を拋つて、故太閤以來の厚恩に報い給へ、如何にや、如何に』

と呼はる、辭氣、嚴厲にして、決意、色に露はる、一座の面々、孰れかは、感奮興起せざらん、

『總大將の只今の一言、誰とて、異存の候はんや、身命を拋つて、君の御爲めに、盡し候はん』

と口を揃へて、潔よく、言ひ放つ。

今まで、陰鬱なりし城中の士氣、俄然として、復た振ひ立つ。

是に於て、幸村、諸軍の部署を定む。

『左らば、是より、諸軍の陣立を、定め候はん、抑〻關東勢は、二手に分れて、大御所は、茶臼山に向ひ、將軍家は、岡山に向はれ候はんこと、去年の時の通りに候べし、依りて、幸村は、茶臼山に陣取りて、大御所に當り申すべく、大野主馬殿は、小橋の篠山に出陣して、將軍家に向ひ候へ、大谷大學、槇島玄蕃允、名島民部少輔、江原左近、藤掛土佐守、眞田采女、福島武藏守、片岡式部、吉田玄蕃、津田左京、結城權之助の諸手は、幸村が相備たるべく、伊木七郎右衞門は、幸村が與力たるべし、毛利豐前守、毛利式部少輔は、庚申堂の最寄に陣取りて、俱に、大御所の軍に當り、武田永翁、渡邊內藏助の二手は、其先手として、御働き候へ、明石掃部助は、去年、討死したる明石丹後守の人數を率ゐて、船場より、寺町筋を、勝曼寺の下へ掛かり、茶臼山の南へ、廻りて、安部野へ、押し出し、急に、大御所の後脇へ、押し寄せ候へ、必ず、其圖を拔かるゝことあるべからず、又長岡監物、山川帶刀、北川次郎兵衞、樫野勘解由、三浦飛驒守の五手は、主馬殿の先手として、篠山の最寄に、陣取り、平一面に、將軍家の軍勢に、馳せ入り候へ、御宿越前守二宮與右衞門、岡部大學、岡田縫殿助、中岡掃部助の諸手は、主馬殿の與力たるべし、七組の人々は、天王寺北手の藪陰に、兵を伏せて、待ち構へ、主馬殿の、段々に、城中に、引き退きて、將軍家の旗先の開くを見澄まし、第一番には、飯尾勘十郎、白樫主馬の支配せる伊東、青木の兩組、幷に堀田圖書助、第二番には、野々村伊豫守、眞野豐後守、第三番には、速水甲斐守、中島式部少輔等、段々に、押し寄せて、將軍家の旗先へ、打ち掛かり、新宮左馬助は、天王寺の東手に、陣取り、好き機會を見て、不意に、將軍家の旗本を、襲ひ候へ、又此に一大事あり、木村主計頭、これへ、御進みあるべし』

と告げ、木村主計頭宗明を、側近く、招きて、

『御邊に託すべき一大事あり、長門守の家臣中より、勇士三十人を選んで、中間の姿に變じ、敵の油斷に乘じて、將軍家の麾下に、突き入り候へ、必ず、仕損じ給ふべからず』

と命じ、又上座に、向き直りて、秀頼の方に、打ち向ひ、

『恐れながら、我君には、櫻の門に、御旗を建てさせ給ひ、茶臼山、岡山兩方の、合戰始まるを待つて、御馬を進めさせ給へ、御旗は、郡主馬首、御馬標は、津川左近允の御預かりたるべく、御先手は、大野修理殿、之れを率ゐて、天王寺毘沙門池の邊まで、進み給へ、若し、御旗を、望み見ば、味方の勇氣、忽ち、百倍するに、引き換へ、敵の士氣は、自から、怯み候はん、是れ、實に、萬死一生の一戰に候なり、左れども、若し、勝利、相叶はざる時は、御運も、早、是れまでと、思召され候へ』

と述ぶれば、秀頼、直ちに、これに從ふ。

城中の部署、此に定まる。

六六　東軍の進發

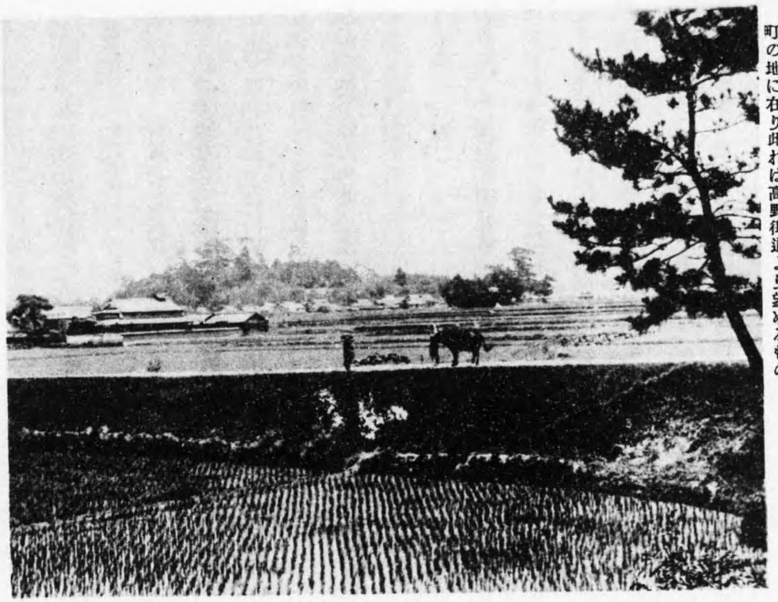
一大決戰の當日たる五月七日は、愈〻此に來る。

將軍秀忠、河内の千塚に在り、此日寅の刻を以て、旗を進め、若江、八尾の戰場を視て、岡山の方に向ふ。

先鋒は、前田筑前守利常にして、本多大隅守忠純、加藤左馬介嘉明、黑田筑前守長政、此れに續く。

第二陣は、藤堂和泉守高虎、井伊掃部頭直孝、細川越中守忠興等、左軍たり、本多縫殿助康俊、本多豐後守康紀、石川伊豆守貞政、蒔田權佐廣定、片桐主膳正貞隆、遠藤但馬守慶隆、本多越中守忠利等、其右軍たり。

阿部備中守正次、高木主水正正弘、水野隼人正忠清、青山伯耆守忠俊、松平越中守定綱、高力左近大夫忠房、渡邊山城守茂、土岐山城守定義、牧野内匠頭信成、板倉周防守重宗、永井信濃守尚政、井上主計頭正就、日根野織部正吉明、鳥居土佐守成次、安藤彦四郎重能、宮城丹波守豐盛、青山大藏少輔幸成、阿部修理亮正澄、及び本多佐渡守正信、酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝の兵等、麾下の先隊として、



忍岡　其一
河内國北河内郡甲可村字岡山の忍岡は德川家康の馬を駐めし處砂の東三町の地に在り此れは高野街道より望めるもの

此れに續き、大番、書院番、小性組、及び近習の諸士、左右を護る。

酒井忠世、土井利勝は、馬側に侍し、安藤對馬守重信は、後陣たり。

尾張宰相義直、駿河宰相頼宣の二軍、亦、其後より進む。

前將軍家康は、河内の枚岡に在り、此日卯の刻を以て發し、片山、道明寺の戰場を視て、天王寺の方に向ふ。

發するに先だちて、藤堂和泉守高虎、來り謁し、

『今日は、御具足を召され候べきや』

と申せば、家康、

『大阪の小伜を、討たんに、何の具足に及ぶべきや』

と答へて、甲冑を用ひず、茶色の羽織を著し、下括の袴を穿ち、輿に乘じて發す、復た戰場に臨むの體なし。

先鋒は、本多出雲守忠朝にして、眞田河内守信吉、其弟大内記信政、植村帶刀泰勝、須賀攝津守勝政、松下石見守重綱、淺野采女正長重、秋田城介實季、六鄕兵庫頭政乘、相備たり。

次は、小笠原兵部大輔秀政、其子信濃守政脩、大學助忠政、

松平安房守信吉、松平甲斐守忠良、牧野駿河守忠成、水谷伊勢守隆勝、保科彈正忠正光、仙石兵部少輔忠政、細川玄蕃頭興元、藤田能登守信吉、成田左馬助氏宗、丹羽五郎左衞門長重、內藤帶刀忠貞、立花左近將監宗茂、酒井宮內大輔忠勝、及び本多上野介正純の兵は、左より進み、松平丹波守康長、酒井左衞門尉家次、榊原遠江守康勝、稻垣平右衞門重綱は、右より進む。

本多正純、及び內藤掃部助正成、植村出羽守家政、板倉內膳正重昌以下の近臣、三十餘人、輿側に從ひ、本多佐渡守正信は、白袷に、茶色の羽織を著し、拂子を以て、飛蠅を拂ひつゝ、駕籠に乘じて、家康の輿後より進む。

大和口の先鋒水野日高守勝、及び本多美濃守忠政、松平下總守忠明は、住吉に向ひ、伊達陸奥守政宗、此れに續き、越後少將忠輝、亦、此れに續く。

京極若狹守忠高、京極丹後守高知、石川主殿頭忠總等は、枚方(ひらかた)、守口(もりぐち)を經て、備前島に向ひ、松平和泉守乘壽は、守口に向ふ。

總軍十數萬、旌旗、天に飜へり、人馬、野を掩ふ。

忍岡　其二
此れは忍岡に於ける津鉾神社石鳥居前の光景なり

六七　忠朝の出陣

天王寺口の先鋒本多出雲守忠朝、此日、眞先に、軍を進む。

忠朝の陣は、八尾に在り、丑の下刻を以て、軍裝を整へ、兵糧を喫む、士卒、皆、死を決して、

『今日こそ、天晴、勇戰して、花々しく、討死せん』

と思へば、士氣、彌やが上にも、振ひ立ちて、馬の嘶く聲、亦、勇まし。

忠朝、黑絲縅の鎧を著し、鹿角の前立打つたる兜を戴き、手には、蜻切を附けたる大身の槍を携ふ、他軍の爲めに、先んぜられんことを虞れて、

『用意は、未だか、疾くせよ』

と促すこと急なり、既にして、出陣の用意、全く整ふ。

『イザ、御出馬あらせ給へ』

と述ぶれば、忠朝、

『左らば、馬、引け』

と言ひつゝ、不圖、首を低れたる途端、兜の前立物の鹿角、憂然として、地に落つ。

小性大原長五郎、急ぎ、捨ひ取りて、兜に挿さんとすれば、固く、死を決したる忠朝、忽ち、快然として、

『面白し〳〵、角の落ちたるは、頓て、佛になるべき前表なるぞ、立てるには及ばず、捨て置け』

と言ひつゝ、カラ〳〵と笑ひて、別に、意にも介せず。

頓て、黃河原毛の愛馬を、曳き來れば、忠朝、ゆらりと、打ち跨がる刹那、馬、俄かに跳りて、忠朝、撞と、地上に落つ。

長五郎、急ぎ、扶け起して、鹿角を、兜の上に立つ。

此再度の不吉あれども、忠朝、平然として、尙、意にも留めず、其儘、又も、馬に跨がりて、八尾を發す。

曉色、蒼茫として、星斗、影、尙、燦たり、白地に、朱の立葵の旌旗、丸に、本の字の馬標を、眞先に、押し立てつつ、久寶寺より、鞍作を經て、平野に到り、奈良街道を、西へ〳〵と、馳せ進み、新在家、桑津を過ぎて、天王寺村に達す。

城將眞田左衞門佐幸村、自ら兵を率ゐて、茶臼山に陣す、

候騎、馳せ還りて、此由を報ずれば、忠朝、

『左らば、疾く、進めよ』

尚も、兵を進めて、ヒシ〳〵と、茶臼山の南方に到る。

前面を見れば、四十餘間の沼澤あり、小丘、其左右に横はる、忠朝、

『此處こそ、屈竟の場所なれ』

命じて、陣を此丘上に張る。

相備の諸軍、亦、續いて、馳せ來る、眞田河内守信吉、其弟大内記信政は、右手に陣し、淺野采女正長重、秋田城介實季等は、左手に備ふ。

既にして、天、全く明く、顧みて、後方を見れば、小笠原兵部大輔秀政は、右より、越前少將忠直は、左に在り、皆、茶臼山に面して控ふ。

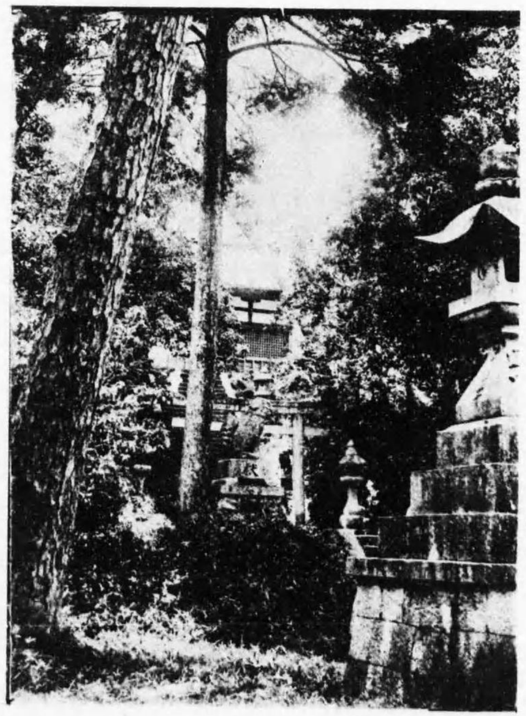
六八　忠直の進軍

越前少將忠直、亦、死を決して、先登せんと欲し、丑の刻を以て、軍を進む。

吉田修理亮、岡部豐後守、先鋒たり、本多飛驒守成重、第二陣たり、忠直の二弟伊豫守忠昌、出羽守直政、此れに續き、少將忠直、其後より進む。

八尾の堤上に於て、兵を整へ、備を立て、列伍、正々として、久寶寺より西に向ふ。

岡山口の先鋒前田筑前守利常の老臣本多安房守政重、其先



忍岡　其三

此れは甲可村字岡山の忍岡にして山上に津鋒神社あり老松脩杉鬱蒼たり

陣として、平野に在り、越前兵の、次を踰えて、進まんとするを見て、大に怒り、

『松平筑前守、今日の先陣を承はる、何人と雖も、軍令を冒して、先づ、進むこと、相成らず、御控へ〳〵』

と制止すれども、此方は、更に、耳にも入れず皆、口々に、

『天下の軍令さへ、破つて、出陣する我々なり、何ぞ、加賀勢の制止を、恐るべきや、打ち破つても、押し通れ』

と言ひつゝ、槍を執つて、無二無三に、押し進む、政重、益〻怒り、

『好し〳〵、其儀ならば、一人たりとも、通すべからず、若し、理不盡に、乘り切らば、容赦なく、打ち取れや』

と呼はり〳〵、槍を並べ、銃を揃へて、備を固むれば、第二陣の山崎閑齋、亦、兵を進めて、之れを援く。

越前兵、斯くと見て、何かは、躊躇せん、亦、銃隊に、命じて、加賀兵を、猛撃せんとす、危機、既に、眼前に、迫る。

忽ち、一騎あり、越前兵の中より、眞一文字に、馳せ來りて、

『加賀勢は、物にや狂ひ給へる、早々、道を開きて、御通しあるべし』

と呼はれば、加賀兵の中よりも、一騎、馳せ出でて、

『左申さるゝは何人ぞ、松平筑前守、當手の先陣たるからは、何者たりとも、ココ一歩も、通さんこと、罷り成らず、斯く申すは、筑前守先手の大將本多安房守政重なり』

と呼はり返す、越前方の武者、斯くと聞くより、甲を脱して、目禮しつゝ、

『扨ては、安房守殿にて候か、これは、越前少將忠直の先陣吉田修理と申すもの、筑前守殿にも、御存知あるべき筈に候、筑前守殿へは、如何なる仰せありしやを存ぜずと雖も、此方へは、岡山表の先陣は、參河守忠直相勤むべしとの御下知に候、公儀よりの軍令なるに、筑前守殿より、各方へ、左樣の仰せなしとは、近頃、粗忽の振舞に候ものかな、況してや、大事の敵を控へて、同士軍せんと致さるゝ條、甚だ以て、其意を得ず、此上は、御本陣へ、急使を立てゝ、屹と、言上候べし、左樣、御心

得あるべく候』

と言ひ放てば、政重、大に驚き、

『何と仰せらるゝ、參河守殿には、天王寺表の御先手を、仰せ蒙むられ候とや、陣中混雜の折柄、左樣の御下知は、承はらず、近頃、不調法の至に候、御本陣へ、御注進相成り候ては、主人利常の難儀とならんも、計りがたし、唯、此儘に、御人數を押され候へ』

と答へて、道を開く、修理、忽ち、色を和らげ、

『左申さるゝ上は、兎角、申すべきことにあらず、左らば、御免候へ』

と言ひ捨てゝ、平野を、押し通り、新在家、桑津を過ぎて、茶臼山の南方に到り、本多出雲守忠朝の左に隣りて、陣を十六段に分つ、右は、山本内藏助、太田安房守、多賀谷左近、本多丹下、笹沼大膳、高屋越後、荻田主馬の七陣、左は、吉田修理、岡部豐後守、齋藤民部、伊豫守忠昌、出羽守直政、本多富正、山川讃岐守、落合美濃守の八陣にして、少將忠直、其中央に控へて、陣を鶴翼に張る。

六九　東軍の陣營

此日、巳の刻過ぐる頃ひ、秀忠、若江より、平野に抵る。既にして、家康、亦、道明寺より、此地に、來り著す。秀忠、馬より下りて、蹲踞すれば、家康、輿中より、一禮しつゝ、

『大樹には、岡山へ、著陣せられ候へ、我れは、茶臼山に、陣取るべし、諸軍へは、何れも、去年の陣場々々に、著陣仕つるべきやう、下知せられ候へ』

と告ぐ、岡山は、大阪城を距ること、稍〻遠く、茶臼山より、一鞭、直に、城中に馳突するの便なるに若かず、秀忠の意、自ら前軍を督して、敵城を屠らんとするに在り、家康の言を聽きて、懌ばず、默然として、何の答ふるところもあらず。

本多佐渡守正信、此體を見るより、直に、駕籠を下りて、兩將軍の間に立ち、秀忠に向ひて、

『大殿の仰せらるゝところ、御道理とこそ、存じ奉つれ、御下知のまに〳〵、岡山へ進ませ給ふべし』

と勸むれども、秀忠、尙、答へず、家康、重ねて、

『今に於て、急に、諸將に、陣場を割渡さんこと、叶ふべくもあらず、若し、去年の陣所へ、著陣すべきやう、申し觸れなば、別に、陣所を割渡さん手數をも、要せず、諸事、速かに、相運び候はん、我れ、之れを存ずればこそ、申すなれ、大樹の承引なきこと、何とも以て、心得がたし』

と告ぐ、正信、亦、

『實に大御所の仰せらるゝところ、至極の妙計とこそ、存じ奉つりて候へ、今となりて、新たに、陣場を割渡さんこと、徒らに、機宜を誤まるのみにて、何の益とても候まじ、大殿の御下知に、從はせ給はんこそ、然るべう候へ』

と諫むれば、秀忠、

『實にも、然るべし、此上は、大御所の仰せに、從ひ奉つり候はん』

と述べて、其旨を、諸將に令し、東軍の部署、復た去年の如くに決す。

此時、伊達陸奥守政宗、道明寺より、兵を進めて、來り謁し、

『政宗、先手の模樣を、窺ひ候へるに、兩御所に對し奉つりて、異心を懷くものありげに、見受け候、大和口諸軍の陣場は、兩御所の御旗本に、遠くして、緩急、相應ぜんこと、叶ひがたし、政宗に於ては、去年の如く、船場口に陣取り、萬一、逆心を懷くものあらば、早速、誅戮を加へ候べし、此儀、御許容あらせ給へ』

と請へば、家康、

『此儀、道理なり、苦しからず』

と答へて、其望みを許す。

是に於て、諸將、各〻兵を進む、岡山口の先鋒前田筑前守利常は、岡山の南方林寺村に陣し、本多豐後守康紀等は、其右に備へ、片桐主膳正貞隆等は、其左に屯し、藤堂和泉守高虎、細川越中守忠興、井伊掃部頭直孝等は、奈良街道の桑津に陣す。

安倍野より、住吉に至るの間、東軍の陣營、碁布して、城南一面、復た錐を立つべき餘地とてもあらず。

七〇　家康の命令

城兵、出でて戰はんか、戰はざらんか、家康、先づ、敵情を探るの要あり、本多佐渡守正信の弟三彌正重、時に、其側に侍す、家康、

『三彌でも遣らんか』

と獨語すれば、正重、屹と、家康の方を見遣る、家康、重ねて、

『イヤ〳〵、參河の呆氣者は、遣られまじ、甲州の馬鹿者でも、遣はさんか』

と呟やきつゝ、使番初鹿傳右衞門昌久、横田甚右衞門尹松の二人を召す、二人は、元と、武田信玄の臣なり、家康、

『大阪の痴漢共、兵を出したりや否や、兩人、篤と、見切り來れ』

と命ずれば、二人、ハッと、答へしばかり、暫し、其場を起たず、家康、其體を見て、不審しみ、

『兩人、何か思案の事ありや、疾く〳〵參れ』

と促がせば、二人、齊しく、首を上げつゝ、

『御家流の物見を仕つるべきや、それとも、甲州流の見切を仕つるべきか』

と問ひ返す、家康、暫し、小首を傾むけしが、頓て、

『甲州流に仕つれ』

と命ずれば、二人、

『上意、畏まり奉つり候ひぬ』

と言ひも敢へず、馬を驅つて、トットと、馳せ去る。

居ること、一時ばかり、二人、急ぎ、馳せ還りて、家康の前に、立ち出で、

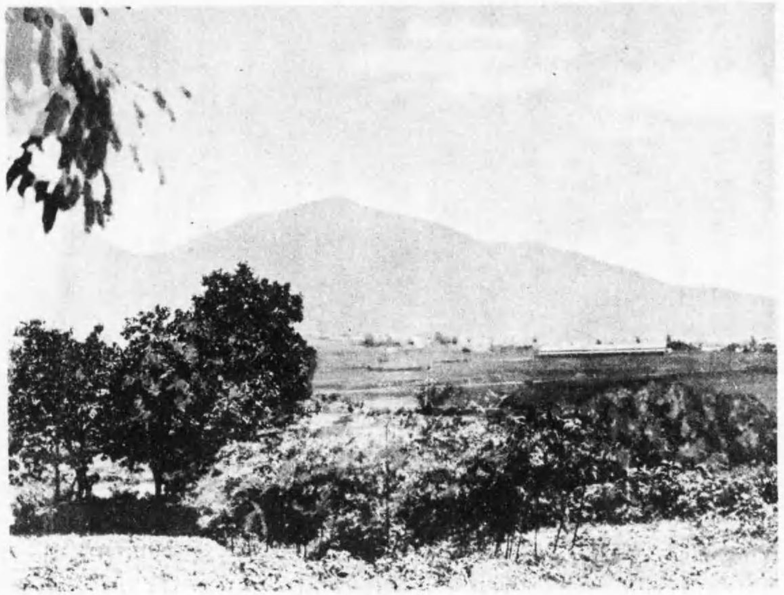
『城兵、凡そ六七千ばかり、押し出し候、大野の備と覺しく、鉈の紋の旗を、立て居り候』

『扨ては、愈〻出でたるか』

と言ひつゝ、打ち頷づき、正重を、秀忠の本營に、遣はして、

『大阪の痴漢共、愈〻備を押し出し候、追つ付け、擊ち崩さんこと、何の手間も、要り候まじ』

と告ぐ、今や、城兵、愈〻出づ、之れを擊滅せんこと、今日を出でず、家康、心の中に、打ち喜びつゝも、亦、



忍岡の遠望
此れは甲可村の忍岡にして飯盛山の麓より枚岡方面を望むの風景なり

『昨日の合戰に、多く勇將猛卒を討取りたると雖も、城中には、尙、七八萬の人數あるべし、特に、眞田左衞門佐、采配を取つて、將士、皆、死物狂ひに、戰はゞ、之れを擊ち破らんこと、容易にあらず、況して、味方は、日に向ひ、敵は、日を負うて、戰はんこと、是れ、亦、此方の弱味なり、暫く、時刻を移して、敵の鋭氣を避け、其氣力の倦み疲るゝを待つて、攻め寄せんに、若くことなし』

と思ひ極め、正重、及び米倉丹後守信繼の二人を、先鋒の諸軍に、遣はして、

『今日、尾張、駿河の兩宰相に、合戰の法を、指南せんとす、先手の諸勢、暫く、合戰を始むることなく、各〻馬を下り、槍を携へ、備を固めて、再度の下知を待つべし、若し、命に背きて、戰を始めしものは、逆意同然たるべし』

との嚴命を傳へ、間宮權左衞門伊治、喜多見主水正正忠を、尾張宰相忠直、駿河宰相頼宣の陣に、遣はして、其進發を促がし、又使番久世三四郎廣宣、阪部三十郎廣勝、小栗又

一忠政、佐久間河内守正實等二十人を、各軍に、分遣して、

『諸手、何れも、合戰を取り掛くべからず、陣を固めて、重ねての命を、待つべし』

との旨を傳ふ、是に於て、諸軍、各〻楯を建て、竹束を築き、槍を執つて、待ち構へ、敢て、一丸、一矢をも、發たず。

七一　越前の軍狀

越前少將忠直の陣は、茶臼山の南方に在り、天明けて、北方を望めば、赤旗、翻飜として、山上に飜へり、宛ながら、紅躑躅の亂開せるに似たり、士卒、愕然として、

『あの旗こそ、眞田の手なれ』

と言ひつゝ、皆、色を變ず、吉田修理、岡部豐後守の二人、

『討死を覺悟せる身は、鬼神なりとて、恐るゝに足らず、眞田如きが、何か有るべきぞ、鎭まれ〳〵』

と叱り勵ませば、士氣、復た忽ちに振ふ。

忠直の候騎梶原美濃守、水谷兵部少輔、菅沼伊賀守の三人、先づ、馬を飛ばして、出でて、敵情を偵ふ。

二番手の候騎藤田大學、大河原藤太夫、關根織部、伊藤長左衞門、江川安左衞門の面々、亦、我も〳〵と、馳せ出づ。

續いて、三番手の候騎眞子丹波守も、亦、馳せ赴く。

忠直、胡牀に凭りて、候騎の還り報ずるを待つ、眞子平馬、配膳を捧げて、其前に來れば、忠直、

『平馬、暫し、持ち居れ』

と言つひゝ、甲を脫して、渡邊平兵衞に渡し、起ちながら、箸を取つて、兵糧を喫む。

斯かる折柄、眞子丹波守、馳せ還りて、忠直の前に出で、

『早や、好き機會に候、疾く〳〵、御出馬あらせ給へ』

と報ずれば、勇氣勃々たる忠直、

『ナニ、好き機會とや、早や、兵糧はつかひたり、今は、餓鬼道にも、落つまじきぞ、イザ、眞先に、閻魔の廳に、駈け著かん、馬曳け』

と言ふより早く、ゆらりと、馬上に、打ち跨がる。

人馬、今や、敵陣を目蒐けて、押し寄せんとす、會〻五の字の下に、米倉丹後守と書きたる背旗を挿したる二騎、驀地に、馳せ付け來る、これぞ、家康の使番たる本多三彌正重、米倉丹後守信繼の二人、

『上意に候、重ねて、御下知の候までは、御合戰の儀、堅く、御無用に候、違背せらるゝに於ては、逆意同然たるべし、聢かと、御心得候へ』

と告げて、立ち去る、忠直、

『御軍令を破りし我等、何ぞ、御下知を待つべきや、他人に先んじられなば、死後までの名折れぞ、構はず、進めや進め』

と言ひつゝ、尙も、兵を進めんとす、落合美作守、進み出でて、

『唯今の御下知は、何か大御所の御計略に候はん、故なく、合戰を差し止め給へるものには候まじ、特に、方角を見るに、味方、赤日に向ひて戰ふは、不吉に候、仰せに從うて、暫く、御待ちあらせ給へ、假令、先驅を心掛くるものありとも、誰れか、御當家の大軍を、乘り越すものゝ候べき、時刻さへ來らば、御當家は、何時とても、眞先きに候べし、決して、御氣遣ひあるべきに候はず、あれ御覽候へ、御使番の、諸陣へ、馳せ赴き候もの、正しく、深き御仔細のある證據に候』

と諫むれば、忠直、

『如何にも、申す通りぞ、左らば、暫く、進擊を見合はすべし』

命じて、軍を勒めて、後命の下るを待つ。

七二　和議の勸誘（一）

將軍秀忠、未だ家康の心事を解せず、城兵の出軍せるを見て、一擧に、擊滅せんと欲し、急使を發して、家康の出馬を促がすこと再三。

使番安藤治右衞門正次、先づ、馬を驅つて、家康の本營に抵り、

『敵兵、城中より、大軍を以て、打つて出で候、早々、御旗本を、詰め寄せ給へとの、仰せに候』

と申せば、家康、忽ち、氣色を變じて、

『何と申すぞ、城中の奴輩、殘らず、打つて出づとも、ヨモ、七萬には過ぎじ、然るを、事々しく、大事などと申すこと、不調法千萬の事かな、左樣のものにて、將軍

の使番が、勸まるべきか』

と叱する語氣さへも、荒々し、正次の慚恨、言はん方なし、

『扨ても、無念至極かな、好し〳〵、此上は、潔よく、討死せん』

と固く、思ひ極めて、其儘、馳せ去る。

稍〻ありて、安藤對馬守重信、又馳せ來りて、家康の前に出で、、

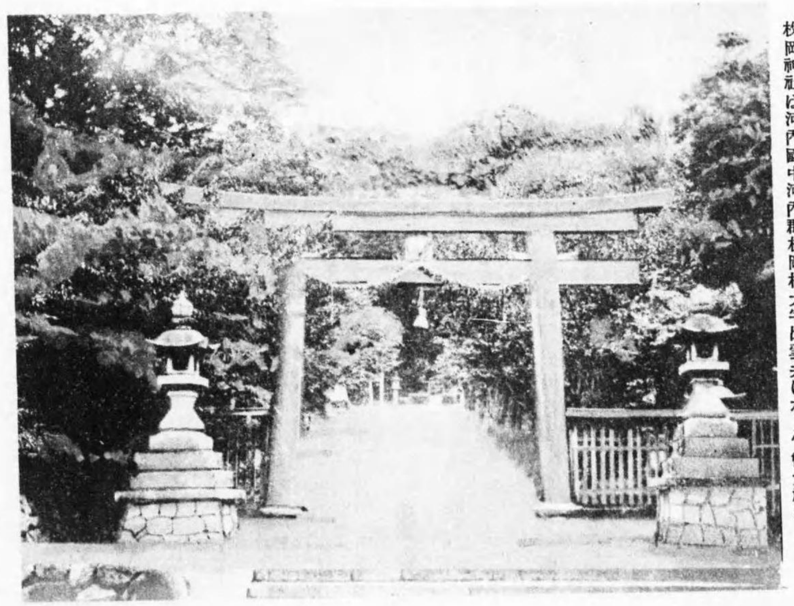
『城兵、追々、打つて出で候、上樣に於ては、最早、御一戰に及ばれて、然るべう候はんとの御思召に候、御旗を進めさせ給ふべくもや』

と申せば、家康、首を掉りつ、、

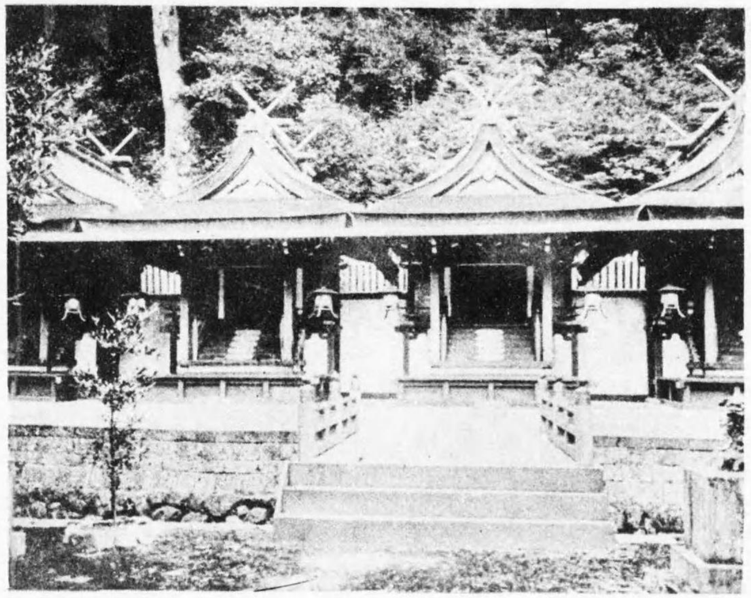
『我等、少々存ずる仔細あり、重ねて、下知するまでは、合戰を始むべからず、此儀、能く〳〵、大樹に申せ』と告げて、聞き入れず。

實にや、家康の胸中には、一策あり、此時、京極若狹守忠高の母常光院に、後藤庄三郎光次を添へて、城中に遣はし、復た和睦の事を勸む。

城中の事情に慣れたる兩人、直に、入城して、淀君に對面



枚岡神社　其一
枚岡神社は河内國中河内郡枚岡村大字出雲井に在り官幣大社なり



枚岡神社　其二
枚岡神社は天兒屋根命比賣御神を祀り經津主命武甕槌命を配祀す此れは其本殿なり

し、常光院、口を開きて、先づ、

『關東の兩御所、早や、大軍を以て、城外に押詰められて候、城の陷いらんこと、今日を出で候まじ、左れども、大御所に於ては、故太閤殿下の舊誼を思召し、今に及びても、尙、秀頼君を滅ぼし給はんに忍びず、此上とも、大和へ、國替へせらるゝに於ては、速かに、和議を取結ぶべしとの仰せに候、安危の分かるゝところ、今日に候、能く〳〵、御思慮ありて、御返答あらせ給へ』

と勸むれば、昨日の一戰に、木村長門守重成、後藤又兵衞基次、薄田隼人正兼相以下の諸勇士を失ひて、痛く、前途を悲觀せる淀君、

『實にも、敵は、大軍にして、味方は、小勢なり、特に、要害さへ、取壞ちたる今日、何時までか、籠城を得べき運命の極まる所、正しく、今明兩日の中を出でず、日頃は、死すとも、此城を出でじとこそ、思ひ居つれ、諺にも、背に腹を換へられずと申すことあり、秀頼の爲めとならば、大和へ移らんこと、是非に及ばず』

と思ひ極め、常光院に向ひて、常の狀にも似ず、

『大御所の仰せ越さるゝ趣、心嬉れしう、存じ侍べるにこそ、此上は、秀頼にも、說き勸めて、大和へ、國替への儀を、定め申すべし』

と答へて、其好意を悅び、急使を、秀頼の許に、遣はして、

『直き〳〵、申合はせたき大事の候、急ぎ、御馬を返し給へ』

と申し送る、圖らざりき、干戈の聲、起らんとして、俄かに和議の聲、復た起らんとは。

七三　和議の勸誘（二）

城中の將士は、此日の未明を以て、各〻城を出でて、其部署に就く。

眞田左衞門佐幸村は、其陣地を、茶臼山に置きて、唐人笠の馬標を建て、數十旒の赤旗を、飜へす。

幸村の子大助幸昌、及び大谷大學吉胤、槇島玄蕃允重利、名島民部少輔忠純、長岡式部少輔頼貞、江原左近高次、藤掛土佐守定方、眞田采女正元信、福島武藏守正之、福島伊豫守正重、吉田玄蕃助好是、津田左京亮信純、結城權之助勝朝等は、茶臼山の南谷に陣し、伊木七郎右衞門遠雄等は、幸村の陣後に控ふ。

毛利豐前守勝永は、天王寺の南門に陣し、其子式部少輔勝家、山本左兵衞豐種等は、其先頭として、庚申堂の附近に屯し、竹田永翁、渡邊內藏助糺は、其東方に陣し、石川肥後守數矩、篠原又左衞門忠照、湯淺右近丞忠壽、小倉作左衞門行春、樋口淡路守雅兼、織田左衞門尉信次、稻木右衞門佐敎量等は、其左右に備ふ。

大野主馬首治房は、篠山の南方味原池の附近に、陣地を設け、布施傳右衞門、新宮左馬助行朝等は、其前方に備へ、御宿越前守政友、岡田縫殿助政繁、岡部大學則綱、中瀨掃部助宗純、二宮與左衞門長範、正德院等は、治房の左に屯し、長岡監物良平、山川帶刀賢信、北川次郎兵衞宣勝、樫野勘解由昌孝、三浦飛驛守義世等は、治房の西南に備ふ。

七隊長速水甲斐守守久、堀田圖書助正高、眞野豐後守頼包、野々村伊豫守雅春、中島式部少輔氏種、及び飯尾勘十郎、白樫主馬等の遊軍は、天王寺北方の藪蔭に伏す。

明石掃部助守重は、精兵三百騎を提さげて、船場に陣し、

機を見て、茶臼山の南方に、迂回して、家康の陣後を、斫らんとす。

秀頼、亦、馬に乘じて、櫻の門に出づ、茜の吹貫五十旒、金の瓢簞の馬標、幷に金の切裂附きたる馬標を、馬前に建て、麾下の將士は、皆、門外に整列す、秀頼の先鋒大野修理亮治長は、進んで、天王寺の東南毘沙門池の附近に到り、秀頼も、亦、時機を見て、旗を天王寺に進めんとす。

三軍の士氣、盡く振ひ、皆、東軍を迎へて、決戰せんと欲す、意氣、自から半天を衝く。

斯かる折柄、淀君よりの急使、櫻の門に、馳せ來りて、秀頼の歸城を促す、秀頼、未だ事由を知らず、

『我れは、必死を期して、親しく、出馬せるものぞ、何事のあればとて、中途に歸り入るべきにあらず、罷り歸つて、其由を申せ』

と答へて、更に、聞き入れず、使者、一たび還りて、又來り、

『一大事を、御相談申すことあり、是非に、御歸城あらせ給へ』

との旨を述ぶれど、秀頼、尙も、固く執つて、聞き入れず。

既にして、使者の往復、再三再四に及べば、秀頼、今は、是非なく、馬を回す。

秀頼、頓て、本丸に歸り來れば、待ち詫びたる淀君、親から、常光院の入城せる顚末を、物語りて、

『大御所の、舊冬、和睦を勸め給へるもの、一途に、計略とのみ存じ侍べりしが、此期に及んで、又候、斯くも、和談を勸めらるゝもの、正しく、故殿下の舊誼を思はるる爲めとこそ、覺ゆれ、存へてこそ、花咲く春にも逢はめ、枉げて、和平を調へて、大和へ移り給へ、御身の爲め、御家の爲めにこそ』

と說き勸めて、止まず。

侍女の面々、亦、盲龜の浮木を得たる如くに、悅び合ふを見ては、秀頼、今は、一概にも、其意に違ひがたく、

『左らば、一應、評定候はん、常光院尼は、一先づ、差し還し候べし』

と答へ、常光院、及び光次に對しては、

『城中評定の上、御返答は、當方より、申し進じ候はん、

枚岡の營址
河内國中河内郡枚岡村代官中村喜六の屋敷址は枚岡神社の坂下五町の地に在り家康の宿營せし處同家は明治二十年頃斷絶せしと云ふ此圖の前面なるは濠なり

一先づ、引取り候へ』
と告げて、城外に、送り還す。
秀頼、急使を發して、大野治長、速水守久等を、召し還し、諸陣に對しては、
『重ねて、下知するまで、固く、合戰を始むべからず』
との旨を命じ、諸近臣を、召し集めて、講和の可否を諮る。
今まで、一死を期したる面々も、和睦の議、起りしと聞くより、俄かに、勇氣を挫きて、漸く、軟説に傾き、
『昨日の合戰に、生命と頼む勇將猛卒を失ひて候へば、今は、萬に一つも、勝利を得んこと、思ひも寄らず、大御所に於ても、滅ぼさば、滅ぼさるべきを、態々、斯やうに、和睦を勸め給へるもの、如何さま、一つには、故太閤の舊好、二つには、親戚の情誼を、思し給ふが爲めに候べし、左すれば、大和へ、移らせ給ふとも此上、差したる御不利を、計らせ給ふべしとも、存ぜられず、一旦、仰せに任せて、和議を結ばせ給ひ、徐ろに、他日の時機を、待たせ給はんこそ、然るべけれ』
と説くもの少からず、折柄速水守久、馳せ還りければ、秀

頼、
『如何に甲斐、汝は、此儀を、如何存ずるぞ』
と問ふ、守久、首を下げつゝ、
『恐れながら、某に於ては、此儀、然るべしとも、存じ奉つらず、斯くまで、迫り詰めたる所を、俄かに、御和睦あるべしとの御使を、差し越さるゝこと、全く、眞實の思召とも、存ぜられず、又しても、深き仔細こそ候べけれ、天王寺表の寄手は、早や、合戰を仕掛くる體に、見受けられて候、旁々以て、御油斷あるべからず、某は、組下の容子を見定め、其上にて、重ねて、注進仕つり候べし、御和平の儀は、能く〳〵、御思案あらせ給へ』
と答へ、其儘、馳せて、城外に出づ。
淀君は、和睦を勸め、守久は、再考を求む、近臣中にも、之れを是とするものあれば、否とするものもあり、議論、紛々として、容易に、決せず。
秀頼の一旦歸城せしより、早や、半時を過ぎ、一刻を過ぐれども、尚、再び出馬するを得ず。
城外の將卒、皆、炎天の下に、曝らされて、苦惱、言ふべからず、空しく、再度の命を待ちて、意氣、刻々に衰ふ。

七四　幸村の苦衷

眞田左衛門佐幸村、茶臼山の營に在り、時機を見て、進擊せんとす。
會〻常光寺院、及び後藤光次の入城せしを、聞くより、
『扨ては、計略を以て、和談を申し勸むるにてぞあらん、今となりて、誰か、耳を傾くるものあるべき』
冷然として、意にも介せず。
既にして、使者、馳せ來りて、暫く、進戰を見合はすべしとの命を傳へたるより、幸村、忽ち、天を仰ぎて、嘆息し、
『扨て〳〵、大御所は、古今無双の名將かな、今曉出陣の時は、味方の勇氣、凛々として、溢るゝが如く、我が勝利、疑ひなしと思ひて、急に、一戰せんと存じつるに、彼方は、楯を樹て、竹束を築くなど、宛がら、籠城の如くに、備を固めて、動かず、其中に、使者を、城中に立てゝ、態と、和談を申し勸め、味方の勇氣挫け、戰意衰へたる時機を、見澄まして、只、一戰に、擊ち果さんと

の謀略なりと覺し、然るを、出戰を差し止めらるゝやうにては、敵の詐術を、看破るものなしと見えたり、今は、所詮、勝利の見込なし、折角、味方の勇氣を、鼓舞せしことも、全く、水泡に歸したることの無念さよ』

と思ひつゝ、直に、使者を馳せて、伊木七郎右衛門遠雄を招き寄せ、

『敵は、又も、計略を以て、和睦を申入れ候、味方の鋭氣挫けたる頃を、見定めて、諸方、一時に、押し寄せ來るべし、能く〳〵、遠見せられ候へ、味方惣敗軍の時節、追つ付け、來り候はんぞ』

と命ずれば、遠雄、其儘、馳せ出づ。

幸村、續いて、先鋒に備ふる嫡子大助幸昌を召して、

『大御所、又も、和談を申し入れたりと雖も、是れ、正しく、例の詐術なり、今に見よ、諸軍、一度に、押し寄せ來るべし、味方の大事、此時に在り、汝、急ぎ、城中に、馳せ還りて、疾く〳〵、御出馬あらせ給ふやう、秀頼公に言上せよ、我君だに、御出馬あらば、我れ、即時に、兵を進めて、大御所の旗本に、打ち入るべし、此備

枚岡の展望
河内國中河内郡枚岡村枚岡神社の祠前より枚岡松原岩田の村落を越して大阪を望むの光景

だに、擊ち破らば、餘は、皆、戰はずして、潰え走らんこと、必然なり、後れなば、侮ゆるとも、及ぶべからず、疾く、馳せ還りて、言上せよ』

と命ずれば、幸昌、ジッと、父の顔を、見上げつゝ、ハラハラと、涙を灑ぎ、

『幸昌、去年、母上に分れまつりて、此城に入り候へる時、汝、吳れ〴〵も、父上の御最後を、見捨てゝ、獨り、生きて、還るべからず、必ず、冥途黄泉の御供せよ、未練の振舞に及びて、眞田の家名を、汚がすことあるべからずと、懇に、仰せ含められて候、幸昌、不肖とは申せ、晝夜、此の御教訓を、忘却仕つらず、是非とも、御最後仕つらんと、存じ極め候へるものを、今更、父上を、大軍の敵中に、見捨て奉つりて、獨り、城中へ參り候はんこと、存じも寄らず、此儀は、餘人へ、仰付けられ候へ、幸昌に於ては、片時も、御側を、離れ奉つらず』

と言ひ放ちて、更に、父の命に從ふべき色もあらず、幸村、忽ち、色を變じて、ハッタと、幸昌を睨めつゝ、

『如何に大助、能く承はれ、凡そ、弓矢の家に生るゝものは、忠義を重んじ、武勇を重んじて、父母をも忘れ、一身をも忘るゝこと、其常道にあらずや、汝、若年なりとは申せ、既に、十六歳ともなりつるに、尚、斯ばかりの道理を、知らざるは、如何にぞや、我れの、汝を城中に還さんと存ずるもの、何ぞ、深き仔細のなからずや、我れ、秀頼公に頼まれ奉つりてより、身命を抛つて、其知遇に報いんと存ずと雖も、悲しいかな、新參の我等、兎角に、城中の疑ひを招くを免かれず、去年の合戰に於て、我れの出丸を築きて、出で守れるもの、畢竟、我れ、城中に在る時は、敵に内應すべしとの疑ひを受くるの虞ありしが爲めならずや、我れ、今や、總大將の恩命を蒙りしと雖も、城中、尚、我れを疑ふものなきにあらず、只今、汝を城中に還さんとするもの、固より、秀頼公の御出馬を、促がし奉つらんが爲なりと雖も、其實は、全く、汝を以て、人質となさんとの下心なるぞ、爭かで、餘人を遣はすことの叶ふべきや、左れば、秀頼公にして、御出馬あらば、汝も、御共申して、守護仕まれ、若し、御出馬なきに於ては、汝も、亦、其儘、城中に留まりて、

御最期の御供せよ、萬一、關東より、御助命の仰せありとも、相構へて、降人に出づることあるべからず、何處何處までも、秀頼公に、御生害を勸め奉つり、汝も、亦、冥途黄泉の御供仕つるべし、只今、城中に於て、秀頼公に御生害を勸め奉つるべきもの、他に、其人ありとも覺えず、汝を城中に還さんと存ずるもの、一つには、又是が爲めなるぞ、父へ孝行を盡さんと存ずれば、君へ忠義を盡すべし、忠孝兩全の道、此外に出づべからず、假令我れと、汝と、時刻を異にし、場所を違へて、相果つるとも、頓て、冥途に於て、必ず、廻ぐり合ふべし、暫しの別れを悲しみて、忠孝の道を忘れなば、七生までの勘當なるぞ、早や往け、後れては、詮なきぞ』

と說き諭す、聲の底には、涙あり。

幸昌、熟〻聞き終りて、忽ち、莞爾とばかり、打ち笑む。

『假初の御使とのみ、存じ奉つりしに、扨ては、然る深き仔細の候ひしか、幸昌、爭かで、違背仕つるべきや、此上は、城中に、馳せ還りて、君の御最期の御供仕つり候べし、御心安く思召せ、左らばに候父上、再會は、來世にこそ候べけれ』

と言ひ放ちて、只、一騎、馬を飛ばして、城中に馳せ向ふ。

幸村、黯然として、其後姿を、見送ること暫し、これを今生の訣別と思へば、左しもの勇士も斷腸の想あり。

稍々ありて、幸村、乞と、心付く、

『敵は、頓て、押し寄せんに、今の内に、兵粮をつかひ置かんこそ、好けれ』

命じて、普ねく、士卒に、兵粮を頒つ。

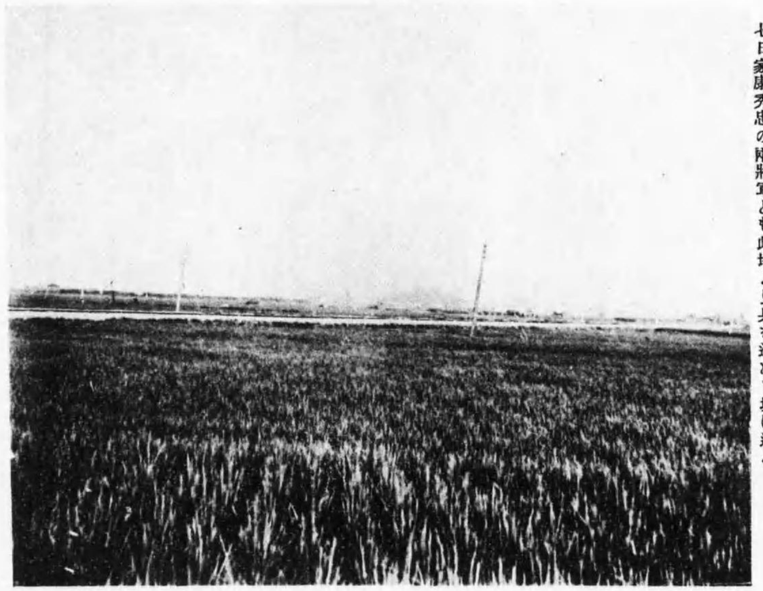
幸村の先見、神の如し、漸く、食事を終れる頃ひ、俄かに、進擊の螺聲、鼓聲、敵の陣中に、響き渡る。

七五　兩軍の開戰

講和は、家康の眞意にあらず。

家康、一方に於て、女使を、城中に送りて、和睦を勸むると與に、他の一方に於ては、候騎を、諸所に縱つて、敵情を偵ふ。

既にして、常光院、及び後藤庄三郎の二人、城中より、還り來りて、



平野の北方
大阪市住吉區平野鄕町は元は東成郡に屬す此れは其北方の光景なり五月七日家康秀忠の兩將軍とも此地より兵を進めて城に迫る

『和平の可否は、一應、評定の上、當方より、御答申さんとの返辭にて候』

と復命せし儘、時刻、漸く、移れども、城中よりは、未だ何の沙汰もあらず。

其内、本多三彌正重、久世三四郎廣宣、坂部三十郎廣勝等、諸所より、馳せ還りて、家康の前に出で、

『敵は、出陣の鼻先を、挫かれ候、炎暑と、無事とに苦みて、勇氣も、餘程、衰へたる體に候』

と報ずれば、家康、快然として、輿を下り、

『疾く、貝を吹けよ、今こそ、進んで、敵を擊つべき圖なれ』

と命じて、馬に跨りがる。

忽ち、法螺の音起り、太鼓の聲響くと齊しく、曳々、鯨波を發すること、三度、茶臼山の前面、早や、銃聲、盛んに起る。

秀忠、岡山の南方五六町の丘上に在り、斯くと聞くより、

『素破や、合戰は、始まりたるぞ、此方よりも、疾く、仕懸けよ』

と命ずれば、岡山口の諸軍、亦、一齊に、鯨波を發して進む。

秀忠、親から、徒士二十餘人を率ゐて、先鋒の戰況を巡見し、歸途、黑田筑前守長政、加藤左馬介嘉明の陣前を過ぐ。此二人、去年の役は、江戸に留められ、今回は、寡兵を率ゐて、從軍すべき旨を命ぜられて、此處に在り、此時、甲を脱して、恭しく、秀忠の馬前に、進み出で、

『昨日は、城兵共の足長に出でしを、打ち漏らし候へること、甚だ殘念なりと、存じ奉つりしに、今日、又々、人數を出だし候へるもの、自ら火に入る夏蟲にも喩へ候べきか、これ御武運に叶はせらるゝの致すところ、恐悦至極にこそ候へ』

と祝すれば、秀忠、莞爾として、

『追つ付け〳〵』

と會釋して、打ち過ぐ。

秀忠、黑絲縅の鎧を著け、山鳥の毛の陣羽織を纏へるばかり、別に、甲を戴かず、長政、暫し、其後姿を、見送りつつ、嘉明に向ひて、

『將軍家には、常の御容子とは、打つて換はり、扨々、御手輕き儀に候ものかな』

と言へば、嘉明、頷づきつゝ、

『如何にも〳〵、總じて、斯やうの節には、例も、御手輕なること、大御所以來、御家の癖に候』

と語る、長政、聞きも敢へず、

『隨分、宜しき御癖かな』

と評して、益々感じ入る。

長政、頓て、四邊の地形を、見廻はしつゝ、又も、嘉明に向ひて、

『如何に、我等は、此邊に、備へ申すべきにや、前に沼ありて、異なものに候へど』

と言ひば、嘉明、

『一段と然るべき地形に候、お互などは、今日の御手に合はぬが、御奉公に候、我等次第に、任され候へ』

と答へて、岡山口の先鋒前田筑前守利常の後方、沼澤を、前に控へて、陣を布く。

諸方の戰鬪、早や、既に、始まりて、銃聲、喊聲、天地を

撼かす。

七六　天王寺の合戰（一）

天王寺方面の戰端は、本多出雲守忠朝の隊より始まる。

忠朝の陣は、茶臼山の南方に在りて、他の諸陣よりも、突出すること數十間、恰も、凸字の形に似たり、安藤帶刀直次、馬を驅つて、馳せ來り、忠朝に向ひて、

『當手の陣は、餘りに、出過ぎ候、早々後へ引き候へ』

との命を傳ふれば、忠朝、聞きも敢へず、

『帶刀殿は、武功場數の勇士なりと言はるゝにも似ず、只今の御一言は、何事に候ぞ、我が陣が、出過ぎて、見苦しくば、他の備をこそ、張り出さしめ給へ、何條、進み出したる備を、引つ込ますことや候』

と言ひ放つて、取合はず、直次、實にもと思ひけん、挨拶をも爲さで、其儘、馳せ還る。

忠朝の前面に、毛利豐前守勝永の先頭竹田永翁、渡邊內藏助糺の陣あり、忠朝の銃隊、先づ、銃擊すれば、永翁、糺亦た、銃を發して、此れに應ず。

眞田左衛門佐幸村の軍略は、敵を天王寺の方に、誘致し、明石掃部助守重の兵を、迂回せしめて、家康の陣後を、衝かんと欲するに在り、永翁等の輕々しく開戰するを見て、大に驚き、

『扨ても、由なき人々の振舞かな、斯くては、我が軍略も、水泡に歸するの外なし』

と思ひ、使者を、勝永の陣に遣はして、

『某、存ずる仔細の候、此處にて、合戰を始め給はんこと、然るべからず、船場の軍兵、此方へ、押し掛くるを待つて、一擧に、雌雄を決せんに若かず、早々、御差止め候へかし』

と告ぐれば、勝永、

『此儀、道理に候』

と答へ、急ぎ、使者を、永翁、糺の陣に、遣はして、開戰を止む。

左れども、糺は、今日の一戰を以て、會稽の恥辱を、雪がんと欲するの志深く、永翁も、亦、去年の戰列に加はらざるを以て、頗る髀肉の嘆に堪へず、

平野の西方
此れは大阪市住吉區平野郷町の西方にして家康の一時陣地を訝けたるは此附近なり

『一旦、合戰を始めたるものを、故なく、中止せんこと叶ふべきや、只々、敵を擊ち破るべし』

と言ひつゝ、益々銃を發す。

勝永大に、驚き、自ら馳せ赴きて、諭止すれども、永翁等、尙、聞かず、敵を銃擊すること、愈々急なり。

勝永、今は、如何ともすべからず、使者を發して、此旨を、幸村に報ず。

幸村、我が軍略の齟齬せるを見て、憤慨措かず、

『斯くなりては、詮方なし、此上は、此方より、人數を進めて、敵を擊ち崩さん』

と決意し、先鋒の備を、五段に分つ、第一は、名島民部少輔忠純、大谷大學吉胤、第二は、本郷左近晴賢、多田入道藤彌齋、第三は、江原右近高次、長岡式部少輔賴貞、第四は、槇島玄蕃允重利、藤掛土佐守定方、第五は、福富平左衛門、早川主馬にして、外に、旗幟同一の三陣を設け、望月宇右衛門、海野六郎兵衛、各々一陣を領し、幸村、亦、自ら一陣を率ゆ。

部伍、全く定まるや、幸村、先鋒の五陣に對して、前進を

命じ、其身も、亦、茶臼山の阪西を、眞一文字に進みて、越前少將忠直の兵を、擊たんと欲し、貝を吹き、太鼓を撾ち、曳々、鯨波を發すること三度、軍容、特に振ふ。

待ち佗びたる越前少將忠直、今こそと思へば、勇氣、凛然として、振ひ起り、麾を上げて、前面の敵を、指しつゝ、

『あれこそ、眞田左衛門佐の手と覺ゆれ、掛かれや面々』

と呼はれば、左翼の先頭吉田修理、岡部豐後守の兩陣、眞先に進み出で、銃丸を、浴せ掛け〳〵、鯨波を作つて、押し進み、續いて、齋藤民部、亦、金鼓を鳴らして、押し寄す。

城將名島民部少輔忠純、大谷大學吉胤、砂煙を立てゝ、驀地に、馳せ來り、續いて、本郷左近晴賢、多田入道藤彌齋も、亦、馳せ來る。

兩軍の戰鬪、忽ち、此に開かれ、人馬、相衝き、劍戟、相擊つ、呼聲、雷より高し。

忠直、麾を打ち揮り〳〵、益々叱咤號令すれば、右翼の先頭山本内藏助、亦、馳せ出で、太田安房守も、亦、續いて、馳せ出づ。

城將江原右近高次、長岡式部少輔賴貞等、亦、各々馳せ來りて戰ひ、戰線、見る〳〵、擴まる。

豪氣の忠直、一氣に、敵を蹂躙せんと欲し、前輪に掛つて、聲を張り上げつゝ、

『敵は、僅かの小勢なるぞ、只、一捲くりに、揉み崩せや』

と呼はれば、右翼の多賀谷左近、本多丹下の兩人、聲に應じて、進み出で、

『あれ見よ、敵は、小勢ぞ、一人殘らず、討取れや』

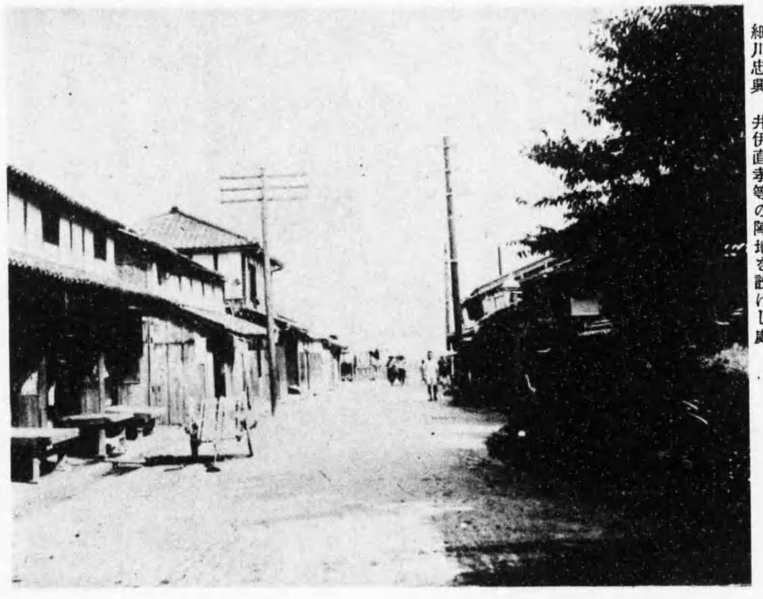
と呼はりつゝ、自ら馬を陣頭に進めて、勢ひ鋭く、攻め蒐る、決死の鋒尖、烈火の如し。

城兵、亦、今日を最期と、思ひ極め、擊てども、突けども、事ともせず、馳せ違ひ乘り違へ、死力を盡して、奮ひ鬪ふ。

中にも、大谷大學吉胤は、刑部少輔吉隆の子にして、驍勇、父にも劣らず。

『我れ、一陣を承はつて、敗れ走りなば、爭かで、人に對はすの面あらん、只、死ねや、死ね』

と呼はりつゝ、部下の士卒を、奮ひ勵まして、猛進し來る。



桑津
大阪市住吉區桑津町は平野郷より天王寺に向ふ奈良街道に在り藤堂高虎、細川忠興、井伊直孝等の陣地を設けし處

多賀谷左近、山本内藏助等、斯くと見るより、亦、部下を勵まして、邀へ戰ひ、只、打ち拉がんとす。

左れども、吉胤の兵鋒、猛烈、當るべからず、左しもの越前兵、早や、色めき渡れば、右翼の笹沼大膳、高屋越後、荻田主馬等、望み見て、大に怒り、各〻新手を率ゐて、進み戰ふ。

城兵槇島玄蕃允重利、藤掛土佐守定方、福富平左衛門、早川主馬等、亦、先鋒の兵を盡して、出で戰ひ、意氣、益〻振ふ。

越前軍の左翼本多伊豆守富正、山川讃岐守、落合美濃守等、それと見るより、亦、打つて出で、其兵勢、益〻加はる。

城兵、皆奮擊突戰すれども、衆寡懸絶、動もすれば、潰えんとす。

第二陣に控へたる城兵福島伊豫守正重、福島武藏守正之、吉田玄蕃助好是、津田左京亮信純、結城權之助勝朝等、各〻部下を督して、馳せ來り、

『引くな〳〵、我等、是れに在り』

と呼び立て〳〵、味方の兵を、勵まして、進み戰ふ。

城主名島忠純、大谷吉胤、本郷晴賢、多田藤彌齋、江原高次、長岡頼貞、福富平左衛門、早川主馬等、此れに氣力を得て、益〻奮ひ進む。

左れども、越前兵は、多勢なり、吉田修理、岡部豐後守、本多富正、落合美作守、山本内藏助、山川讃岐守以下の勇士、各〻士卒を勵まし〳〵、城兵を、中に包んで、猛擊すれば、其苦戰、言ふべからず、本郷晴賢、

『左衛門佐殿の上こそ、心元なけれ、イデ、其先途を、見屆けん』

部下百餘人を提さげ、敵の重圍を、突破して、幸村の陣に還る。

越前の將士、益〻鋭氣を鼓舞して、攻め立て、捲くし立て、其勢ひ、彌〻猛し。

渡邊糺、遙かに、此體を望み見るより、自ら赴き援けんと欲して、復た前面の敵をも、顧みず、

『イデヤ、我れ、馳せ向つて、越前勢を斫り崩さん、者共來れ』

と言ふより早く、手勢三百人を、提さげて、側面より、越前勢の右翼に、攻め蒐かる。

糺は、故太閤の千人中より、選拔したる十勇士の一人なり。

『去年以來の汚名を雪ぐは、今日の一擧に在り』

と思へば、奮然として、自ら陣頭に進み出で、

『我れこそは、渡邊内藏助糺なれ、討ち取つて、高名せよや』

と名乘りも敢へず、二間柄の素槍を執つて、側面より、荻田主馬の陣に、馳せ向ひ、當るに任せて、突き立て、突き捲り、一氣に、此處を突き破りて、忠直の麾下に、殺倒せんとす、意氣熱烈、燃ゆるが如し。

主馬も、亦、勇武の士、士卒を叱咤して、奮ひ戰ふ。

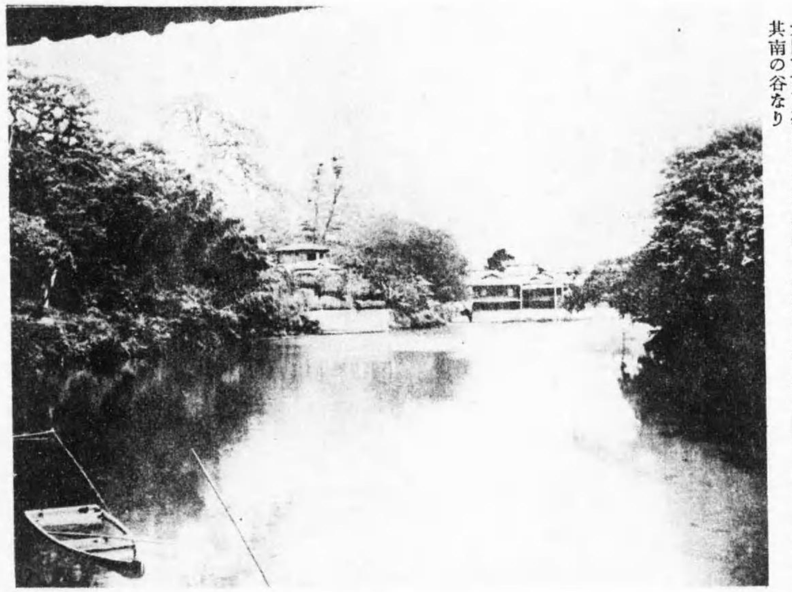
部下の一人、

『吉村政之丞、見參せん』

と名乘りつゝ、槍を揮うて、糺に、突き掛かる。糺、

『何を』

と言ひさま、突と身を沈めて、空を突かせ、一聲、曳と叫んで、政之丞を、馬上より、突き落し、勢ひに乘じて、尙も、突き進む。



茶臼山の南谷
大阪市南區茶臼山は眞田幸村の先鋒大助幸昌等の陣地を置きし處此れは其南の谷なり

敵兵、左右より、群れ來れば、糺、槍を操るの遑もなく、力に任せて、叩き伏せ、撲り倒すこと十數人。

既にして、槍折る、更に、來國行の鍛へたる三尺四寸の太刀を、振り被つて、奮闘し、見る〳〵、主馬の陣を、突破して、山川讃岐守の備に、突き掛かり、尚も、死力を盡して、馳せ廻る。

左れども、部下、殆んど、討たれて、生き殘れるもの、僅かに五六人、糺、

『今は、戰ふことも、詮なし、此上は、城中に、引き返して、秀頼公の御先途を、見屆け奉つらん』

と思ひ返し、急に、馬首を回らして、城中に、引き返す、越前の士澤山番右衛門、それと見るより、

『扨ても、穢なき敵の振舞かな、返し合はせて、勝負せよや』

と呼はり〳〵、馬を驅つて、嚴しく、逐ひ掛くれば、糺、馬を返して、ムヅと、引つ組み、前輪に、押へ付けて、首を掻く。

續いて、逐ひ來れる川越治兵衛、サツと、飛び掛かりて、

斬り付くるを、糺、手早く、鎧の袖に、受け流し、番右衛門の死骸を取つて、撞と、投げ付くれば、治兵衛、不意を打たれて、眞逆様に、馬上より落つ。

糺、得たりと、馳せ寄り、太刀を取つて、只、一突きに、治兵衛を、突き殺し、首をも取らず、又も、馳せ去る。

越前兵、矢を放ち、銃を發すれども、甲、堅くして、入らず、只、僅かに、左の肘を、打ち貫けるばかり。

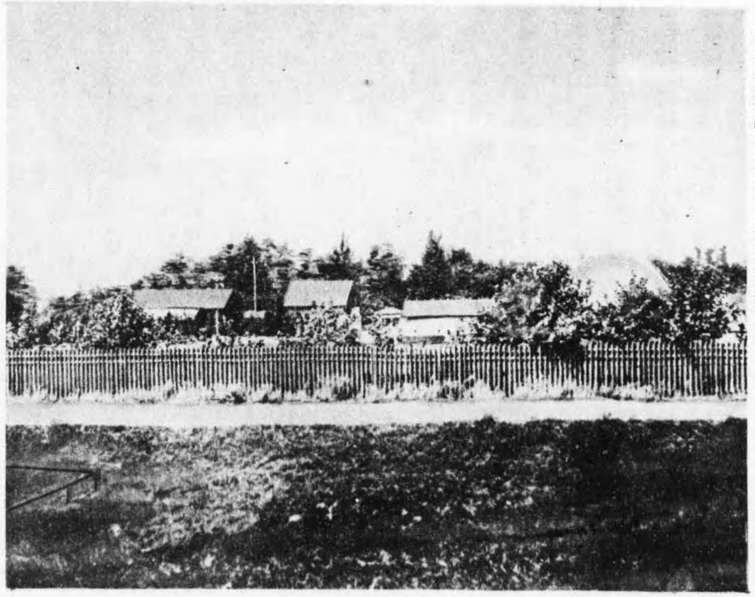
糺、敢て、事ともせず、其儘、馬を驅つて、城中に、馳せ向ふ。

七七　天王寺口の合戰（二）

越前勢、既に、糺の兵を擊破し、勢ひに乘じて、益〻城兵を掩擊す。

城將多田藤彌齋、藤掛定方、江原高次、槇島重利、早川主馬、福富平左衛門等、士卒を督して、百方、奮ひ闘へども、兵力、寡少にして、勢ひ適せず、且つ退き、且つ戰ふ、死傷、甚だ多し。

幸村、先鋒の苦戰せる狀を見るより　今は、猶豫ならず、



茶臼山の南方
此れは大阪市南區茶臼山の南方にして眞田幸村の陣地を設けし處本多忠朝松平忠直等の陣地より望める方面なり

『左らば、我れ、自ら馳せて向はん』
手勢一千二百人を率ゐて、越前勢の左翼に、押し寄す。
左翼の先頭吉田修理、岡部豐後守の二人、既に、城兵を擊破し、北ぐるを逐うて、益〻進む、忽ち、幸村の前進するを見るより、
『これ我が願ふところの敵ぞ、あれ擊ち破れ』
と言ふより早く、急に、備を立てゝ、邀へ戰はんとす。
幸村、銃手に命じて、一齊に、射擊せしめ、敵兵の怯むを見るより、
『素破や、懸かれ』
と言ひつゝ、赤旗を、眞先に押し立てゝ、突進す、其勢ひ、甚だ鋭し。
越前勢の陣形、未だ整はず、士卒、赤旗を、望み見て、
『素破や、眞田ぞ』
と言ひつゝ、右往左往に、逃げ惑ふ、修理、豐後守の二人、大に怒り、
『汝等、昨夜の約束を、忘れたるか、只、馳せ入つて、討死せよ』

と呼はり〳〵、士卒を、叱咤鼓舞して戰ふ、幸村、それと見て、麾を一揮、二揮、打ち揮りつゝ、
『素破や、軍には、勝つたるぞ、者共、懸かれや、懸かれ』
と疾呼すれば、眞田與左衛門、槍を執つて、眞先に、進み出で、矢庭に、敵兵三人を、突き伏せ、尙も、勢ひに乘じて、進み戰ふ。
大谷大學、槇島重利等、亦、幸村の出づるを見るより、又も、備を立て直して、返し戰ひ、城兵の勢ひ、再び振ふ。
修理、豐後守の二人、士卒を勵まし〳〵、敵中に、馳せ入りて、奮ひ鬪ふ、本多富正、亦、部下の兵を、指揮して、馳せ來り、幸村の兵を、目蒐けて、進み戰ふ。
幸村の意、偏に、家康の麾下を、襲はんと欲するに在り、急使を、先鋒の諸將に、派して、
『各〻粉骨して、越前勢に當り候へ、我れは、大御所と、雌雄を決すべし』
との旨を傳ふれば、大谷吉胤、槇島重利、福富平左衛門、多田藤彌齋以下の諸將、各〻心を協せ、力を戮せ、死を決

して、忠直の麾下を衝く。
忠直、それと見るより、憤然として、麾を打ち揮り、打ち揮り、
『懸かれや、懸かれ』
と大音に、指揮すれば、本多成重、狛伊勢守、笹沼大膳、齋藤民部、蘆田右衞門、太田安房守、山川讃岐守、多賀谷左近等、各〻部下を率ゐて、競ひ進む。
忠直の弟伊豫守忠昌、手に、十文字槍を、提さげつゝ、士卒に先だちて、進み戰ふ、城兵、念流左太夫の大刀を揮うて、奮鬪するを、見るより、
『扨ても、心憎き敵の振舞かな、イデ、我れ、討ち取らん』
と言ひつゝ、馬を馳せ寄せて、突き掛る。
左太夫は、大剛無雙の士、大刀を揮うて、切り込み〳〵、矢庭に、十文字槍の片鉤を、切り折れば、忽ち、槍を投げ捨てゝ、曳やと、組み付く。

天王寺の南門
大阪市天王寺區天王寺町天王寺の南門にして毛利勝永の陣せしところ

左太夫は、臂を伸ばして、一捻りに、捻ち倒し、其儘、押へて、首を掻かんとす、宛がら、老鷲の小雀を攫めるが如し。
此時、忠昌の馬丁、馳せ來りて、イキナリ、左太夫の利腕に取り付き、小姓毛受小三郎、亦、太刀を拔きて、左太夫

を、突き刺す、忠昌、得たりと、下より刎ね返し、取つて、押へて、首を取る。

これより、兩軍の戰鬪、益々烈し、幸村、不圖、毛利勝永等の、本多忠朝の爲めに、突破せらるゝを見るより、

『イデ、我れ、馳せ向つて、打ち破らん』

と言ふより早く、我れと旗幟同一なる望月宇右衞門に、越前勢の防戰を命じ、自ら手勢を率して、馳せ向ふ。

忠直、それとも知らず、益々兵を勵まして、進み擊ち、終に、大谷吉胤を斃し、藤掛定方をも、斃して、兵勢、彌々振ひ立つ。

前面を見れば、赤旗を飜へし、唐人笠の馬標を立てたる一隊あり、忠直、麾を取つて、指しつゝ、

『あれこそ、眞田左衞門佐なれ、追つ取り込めて、討取れや』

と呼はれば、武勇に誇れる面々、我れ討たんと、各々競ひ掛かる。

黑糸縅の鎧を著し、高角の甲を戴き、月毛の馬に跨れる敵の一將、忽ち、眞先に、進み出で、

『それなるは、越前殿の御手とこそ、見受け參らすれ、斯く申すは、眞田左衞門佐幸村なり、イザ、勝負を決し候はん』

と言ふより早く、士卒三百人を率して、群がる敵中に、躍り入り、右を擊ち、左を衝き、死力を盡して、奮ひ戰ふ、向ふところ、皆、靡く、越前の勇士、片桐丹後守、大に怒り、長刀を提げて、躍り出で、

『眞田殿の御働き、驚き入つてこそ候へ、これは、片桐丹後守と申すもの、イザ、見參申さん』

と言ひも敢へず、無二無三に、切つて掛かれば、彼方は、

『優さしき敵の振舞かな、左らば、幸村が最後の槍先、受けて見よ』

と言ひさま、槍を揮うて、突き立て來る、手練の鋒尖、閃電の如し。

丹後守、事ともせず、飛び違ひ、馳せ違へ、祕術を盡して、戰ふこと少時、越前の勇士、

『イザ、眞田を討ち取つて、高名せん』

と思ひつゝ、山田久藏以下、我れも〳〵と、名乘つて、突き掛かれば、彼方は、意氣、益々振ひ立ち、イキナリ、久藏を突き倒し、更に、丹後守の跨れる馬の胸部を、突き刺し、其地上に、降り立つを、尻目に見つゝ、尙も、近寄る敵騎、二三人を、突き落す、意氣、四邊を拂ふ。

左れども、味方の勇士大塚清庵、高梨主膳以下、盡く、討たれて、後に殘れるもの、只、五六人に過ぎず。

『今は、是れまでなり』

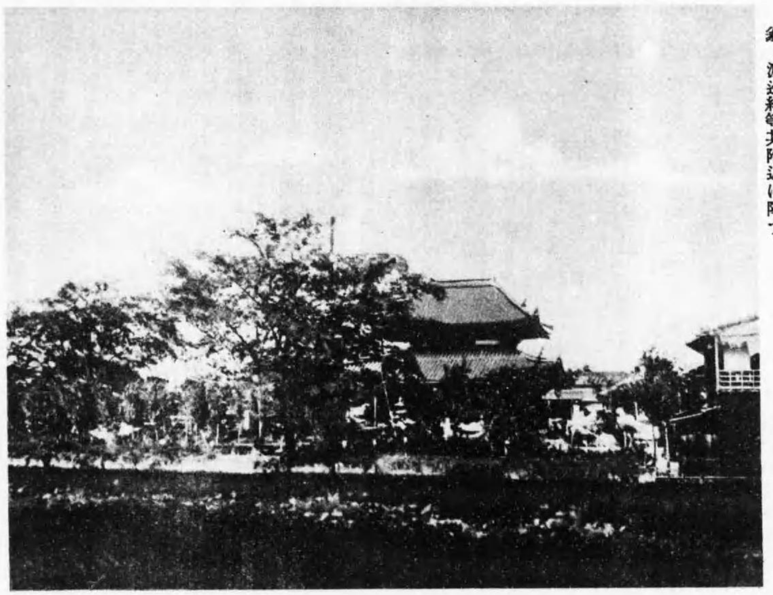
と思へば、忽ち、鞍笠に、突つ立ち上りて、大音聲に、

『扨ても、我れを、左衞門佐と思ひて、骨折り給へることの笑止さよ、まこと、我れは、左衞門佐にあらず、信州の住人望月宇右衞門村國と申すもの、今ぞ、主君の御爲めに、一命を擲ち候はん、我れと思はん人々は、組めや組め』

と呼はりつゝ、馳せ廻る。それと聞ける丹後守、

『扨ては、幸村にてはあらざりしか、マンマと欺かれぬるこそ、無念なれ、左れども、目掛けし敵を、人手に渡さんも、殘念なり、イデ、我れ、討ち取らん』

と思ひつゝ、又も、長刀を揮うて、薙ぎ立て、切立つ。



庚申堂の南方
大阪市天王寺區天王寺町天王寺の南方に在り毛利勝永の先頭及び竹田永翁、渡邊糺等其附近に陣す

宇右衞門、又槍を取つて、戰ふこと數合、忽ち、馬上より飛び下りて、引つ組み、曳やとばかり、捻ぢ倒して、上になり、下になり、刎ね返し、刎ね返さるゝこと、五六度、終に、刺し違へて、俱に斃る。

此間に、城將槇島重利も、討たれ、名島忠純も、亦、討たれて、幸村の先鋒、今や、盡く、敗れ退く。

忠直、馬上より、宇右衞門の討たるゝを、望み見て、

『左衞門佐を、討取るからは、復た恐るゝに足るものなし、イザ、此勢ひを以て、城中に、乘り入れや』

と呼はりつゝ、命じて、急鼓を撾つこと、鼕々又鼕々、全軍、齊しく鯨波を作つて、ドウと、馳せ進む。

七八　天王寺口の合戰（三）

天王寺口の先鋒本多出雲守忠朝、城將竹田永翁等と、銃戰すること少時、偶〻越前兵の、眞田幸村の先鋒と、交戰するを見るより、忽ち、憤然として、

『扨ては、越前勢に、先を越されたるか、殘念なり、一命を抛つて、武勇を、萬代に轟かせや』

と呼はりつゝ、自ら、蜻蛉切の長槍を、提さげ、百里黑と稱する駿馬を驅つて、眞先に、馳せ出づ。

銃卒、亦、續いて、馳せ進み、敵を目掛けて、銃を發つ。

隊伍分裂、陣を作さず、老臣小野勘解由、亦、馳せ來り、此有様を見るより、

『扨ても、輕率なる備の立て様かな、斯くては、忽ちに敵に突き崩されんこと、必定に候ぞ、我等に任せ給へ』

と諫むれども、決死の忠朝、更に、耳にも入れず、

『大將たる我等次第に仕つれ、己れ如きが、何を知つて、左様の事を申すぞ、推參なり、控へ居れ』

と叱して、尙も、

『打てや、打て』

と指揮す、勘解由、大に怒りて、

『まだ嘴の黃色なる若大將の、何を御存知のものか、合戰には、合戰の法こそ候なれ』

と言ひ返せば、加藤忠左衞門も、亦、横合より、口を出だして、

『實にも、此輕卒なる備へざま、宛がら、鹿狩の勢子の

やうなり、あれに見ゆる備は、某の組子に候、あれこそ眞の備に候なれ』

と言ひつゝ、カラ〳〵と、打ち笑ふ、忠朝、忽ち、赫と怒り、

『我れを、嘴の黃色なる小兒とは、無禮なり、今一言、申して見よ』

と言ひつゝ、槍を揮うて、撲たんとす、勘解由、

『我等は、只今、討死するものに候、髑髏の物言ふと思して、腹を、な立て給ひそ』

と言ひさま、突と、右手に、馳せ退く、忠朝、益〻怒りて、槍を、サツと、横さまに、拂へば、解勘由には當らで、ハツシとばかり、忠左衞門に、當る。忠左衞門、思はず、馬上より、揼と落つ。大力無双の忠朝に、拂はれて、何かは堪らん、忠左衞門、矢庭に、起き上りて、馬に飛び乘りつゝ、

『殿、よくも、某を叩き落され候よな、迚も、死すべき我等に候、最早、今生にては、御目に掛かり候まじ、イデ〳〵、死出三途の先登仕つり候はん』

と言ひも敢へず、憤然として、眞一文字に、馳せ出づ。

庚申堂
此れは庚申堂にして毛利勝永の先頭の陣したるところ

忠朝、それと見るより、

『續けや、者共』

と呼はりつゝ、馳せ出づれば、勘解由以下、皆、後れじと、馳せ出づ。

城兵、今は、躊躇せず、竹田永翁、眞先に、兵を進めて、馳せ來り、續いて、淺井周防守長房、亦、士卒を督して、馳せ來る。

兩軍、見る〳〵、相近づく、各〻ドツと、鯨波を作ると齊しく、槍を捻つて、突き進む。

忠朝、長さ八尺五寸の鐵棍を備ふ、人夫六七人の力を以て、僅かに、之れを擔ふ。

忠朝、今日ぞ、討死と思へば、勇氣、日頃に、十倍す、輕輕と、此鐵棍を、打ち揮り〳〵、ドツと、喚きて、敵中に、馳せ入り、縱横無盡に撲り倒し、叩き倒す。

觸るゝもの、皆、頭碎け、骨折れ、算を亂して、バタ〳〵と僵る。

城兵、大に驚き恐れて、左右に、走り避け、皆、忠朝の僚軍秋田城介實季、松下石見守重綱、植村帶刀泰勝、須賀攝津守勝政、六郷兵庫頭政乘、淺野采女正長重等の諸陣に、頽れ掛かる。

忠朝、崩るゝ敵を、見向きもせず、益〻勇を奮うて、突進し、永翁の陣を破り、長房の備を破りて、尙も、馳せ進む。

城主毛利豐前守勝永、其子式部少輔勝家、樫野勘解由昌孝、山本左兵衞豐種、篠原又左衞門忠照、石川肥後守數矩、湯淺右近丞忠壽、小倉作左衞門行春、樋口淡路守雅春、織田左衞門尉信次、三浦飛彈守義世、稻木右衞門佐敎量等、斯くと見るより、二手に分れて、左右より、挾み擊つ。

忠朝、更に、事ともせず、鐵棍を揮うて、眞一文字に、馳せ進み、當るに任せて、打ち破り、打ち崩す、向ふところ、前なし、見る〳〵、敵陣の中央を、突破して、北方に、駈け拔く、意氣、虹霓の如し。

不圖、左方を見遣れば、赤地に、六紋錢の旗、唐人笠の馬標を、眞先に、押し立てゝ、馳せ來る一隊の敵あり、是れぞ、眞田幸村の忠朝に當らんと欲して、馳せ來れるもの。

時に、越前兵も、亦、唐人笠の馬標を、中に包んで、攻め戰ふ、忠朝の部下、望み見て、大に驚き惑ひ、

『あれ見よ、眞田は、正しく、越前勢と戰へるに、此處にも、同じく眞田あり、何れが、眞の幸村ぞ』

と言ひつゝ、早や、浮足立ちて、見ゆれば、忠朝怒つて、聲を張り上げ、

『眞田が十人、二十人、出でたればとて、何程の事かあらん、目に當るを幸ひ、片端より、討ち取れや』

と呼はりつゝ、又も、鐵棍を、打ち揮り〳〵、奮進すれば、固より、決死の勇士、何かは遲疑せん、

『眞田を討ち討つて、高名せよや』

と言ひつゝ、大屋作左衞門、眞先に、馳せ出づれば、小鹿主馬介、續いて、馳せ出で、久保田傳次郎、大原長五郎、柳田左馬介、山本只右衞門、原田四郎兵衞、柳原勘兵衞、及び浪士匹田道帥、保科甚四郎正貞の面々、我れ先にと、競ひ進む。

幸村、咄嗟に、陣を偃月に構へて、三方より、取圍み、一聲、

『打てや』

と叫べば、銃手、聲に應じて、ドツとばかりに、連べ掛く。

忠朝の士卒五六十人、枕を並べて、倒るれば、餘兵、思はず、逡巡して、進まず、忠朝、麾を打ち揮り〳〵、

『卑怯なり者共、懸かれ〳〵』

と厲聲、疾呼すれば、大屋作左衞門以下、復た猛然として、爭ひ進む。

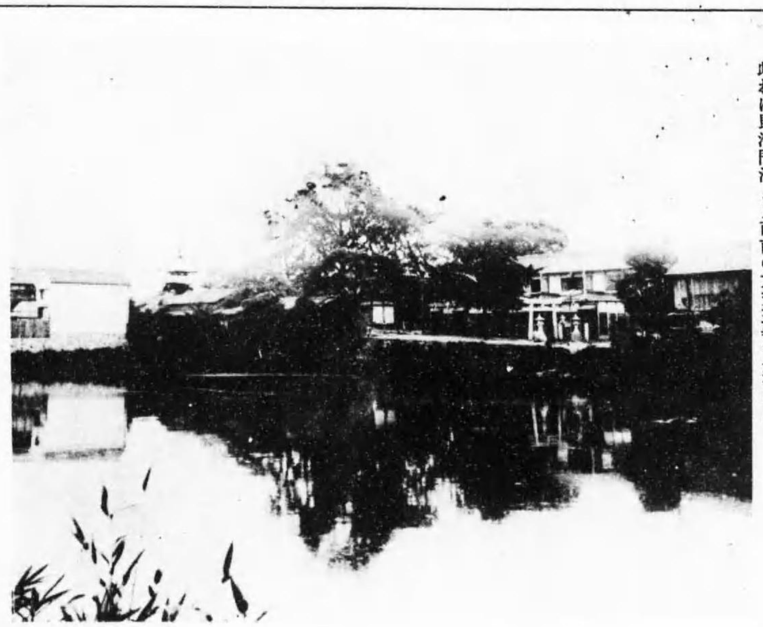
幸村の部下は、皆、百戰の勇士、忠朝の兵を、中に包んで、一氣に、擊滅せんとす。

左れども、忠朝は、關東無双の剛勇、人も恐るゝ幸村を、物の數ともせず、例の鐵棍を、打ち揮り〳〵、眞一文字に、群がる敵中に、躍り入る、觸るゝもの、人となく、馬となく、盡く碎く。

左しも勇悍なる眞田勢も、皆、身を縮めて、顫き恐れ、誰れ一人、我れ當らんと言ふものあらず、幸村、此體を見るより、

『彼れは、強敵なり、正面より、討ち取らんとせしは、誤なり、中を開きて、遣り過ごし、背後より、討ち取れや』

と呼はれば、士卒、聲に應じて、サツと、左右に披き、忠



沙門池
大阪市天王寺區天王寺町天王寺の東北に在り大野治長の出陣せしところ
此れは毘沙門池より西南の方天王寺を望むもの

朝の馳せ抜くるを待つて、又も、合して、背後より、急に撃つ、一開一闔、宛ら、臂の指を使ふが如し。

忠朝、それと見るより、忽ち、取つて返し、又も、敵中に、馳せ入りて、縱横無盡に闘ふ、一揮に敵を倒すこと二三人、向ふところ、皆、披靡す。

忠朝、快戰數刻、敵首を得ること二十七級、此隙に、これを鐵棍に、結ひつけて、輕卒十人に舁がせ、舍兄美濃守忠政の安倍野の陣に、遣はして、

『忠朝、今日こそ、討死仕つるべく候へ、豫て、用意の鐵棒を以て、思ふきまに、働かんと存ずるものから、更に、手に立つ敵とても候はず、僅かに、武者らしき敵二十七人、討ち取り候へば、最後の置土産として、進上せしめ候』

と申し送り、更に、右手に、大刀を揮ひ、右手に、鐵鞭を執つて、又も、敵中に、馳せ入り、

『本多出雲守忠朝が、死物狂ひの手並を、見よや』

と呼はり〳〵、右を斫り、左を撲つ、從士、亦、皆、奮闘すれば、幸村の部下、忽ち、色めき渡る、忠朝、

『素破や、軍に勝つたるぞ、此圖を外さず、突き崩せや』

と指揮すれば、小野勘解由、加藤忠左衛門、大屋作左衛門、中根權兵衛、藤井治右衛門、臼杵七兵衛等、鋒を揃へて、奮進し、各〻喚き叫んで、突き立つ。

眞田勢、今は、怯へず、先を爭うて、走らんとす、幸村、少しも、騷がず、

『引くな者共、日頃の武功も、水の泡となるべきぞ、名を重んずるものは、只、進んで、死ねや死ね』

と勵ましつゝ、鼓〻として、金鼓を打てば、士氣、復た俄然として、振ひ立つ。

城將伊木七郎右衛門遠雄、幸村の勢ひ、危しと、見るより銃手に向ひて、

『打てや打て』

と指揮すれば、銃手五十人、筒を揃へて、横合ひより、浴せ掛く。

忠朝の兵、矢庭に、倒るゝもの十數人、鋒尖、少しく怯めば、幸村、

『素破や、懸かれ』

と呼はりつゝ、靡も斷ぎれよとばかりに、打ち揮る。

杉田五左衛門、大熊備前、雨森傳左衛門等、各〻槍を執つて、忠朝の麾下を、衝けば、續いて一騎、

『去年の合戰にて、名をば聞きつらん、信州駒ヶ嶽の大貳坊とは、我事なり』

と名乘りつゝ、十文字の槍を捻つて、突き入り、これに續いて、上穗十一騎小林義國、鹽木九四郎、横山五郎、湯原三四郎、田中員近、春日義昌、北村政明、小平義近、荒井圖書之助、北原春之丞、木下大隅の面々、口々に、名乘り掛け〳〵、各〻馬を驅つて、突き入り、突き進む。

勇將と勇將、猛士と猛士との兩々、相闘ふ、叱咤、風を生じ、意氣、天を衝く、戰闘猛烈、修羅よりも、慘たり。

七九　天王寺口の合戰（四）

戰闘、今や、頂點に達す、忠朝の部下、既に、數陣を破りて、氣力、寢く疲れ、藤井治右衛門、中根權兵衛、臼杵七兵衛、加藤忠左衛門、山崎半左衛門等の勇士、續々敵刃に斃れ、大原長五郎、村越茂兵衛、青山五左衛門、柳原嘉兵

衛、小森勘右衛門、門田治犬夫、土屋太郎八、石川半彌、稲毛市郎兵衛、内藤五郎左衛門、杉浦四郎右衛門、川崎市左衛門、内藤五郎作、宇佐美小右衛門等の十四人衆、亦、皆、奮闘して倒る。

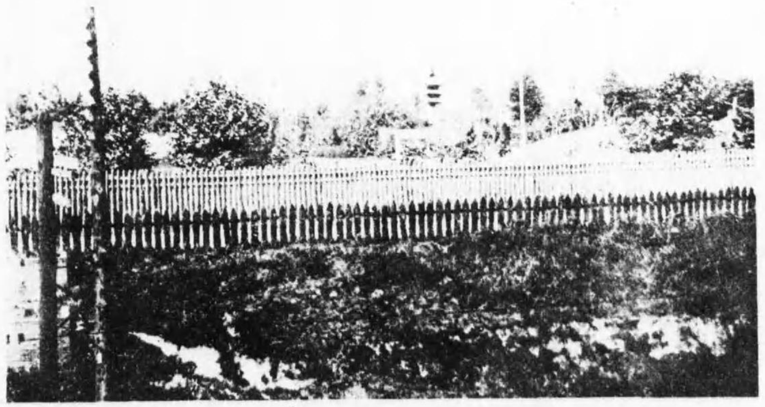
忠朝の左右、漸く疎なり、幸村の部下、大に勇んで、突き進めば、忠朝の從士小野勘解由、大屋作左衛門、土橋加兵衛、久保田傳十郎、山本只右衛門等、槍を揮うて、拒ぎ戰ふ。

駒ヶ嶽の大貳坊、十文字の槍を、提さげて、馳せ來り、イキナリ、眞先の兵を、突き倒せば、土橋加兵衛、大に怒つて、槍を合はす。

入貳坊、倶に戰ふこと、數合、一聲、曳と叫んで、加兵衛の胸板を、突き立つれば、鎧、堅くして、槍折る。

加兵衛、得たりと、突き進めば、大貳坊、太刀を拔きて、渡り合ふ、幸村の從士七八人、馳せ來りて、大貳坊に、力を合せて、難なく、加兵衛を、突き伏せて、首を取る。

忠朝、望み見て、大に怒り、馬を驅つて、勢ひ鋭く、馳せ來る、左しもの駿馬も、數刻の奔驅に疲れて、膝を折れば、



天王寺の北方
此れは天王寺を南方より望み見たる光景なり東西兩軍の奮鬪馳逐せるところ

忠朝、ひらりと、地上に、降り立ちさま、左手の鐵鞭を揮うて、大貳坊の馬の鼻づらを撲つ。

馬、驚きて、跳ね上がれば、大貳坊、鞍に堪らず、横さまに、ドウと、投げ出だされ、矢庭に、起き上れば、忠朝、左手に、突つ立つ。

大貳坊、大に勇み立ち、太刀を揮うて、切つて掛かる、忠朝、莞爾として、笑みつゝ、

『己れは、天晴、果報者なり、我が冥途黄泉の先驅に、召連るべきぞ』

と言ひさま、鐵鞭を揮うて、腰の番を、撲ちつけ、其漂ふところを、大刀を揮うて、サックと、肩先より、斬り下ぐ。

雨森傳左衛門、斯くと見るより、十文字の槍を扱きて、突き掛れば、忠朝、鐵鞭を以て、サッと、拂ひ退け、イキナリ、大刀を揮うて、切り付く。

傳左衛門、身を披きて、拔き合はせ、一擊、二擊するよと見る間に、早や、太刀先、亂れて、擊たれんとす。

城兵七八人、それと見るより、バラ〳〵と、馳せ來り、傳左衛門を援けて、忠朝を、圍み擊つ。

忠朝の從士小野勘解由、大屋作左衛門、數ヶ所の痛手にも、屈せず、忠朝を助けて、奮ひ戰ふ。

幸村の從兵二十餘人、亦、來り加はれども、忠朝主從、尙も、怯まず、當るに任せて、突き倒し、斬り倒す。

伊木遠雄、此有様を望み見て、馳せ來り、正面より、忠朝に、擊つて掛かる。

忠朝、大刀を閃かし、鐵鞭を揮ひつゝ、猛然として、前後左右に、馳せ廻はれば、敵兵、あしらひ兼ねて、バッと、逃げ散ず、忠朝大音聲に、

『本多出雲守忠朝、此れに在り、穢なし〳〵、返せ〳〵』

と呼はれば、城兵、又も、四方より、來り圍む。

忠朝、今は、鎧も斷れ、背旗も破れ、身には、大小十餘創受くれども、意氣、尙、衰へず、又も、奮然として、敵を衝く。

會〻一丸、飛び來つて、乳の上部に、中れども、更に、事ともせず、敵を目蒐けて、擊つて掛る。

德永甚右衛門は、正面より、雨森傳左衛門、杉田五左衛門は、左右より、各〻忠朝に、突いて掛かる。

續いて、眞田與左衛門、大熊備前以下、馳せ來るもの數十人、槍を攢めて、四方より、突き掛くるを、猛氣の忠朝、

『扨ても、物々しき敵の振舞かな、一人殘らず、討取らん』

と呼はりつゝ、近づく敵を、斬り倒し、撲ち倒し、終に、敵を殺すこと、前後六十七人。

左れども、身も、亦、銃創を蒙むること、總て數十ヶ所、全身、朱に染みて、見るさへ、物悽きばかり。

甚右衛門、忠朝の少しく怯むを、見るより、無二無三に、突き掛かれば、忠朝、

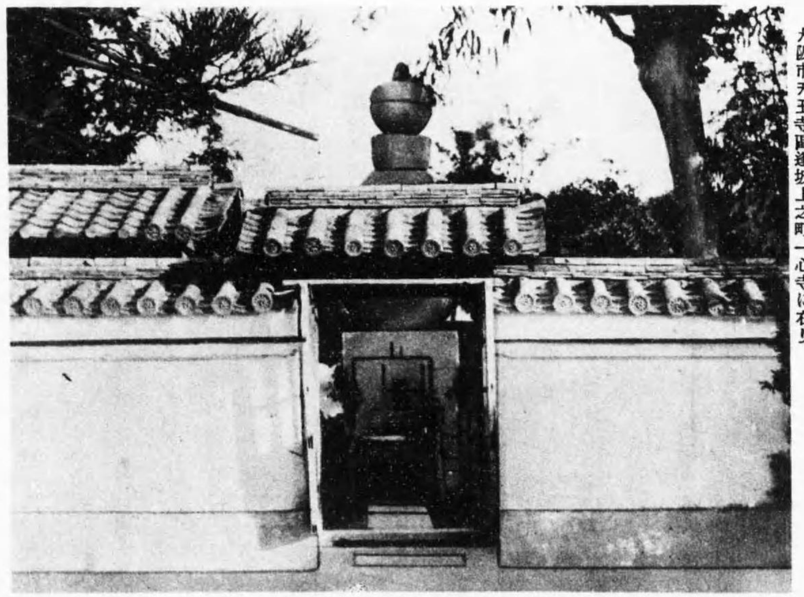
『己れ、推參なり、イザ、此世の暇取らせん』

と言ひさま、サッと、躍り掛かり、勢ひ餘つて、思はず、小溝の中に、陷いる。

甚右衛門、透かさず、一槍を著くれば、傳左衛門、與左衛門の二人も、亦、同時に、突き立つ、甚右衛門、

『我れこそ、一番なれ、イデ、首を取らん』

と言ひつゝ、馳せ寄り、左手を、甲の頂邊に、掛くると齊しく、忠朝、忽ち、ムックと、起ち上る。



本多忠朝の墓
大阪市天王寺區逢坂上之町一心寺に在り

甚右衛門、驚いて、逃げんとするを、忠朝、矢庭に、引つ捉へて、溝中に踏ん込み、大刀を、突き立てつゝ、立ちすくみに、息絶ゆ、年三十有四。

傳左衛門、馳せ寄りて、首を取らんとす、折柄、忠朝の家臣久保田傳十郎、山本只右衛門、小鹿主馬介、大原惣右衛門、柳田平兵衛等、馳せ來りて、

『我等、主人の討死を、知らざりしこそ、無念なれ、武士の芳志に、其死骸は、申受け候はん、其代り、我等の首を參らせん』

と言ふより早く、傳十郎は、矢庭に、忠朝の死骸を、引つ掛けて、退かんとし、只右衛門等は、各〻刀槍を執りて、屹と、身構ふ。

城兵、忠朝を倒して、意氣、大に振ふ、斯くと見るより、

『五人共に、討取れ』

と言ひつゝ、各〻競ひ掛かる、幸村、俄かに、制し止めて、

『暫く、馬を休めよ、此一戰は、是れまでぞ』

と言ひさま、ひらりと、馬より、降り立ち、

『扨て〳〵、本多は、古今無双の勇將かな、所詮我等の勝つべき軍にあらず、定めて、親戚も多からんに、其死骸は、快よく、取引らすべし、頓て、死すべき身の、首を取りて、何かはせん、幸村、如何なる宿世の惡緣ありて、可惜、斯かる勇士を、討取りしやらん』

と言ひつゝ、暗涙に咽び、屹と、只右衛門等の方に、向ひて、

『合戰は、格別の事、弓矢の禮儀として、其れなる死骸は、返し申さん、引取りて、弔ひ給へ』

と述べ、忠朝の死骸に對して、一禮しつゝ、道を披きて、無事に還す。

忠朝の從士の死せるもの、小野勘解由、大屋作左衛門、加藤忠左衛門、藤井治右衛門、中根權兵衛、臼杵七兵衛、土橋加兵衛、山崎半左衛門、及び大原長五郎等の十四人衆以下、四十七騎。

幸村の部下にして、死するもの、駒ヶ嶽大貳坊、德永甚右衛門、及び上穗十一騎以下、屈竟の勇士二十九人、雜兵百七十餘人、幸村、戰、捷つも、兵力、爲めに頗る殺ぐ。

八〇　天王寺口の合戰（五）

城將竹田永翁、淺井周防守長房等の、忠朝に、突破せられたるもの、其僚軍秋田城介實季、松下石見守重綱、六郷兵庫頭政乘、淺野采女正長重等の陣に、頽れ掛かれば、何れも、

『敗軍の城兵、何程の事かあらん、只、一戰に、追ひ崩せ』

と呼はり〳〵、備を亂して、突き掛かる。

永翁、長房、各〻士卒を、指揮して、突き進み、勝敗、容易に決せず。

既にして、城將毛利勝永、其子勝家等、亦、忠朝に突破せられて、實季等の備に、馳せ掛り、三方より、突き立て來れば、衆寡、勢ひ適せず、終に、後方に、潰え走る。

後方には、小笠原兵部大輔秀政の陣あり、兵を三段に分けて備ふ、總勢一千六百人、秀政、前軍の戰、既に合するを見るより、其子信濃守忠脩、大學介忠政の二人を、馬前に召して、杯を擧げ、

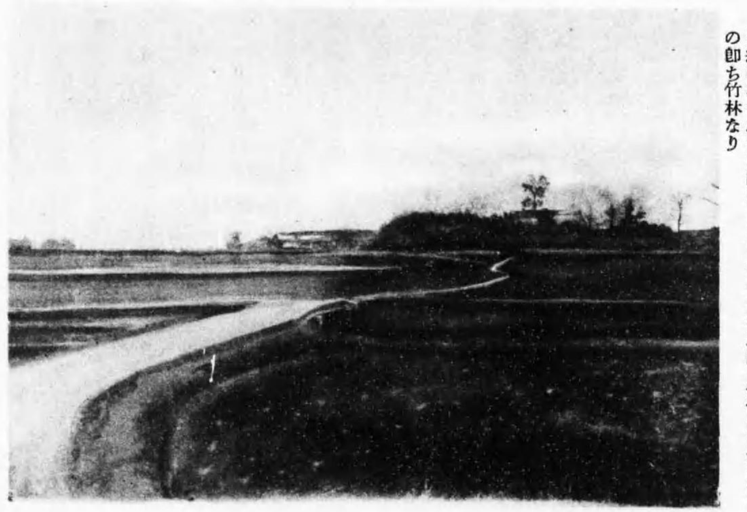
『今日こそ、我れは、討死せん、勝敗に拘はるべからず、汝等兄弟は、必ず、身を完うして、父の家名を繼げよ、兄弟倶に、死することあるべからず、假令、合戰は、難儀なりとも、一人は、必ず、生き殘りて、我が死後の忠節を、盡すべし』

と說き諭しつゝ、ホロリと、涙を垂る、兄忠脩、其弟忠政を顧みて、

『我れは、本城を守るべしとの御下知を蒙むりながら、此れに背きて、自儘に出軍せり、軍令を破れる身の、所詮、討死の外あるべからず、我れも、亦、父君と與に、屍を戰場に曝らすべし、汝は、生き殘りて、家名を繼ぎ、父兄の忠死を、水泡に歸すべからず』

と說き勸むれば、日頃、闊達の忠政、

『父上、兄上の討死せんと思さるゝは、然ることながら、凡そ、戰場に臨むもの、誰れかは、生きて還らんと存ずべき、合戰、若し、利なくんば、思ふ儘に働きて、切死仕つる分までの事、何條、女々しくも、遁げ歸り候はんや、左れども、戰、勝つて、利を得なば、何も、無理に、



竹淵村の竹林
河内國中河内郡龍華村大字竹淵に竹林あり俗に家康眞田幸村に逐はれて此中に隱れしと稱するもの此圖の前面に見ゆるもの卽ち竹林なり

一命を捨つるに及び候はず、生きるも、死ぬるも、其時の成行、一つに候、前以て、定め置くべきことかは、あれ御覽候へ、味方は、早や、敗れ候ぞ、疾く〳〵、懸りて、合戰を御始め候へ』

と言ふうち、實季、重綱、政乘、長重等の諸軍、早や、バラ〳〵と、陣前へ、崩れ掛る、秀政、厲聲一呼、

『進めや者共』

と言ふより早く、自ら先陣を提さげて、敗兵の中を、突き拔けつゝ、馳せ進む。

續いて、二陣も進み、三陣も進み、全軍、一齊に、鯨波を作つて、ドウと、馳せ進む。

續いて、二翁、淺井長房は、右翼より、來り擊ち、毛利勝永は、左翼より、來り迫る。

秀政、一擊して、永翁、長房の兵を破り、更に、兵を縱つて、溝渠を、躍り越えつゝ、勝永の兵を擊つ。

勝永、馬上に在りて、此有樣を、望み見つゝ、

『小笠原ほどのものが、備をも立てずして、馳せ掛かるは、奇怪なり、必定、討死を覺悟すらん、雜兵、葉武者には、目を掛けな、只、大將を、選み討ちにせよ』

と指揮しつゝ、輕卒を、中に包んで、折り敷き、これも、

ドッと、鯨波を合はす。

決死の小笠原勢、何かは躊はん、無二無三に、突き進めば、勝永、一聲、

『起て』

と叫ぶと齊しく、皆、槍を執つて、突き來る。

小笠原勢は、徒歩なり、毛利勢は、馬上なり、勝永の兵、馬を驅つて、懸け立つれば、秀政の兵、見る〳〵、馬蹄に蹂ぢられて、死傷するもの、數十人。

左れども、固より、死を決したる小笠原勢、各〻槍を揃へて、突き進み、一歩も、後に退かず。

勝永の兵、尙も、馬を驅つて、前後左右に、懸け立つれば、秀政の苦戰、言ふべからず、

『面々、只、死ねや死ね、後に引きて、敵に笑はれな』

と呼はり〳〵、自ら十文字の槍を揮うて、突き進む、勝永の兵、

『あれこそ、大將なれ、討取つて、高名せよ』

と呼はりつゝ、四方より、群がり來りて、圍み攻む。

剛勇絶倫の秀政、當るに任せて、突き立て〳〵、敵を斃すこと數人。

既にして、槍折れ、更に、從騎の槍を把つて鬪ひ、又敵を殺すこと數人。

家康馬繋の楠跡　河內國中河內郡龍華村大字竹淵鹽川常次郎の邸內竹林中に在り俗に家康幸村の爲めに逐はれて此竹林に隱れ幸村に追跡せられて更に鹽川の家に隱れしと稱するもの

敵兵、更に、屈せず、益〻八方より、群がり來りて、突き立つれば、秀政、身に七ヶ所の重創を、被むりて、撞と、馬上より落つ。

家臣金子平太夫、馬側に在り、亦、群がり來る敵兵と、戰うて斃る。

勝永の士卒、爭ひ來りて、秀政の首を、取らんとす。

秀政の家臣仁木勘解由、天野四郎左衞門、各〻部下を率ゐて、馳せ來り、死力を盡して、奮鬪すれば、勝永の兵、矢庭に、討たれ死するもの、三十餘人、傷を被むるもの、亦、數十人、其勢ひ、少しく怯む。

秀政の家臣原四郎兵衞、勝野五太夫、堤五太夫、竹內勘九郎等、其隙に、秀政を扶けて、引き退き、岡村佐五衞門、澤手才兵衞等、亦、遮ぎる敵兵を、逐ひ拂ひ〳〵、漸く、久寶寺村一民家の庫中に投ず。

秀政の嫡男忠脩、名馬碁盤と言ふに乘じて、二三十間の前方に戰ふ、父の重傷を負うて、退くを見るより、

『今は、是れまでなり、我れも、軍令を破つて、出陣せるもの、討死は、覺悟の前なり、イザ、然らば、我れも、

鹽川の邸宅　其一　河內國中河內郡龍華村大字竹淵鹽川常次郎方は俗に家康の隱れ忍びし處なりと稱するもの此れは其本宅跡なり

快よく、一戰して、討死せん』

と言ひさま、從兵三十騎と與に、奮然として、敵中に突き入り、會釋もなく、捲くし立つれば、勝永、憤然として、士卒を勵まし〳〵、忠脩の兵を、中に包んで、攻め立つれば、忠脩の從兵、瞬く間に、討たれ死するもの、二十七人。忠脩、事ともせず、槍を執つて、突き立て〳〵、敵を倒すこと數十人、敵兵、此勢ひに恐れて、辟易すれば、忠脩、

『卑怯者、返し候へ、小笠原信濃守忠脩、此れに在り』

と大音聲に、呼はりつゝ、逐ひ駈く、敵兵、それと聞くより、

『扨ては、好き大將なり、討ち取れや』

と言ひつゝ、又取つて返し、槍を揃へて、四方より、突き來る。

忠脩、亦、槍を打ち揮り〳〵、群がる敵を、突き倒し、撲り倒し、殊死して、奮鬪すること數合。

既にして、淺井長房、福島正重等の兵、亦、馳せ加はり、槍を叢めて、一齊に、突き立つること七八本、忠脩、鞍上を離るゝこと、一二尺にして、撞と、地に落つ。

征矢野半彌等、亦、皆、奮鬪し、忠脩の馬前に於て死す。

秀政の二男忠政、年二十、父の戰、急なる時、家人澁田見縫殿介、安積覺兵衛、飯尾甚兵衛等、二十餘騎を從へて、眞一文字に、馳せ進み、敵陣の一角を、突破して、益〻進む、覺兵衛、

『合戰は、後の方に候、殿も、若殿も、後の方にて、敵と懸け合ひ給へ、今や、味方難儀の態に候、早々、引返し給へ』

と言へば、忠政、

『戰場の武勇は、父、兄も、手々の働きなり、彼方は、彼方にて戰ひ、我れは、我れにて働かん、若し、遮ぎる敵なくば、進んで、城に乘り入らんと存ずるものぞ、何しに、後へ引かんや、只、進め〳〵』

と言ひつゝ、益〻進む。

前方を見遣れば、一隊の敵あり、是れぞ、武田永翁の城中に、引き還らんとするところ。

忠政、それと見るより、十倍の敵を、事ともせず、自ら槍を執つて、眞先に、馳せ進み、容赦もなく、敵中に、躍り

入る。

永翁、小敵と見て侮り、兵を縱つて、圍み攻むるを、忠政、渾身の勇を奮うて、前後に當り、左右を衝き、敵勢を、突き破りては、又馳せ返して、戰ふこと數回、終に三創を蒙むりて、溝中に、轉び墜つ、左れども、提樹の枝に懸かりて、落下せず。

敵兵、提上より、槍を以て突く、忠政、屈せず、倒れながらに、刀を拔きて、切り拂ふ。

一敵、銃を把つて射つ、藥、熱して、發せず、他の一敵、溝中に入りて、下より、忠政を刺す。

忠政の勢ひ、今や危し、會〻縫殿介、覺兵衛等、馳せ來つて、敵兵を、追ひ拂ひ、千野儀太夫、其隙に、忠政を引つ擔ぎて、左の方に退く、首を獲ること四十級。

秀政の從士、死するもの、二木勘右衛門政成、小笠原主水佐政直、岩波平右衛門貞重、島立内膳政繼、二木庄左衛門政元、淺香太右衛門重政、征矢野半彌廣重、白岩市左衛門光重、大日方次郎左衛門重香、森下善兵衛爲重、石束次郎右衛門景清、原彌次右衛門長重、武井治兵衛氏信、多々井六兵衛友重、川井庄兵衛長吉、富東六郎右衛門光氏以下、十數人。

此日、家康の陣前を、擔ぎ去る二屍あり、家康、見て、

『誰れなるぞ』

と問ふを、左右、

『小笠原兵部大輔、本多出雲守の屍骸にて候』

と答ふれば、家康、

『扨は、我が一言を、無念に存じて、討死せしと覺へたり、由なきことを、申せしものかな』

と言ひつゝ、涙を垂る。

既にして、秀政の未だ殊へざるを聞き、醫を遣はして、療せしむ、左れども、喉下の創、最も重く、左右に向ひて、

『信濃は』

と問ひ、

『御討死に候』

と答ふるを聞きて、其儘、息絶ゆ、年四十七。

八一　天王寺口の合戰（六）

眞田幸村、既に、本多忠朝の兵を破る、會〻毛利勝永も、亦、小笠原秀政の兵を破れるを見て、大に悅び、勢ひに乘じて、更に、家康の麾下を、衝かんとす。

前面を見れば、榊原遠江守康勝、諏訪因幡守賴永、保科肥後守正光、丹羽五郎左衞門長重、藤田能登守信吉、眞田河內守信吉等の陣あり、其後方には、酒井左衞門尉家次、松平丹波守康長、松平甲斐守忠良、牧野駿河守忠成、松平右近將監成重、水谷伊勢守勝隆、仙石兵部大輔忠政、稻垣平右衞門重綱等の陣あり、秋田城介實季、松下石見守重綱、六鄕兵庫頭政乘、淺野采女正長重等、亦、敗兵を收めて、諸所に陣す、幸村、此體を望み見て、

『扨ても、夥多しき軍勢かな、左れども、敵は何萬騎ともあれ、何條、打ち破らで置くべきや』

と屹と、思ひ極め、本鄕左近晴賢を、召し寄せて、

『御邊は、酒井左衞門尉の手と、懸け合うて、敵の勢力を、分たれ候へ、我等は、進んで、大御所の麾下を、打ち崩すべし』

と告げ、首を擧げて、

『明石の勢や來る』

と諸方を、見遣れば、白旗に、子持筋の旗三旒を、押し立て、瓜生野の方より、馳せ來れる一隊あり、幸村、

『素破や明石ぞ、イデ〳〵、此方よりも、押寄せん』

自ら合圖の黃旗を取つて、左右に、打ち揮ること數回、伊木遠雄、眞先に、前進し、松下重綱の陣に向つて、突貫すれば、勝永、亦、石川數矩、多田藤彌齋の兵を、左右に備へて、秋田實季の陣に、突擊す。

實季の銃隊長秋田嘉內、荒木五與治等、邀へて、銃擊し、勝永の銃隊長岩村淸右衞門、佐治內膳等、亦、銃を發して、此れに應ず、勝永、

『猥りに、鐵砲を放つべからず、心を鎭め、筒口を下げて、打てよ』

と呼はれば、淸右衞門等、堤下に伏して、敵丸を避け、機を見て、ドッと、つるべ掛けつゝ、槍を提さげて、畑中より、突進す。

鹽川の邸宅　其二
此れは鹽川家の表門なり同家は鄕士にして世々惣右衞門と稱す

敵兵四人、槍を揃へて、突き來る、淸右衞門、內膳の二人、奮擊突戰、敵を逐うて、進むこと十數步。

敵の一人、堤上より、槍を投じて、淸右衞門の胸部を貫く、內膳、少しも、怯まず、益〻槍を捻つて、奮ひ進む。

敵兵、刀を拔きて、淸右衞門の首を、取らんとす、勝永の麾下、それと見るより、

『あれ取らすな、進めや進め』

と呼はり〳〵、各〻槍を揃へて、奮進し、敵兵を逐うて、實季の陣に、突き入り、一呼して、其兵を逐ひ捲くる。

遠雄、亦、忽ちにして、重綱の兵を擊破し、鞍上に立ちて、遙かの前面を見れば、七本の白旗、翩翻として、南風に翻へる、遠雄、掌を拍つて、悅びつゝ、

『あれこそ、目指す大御所の麾下なれ、左衞門佐の軍略、扨ても、神變不思議や、イデ〳〵、進んで、打ち破らん』

と言ひつゝ、眞先に、旗を進むれば、勝永、亦、數矩、藤彌齋と與に、兵を進む。

遠雄の前面には、本多上野介正純、立花左近將監宗茂、保科彈正忠正光、仙石兵部大輔忠政等の諸陣あり、遠雄、

『故太閤の御時より、生き殘りたる伊木七郎右衞門遠雄、今日、此陣前に於て、討死すべし、我れと思はんものは、來つて、槍先を試めし見よ』

と言ひつゝ、自ら槍を揮うて、奮進す、本多大隅守忠純、兄正純に代りて、兵を指揮す、それと見るより、

『敵は小勢ぞ、押つ取り込めて、一人殘らず、討取やれ』

と呼はり〳〵、自ら衆に先んじて、挺進すれば、士卒、亦、皆、爭ひ來つて、遠雄を圍み擊つ。

勝永父子、亦、遠雄の左右より、突進し、石川數矩、多田藤彌齋の二人も、亦、續いて進み、保科正光の兵を擊つて、之れを敗り、勢ひに乘じて進む。

藤堂和泉守高虎、井伊掃部頭直孝の二人は、將軍秀忠の前衞たり、勝永父子の突進し來るを、見るより、各〻先頭の兵を以て、防ぎ戰ふ。

既にして、遠雄、大呼奮擊、忠純の兵を破つて進む。

忠純の兵、背後より、遠雄の兵を、射擊し、銃丸、飛んで、味方の陣を掠む、東軍、

『素破や、本多上野介の逆心よ、裏切よ』

眞觀寺
眞觀寺は河內國中河內郡龍華村字龜井に在り萬松山と號す俗に家康鹽川家より更に此寺に隱れしと稱するもの

と犇めき合ひ、忽ちドウと、家康の麾下に、頽れ掛かる。

折りしも、淺野但馬守長晟、住吉街道より、兵を進め、越後少將忠輝の陣西を過ぎて、今宮に出づ、東軍、又、

『紀州勢の裏切ぞ』

と訇（ののし）りつゝ、騷ぎ立ち、亦、皆、家康の麾下に、崩れ掛かる、其騷擾、言はん方なし。

家康の陣は、枳殼原に在り、荆棘、疎に生じ、小堤、周圍を繞る、七旒の白旗、三葵章の旗、及び金扇の馬標を建て、侍臣、竝に徒士百餘人、これを護る、諸軍の、一時に、崩れ立つを、見るより、皆、愕然として、

『素破や、味方の敗亡よ』

と叫びも敢へず、皆、先きを爭うて、崩れ立つ、家康、怒つて、馬に跨らんとする時、一壯士、朱柄の槍を、執つて、小丘の上に、突つ立ち上り、

『こゝは御前なるぞ、御恩を忘れ、一命を惜んで、遁げ出す奴原は、後日、口をば、利かせまじきぞ、恥を知れる面々は、立ち歸つて、備を堅められよ、駒木根長次郎政次、これに在り』

と大音に呼はれば、衆心、漸く、鎭まりて、皆、馳せ還る、家康、

『疾く〳〵、馬より降りて、折敷けよ、大崩れになりたる時は、臆病者に、引立てられて、自餘のものまで、敗北するが、合戰の習ひぞ、老年の者共、皆、若年の長次郎に、見習へや』

と號令すれば、何れも、槍を取つて、折敷き、本多百助、亦、矢束を解きて、敵を待つ。

植村新六、駒井右京進、內藤掃部頭、秋元但馬守泰朝、松平右衞門大夫正綱、本多上野介正純、安藤帶刀直次、永井右近大夫直勝、松平助十郎正勝、松平主殿頭忠利以下、亦、馳せ來つて、本營を護る。

眞田幸村、遙に、家康の麾下の驚擾するを見るより、屹と、鎧を踏ん張りつゝ、

『機會（しほあひ）好きぞ、進めや進め』

と呼はれば、海野六郎兵衞幸鄕、赤旗を、陣頭に飜へして、驀地に、馳せ進み、諸陣の間を、馳せ拔け〳〵、忽然として、家康の陣前、數百步の地に、現はれ出で、

『眞田左衞門佐幸村、これに在り、前將軍德川殿に、見參せん』

と呼はりつゝ、眞一文字に、馳せ進めば、家康の麾下、皆、

『素破や、眞田ぞ』

と犇めきつゝ、俄かに、色めき渡る、家康、憤然として、

『何程の事やある、疾く〳〵、進んで、討ち取れや』

と指揮すれば、小姓、大番、書院番、小十人等、先きを爭うて、馳せ進み、こゝを先途と、奮ひ戰ふ。

家康、亦、親から、馬を進めんとすれば、南光坊天海、金地院崇傳の兩僧、アナヤと、立ち塞がり、

『扨ても、輕々しき御振舞に在はすものかな、こゝは、大將軍の出で給ふ所には候はず』

と諫めつゝ、緊かと、轡を押へて、放さず、家康、聲を荒らげて、

『我れは、若年より、戰場に臨めること、數十度に及ぶ、斯ることは、尋常の事ぞ、そこ放せや、邪魔すな』

と叱すれども、兩僧、尙、頑として、手を緩めず。

六郎兵衞、此體を見るより、遮ぎる敵を、蹴散らして、奮進せんとす、左れども、部下、殆んど、討たれ盡して、生き殘るもの、僅かに十人ばかりに過ぎず。

『今は、是れまでなり』

と思へば、六郎兵衞、大音聲に、

『今ぞ、名乘り候はん、マコト、某は、眞田左衞門佐にはあらず、信州の住人海野六郎兵衞幸鄕、幸村の名代として、此れに來れり、イデヤ、今生の思ひ出に、大御所の前にて、討死仕つらん』

と呼はりつゝ、猛然として、敵陣を衝いて斃る。

家康、一擧して、六郎兵衞の兵を殲すも、尙、幸村、勝永、遠雄等の殊死して、戰ふあり、又明石守重の、背後より迫れるあり、劍戟の聲、吶喊の音、相和して、騷然たり。

顧みて、味方を見れば、皆、北へ〳〵と進みて、其附近に在るもの、甚だ少なし、家康、命じて、貝を吹きて、兵を召さしむれども、其音、低くして、聞えず、安藤直次、焦つて、馬より、飛び下り、

『憶病者、貝をも吹き得ざるか』

と言ひさま、法螺を、引つたくり、頰をふくらませて、太く、高く、吹き鳴らせば、其聲、四方に、響き渡りて、諸兵、次第に、集まり來り、家康の陣形、復た忽ち、黑み渡る。

八二　天王寺口の合戰（七）

海野六郎兵衞の奮進するや、幸村、亦、續いて、兵を進め、松下重綱の陣側を、馳せ拔けて過ぐ。

眞田河內守信吉、其弟大內記信政の二人、赤旗を、望み見るより、

『あれこそ、叔父左衞門殿の手なれ、イザヤ、防ぎ止めん』

と言ひさま、陣を鶴翼に張りて、遮ぎり戰ひ、信吉、麾を打ち揮り〳〵、頻りに、士卒を、奮ひ勵ます、幸村、

『扨ても、天晴なる武者振りかな、亡父安房守殿、見給はば、如何ばかりか、悅び給はんに』

と感じ入りつゝ、

『それなるは、河內守よな、戰場の習ひ、叔父甥の容赦はなきぞ、イザ來れ』

眞觀寺の竹林
此れは眞觀寺の竹林にして昔時は八町四方ありしと云ふ寺は綠竹猗々の中に在り

と打ち呼はり、槍を取つて、進み戰ふこと數合、忽ち、馬首を回らして、引き返せば、信吉、

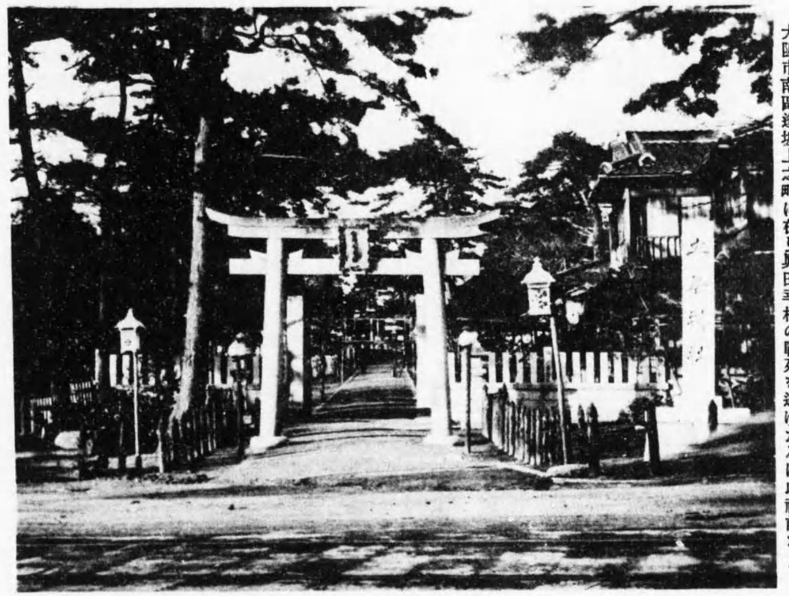
『穢なし左衞門殿

引き返して、勝負を決し給へ』
と呼び掛けつゝ、追ひ駈く、幸村、忽ち、向き直り、
『天晴、優さしき働きかな、當時、此幸村を、逐ひ立てしもの、汝の外に在るべからず、眞田の武名は、此れにて落ちじ、返せ〳〵、毛利、伊木等に、後を斷たれん、長逐ひは、無用ぞ』
と戒むれば、信吉、
『何を仰せられ候ぞ叔父上、勇士の戰場に出づるもの、誰れか、生きて、再び還らんと存ずべき、叔父上の御手に、懸からんこそ、末代までの本望に候へ、イザ、勝負を決し給へ』
と言ひつゝ、突いて掛かる、幸村、
『左らば、是非なし』
と言ひも敢へず、槍を取つて、馳せ掛かり、イキナリ、信吉の十文字の槍を、搦んで、サッと、刎ね落す。
信吉、焦らつて、太刀を拔かんとする間に、幸村、又も、馬首を回らして、一散に、馳せ去ること三四町、但ある小丘の上に、駈け登りて、唐人笠の馬標を、突つ立つ。

殘兵の望み見て、馳せ來るもの、武士五十騎、雜兵、二百人ばかり、今朝出陣せる時の、十が一にも、足らず。
首を回らして、後方を、見遣れば、越前少將忠直、一捷の餘威に乘じて、城中に、先登せんと欲し、部伍、堂々として、旗を茶臼山の方に進む、吉田修理、岡部豐後守、本多丹下、山本內藏助、多賀谷左近、笹沼大膳、高屋越後、落合美濃守、山川讃岐守等、次第々々に兵を進む、陣形連々、長蛇の如し、幸村、屹と、此光景を見遣ること少時。
『扨ては、越前勢は、城中を目掛けて、押寄すると覺えたり、此上は、我れも、快よく、一戰して、討死せん、然るにても、越前勢は、我れを討取らんとて、手を碎きしに、若し、他家の手に、首を與へなば、本意なかん、イデヤ、此勢とこそ、戰ふべけれ』
と思ひ極め、部下に向ひて、
『面々の、此期までも、我れに、附き添へるこそ、神妙なれ、城中に歸つて、討死せば、燒討となりて、首も見えまじ、若し、幸村こそ、遁げたれと言はれんは、本意にあらず、此處に討死して、右大臣君の御恩に、報ひ奉

つらん、來れや面々』
と言ふより早く、サッと、丘上を、馳せ下りて、廣場に出で、松下重綱、本多忠純の諸陣を、駈け拔けつゝ、忠直の老臣本多飛驒守成重の陣を、目掛けて、無二無三に、突き入る。
成重、奮然として、鐙を踏ん張りつゝ、
『素破や、眞田ぞ、一人餘さず、討取れや』
と呼はり〳〵、諸兵を勵まして、四方より、嚴しく、圍み擊つ。
幸村、昨夜、恩賜の采配を執つて、打揮り〳〵、士卒を鼓舞して、縱橫に、奮ひ戰ひ、前に現はれ、後に拔け、神出鬼沒、端倪すべくもあらず。
激戰數刻、何時しか、安居天神のあたりに在り。
越前少將忠直、既に、旗を茶臼山上に建て、益〻兵を進めて、幸村を擊つ。
時に、炎威、赫々として、燬くが如し、幸村の士卒、大小數戰を經て、各〻數創を蒙り、人も疲れ、馬も僵れて、今は進退、意の如くならず。

越前の兵、勢ひに乘じて、攻め戰ふこと、益〻急なり、眞田與左衞門、
『今は、是れまでなり』
と思ひ定め、赤旗をかなぐり取つて、クル〳〵と卷き、高紐を切つて、鎧を脫ぎ捨てさま、
『我れこそは、眞田左衞門佐幸村の執權同苗與左衞門信國なれ、見よ〳〵、敵の軍兵原、主人の供は斯くするものぞ』
と言ひつゝ、幸村の馬前に、立ち塞がり、短刀を拔くより早く、腹に突き立てゝキリリと、引き回し、旗を傷口に、押し込めつゝ、咽喉を、搔き切つて、前に伏す。
幸村、此壯烈の最後を見るより、莞爾として、打ち笑み、
『能くこそ仕たれ與左衞門、我れも、頓て、追つ付き候はんぞ、家人とは云へ、亡父の舍弟なり、馬上御免』
と言ひつゝ、鞍上に於て、合掌し、終つて、馬首を立て直すと齊しく、又も、槍を取つて、敵中に、突き入ち、奮擊突戰、自ら敵を殺すこと數人、心身、益〻疲れて、暫し、樹下に憩ふ。



安居天神
大阪市南區逢坂上之町に在り眞田幸村の戰死を遂げたるは此祠前なり

忠直の家臣西尾久作、銃手に命じて、連擊せしめ、自ら十文字の槍を執つて、奮進し、幸村を、馬上より、突き落して、首を掻く。

久作、其誰れの首たるを知らず、持ち還つて、忠直に示す、原隼人佐貞胤、一見して、

『これこそ、眞田左衞門佐の首なれ』

と言ひつゝ、泫然たり、久作、大に悅びて、首を家康の本營に獻ず、家康、召し見て、戰況を問へば、久作、功を衒ひて、

『左衞門佐、殊の外、奮戰候ひしを、某手を負ひつゝも、漸やう、突き伏せて、討取り候』

と答ふ、家康、

『幸村は、數度の合戰に、粉骨して、疲勞しつらん、爭かで、最後まで、左樣に、働き申すべきや』

と思ひて、別に、久作の功を賞せず、幸村の叔父眞田隱岐守信忠を召して、首の眞僞を問ふ、信尹、

『左衞門佐、初めての對面なり、生前に、相逢はずして、死後に、對面するこそ、本意なけれ、當時、弓矢取つて、誰かは、汝の上に立たん、如何なれば、一生、我れに楯つきて、由なき大阪の爲めに、斯かる最後を遂げたるぞ、思へば、不憫なり』

と言ひつゝ、涙を浮べ、眞田信吉を召して、厚く葬むるべき旨を命ず。

八三　天王寺口の合戰（八）

伊木遠雄、飽くまでも、家康の麾下を、襲はんと欲し、渾身の勇を鼓して、奮ひ進む。

毛利勝家、平賀伊織等、亦、部下數人と共に、馳せ進む。

家康の麾下、弓を把つて、之れを防ぐ、矢の飛ぶこと、雨よりも急なり。

勝家、伊織の二人、終に射すくめに、縮められて、其場に斃る。

遠雄、亦、全身に、矢を被むること蝟の如く、馬は既に倒れて、徒立となりて戰ふ、東兵、次第〳〵に、馳せ集まりて、今は、家康の麾下を、衝かんこと、叶ふべからず、遠雄、齒を切みつゝ、

『扨ても、御運目出度たき大御所かな、今は、所詮、討取らんこと、叶ひがたし、此所を退かんは、勇士の恥づる所なれども、去年以來、左衞門佐との約束あり、俱に、屍を竝べて、死せんこそ、本懷なれ』

と思ひ極め、一條の血路を開きて、安居天神の方に、馳せ赴けば、幸村、今しも、越前勢に當りて、苦戰しつゝあり、遠雄を見るより、

『今日の御働き、感じ入つてこそは候へ、殊に、日頃の約束を變ぜず、敵の圍みを、切り拔けて、此れへ、來らるゝこと、天晴、賴母しき心底かな、イデ〳〵、俱に、冥途に赴き候はん』

と呼はる聲も、未だ終らず、淺野采女正長重、須賀攝津守勝政の兵、早や、犇々と、來り迫る、遠雄、

『斯く見參候からは、今生に於て、思ひ殘すこと、少しも候はず、イデ、最後の一戰して、泉下に、君恩に報ひ候べし、左らばに候ぞ』

と言ひ捨てゝ、長重の隊に、突き入り、大身の槍を揮うて、縱橫に戰ふ。

勝萬
勝萬は大阪市天王寺區天王寺町に在り此れは大江神社の丘上より南方安居天神及び茶臼山の森を望むもの卽ち奮戰したる方面なり

左れども、數回の血戰を經て、心身、俱に、疲れ果て、終に、幸村と前後して、亂軍の中に斃る。

御宿越前守政友、幸村と、事を議せんと欲し、名馬荒波と云ふに乘じて、來つて、茶臼山の附近に在り、會〻越前勢の勝ちに乘じて、進み來るを、見るより、

『あれこそ、越前勢なれ、これ我が首を授くべき時ぞ』

と思ひ極め、屹と、馬を立てゝ、敵の陣中を、見遣る。

政友、通稱勘兵衞、曾て忠直の父秀康に事へて、一萬石を領し、後、故ありて、仕を致す、大阪に入城するに及び、莫逆の親友野本右近に、書を贈りて、

『政友、這たび、右大臣殿に賴まれて、大阪に立て籠ると雖も、多年牢浪の身の上、好き馬とても候はず、あはれ、殿の御馬を、賜はりて、御軍勢に、馳せ向ひ、快よく、一戰して、名を後代に殘し候はん、此儀、殿へ言上せられ候へ、莫大の芳恩に候』

と請ふ、右近、有りの儘に、具陳すれば、忠直、一たび、怒つて、卻けしも、頓て、又、

『イヤ〳〵、若し、與へざれば、我れを鄙吝なりと思ふ

べし、望みに任せて、取らせんに若かず』

と思ひ返し、右近に命じて、祕藏の駿馬荒浪を贈る。

政友、感激、措かず、常に、一死知己の誼に、報いんことを思ふ、今しも、忠直の老臣本多伊豆守富正の兵の過ぐるを、見るより、

『イデ〳〵、此手とこそ、一戰すべけれ、續けや者共』

と言ひさま、一鞭、馬を驅つて、驀地に、富正の陣に、突き入る、富正、

『素破や、勘兵衞ぞ、一人殘らず、討取れや』

と呼はり〳〵、士卒を叱咤して、嚴しく、攻め立つ。

政友、今日を最後の一戰と思へば、勇氣、日頃に、百倍し、

『葉武者には、目を懸けそ、大將を目がけて、組めや組め』

と呼はれば、部下、亦、勇を鼓して、曳々、進み戰ひ、擊てども、突けども、退かず。

政友、亦、馬を驅つて、突き進み〳〵、全身、十餘創を被りて、鮮血淋漓、泉の如く、白絲の鎧、忽ち、變じて、緋緘となる、意氣、轉た壯烈。

既にして、富正、又士卒を勵まして、來り擊つ、會〻幸村の戰死せしを聞くより、政友、

『扨ては、左衞門佐は、早や、討たれたるか、イデ〳〵、我れも、快よく、討死せん』

と思ひ定め、屹と、馬上に、突つ立ちつゝ、

『我れこそは、元は、武田家の門葉にして、駿州葛山の城主葛山播磨守綱氏の嫡子御宿監物入道友綱の養男同苗越前守政友なれ、近き頃までの朋輩なれば、武勇の程は、知りつらん、討ち取つて、功名せよ』

と名乘り掛け、槍を揮うて、突き立て、捲し立つ。

必死の鋭鋒、當るべからず、富正の兵、皆、右往左往に、逃げ走れば、富正、

『唯、射取れや者共』

と呼はり〳〵、弓銃手に命じて、矢を放ち、丸を發すること、雨の如し。

政友の部下、見る〳〵、算を亂して倒れ、政友、亦、銃丸の爲めに、横さまに、腰部を打ち貫かれて、馬より落つ。

政友の從士由良仙助、小泉主水、加藤治太夫、上田權兵衞、

足洗藤内、生田外記等、何れも、政友を掩うて、奮ひ戰ひ、皆、盡く、敵刄に斃る。

越前勢、此勢ひに恐れて、敢て、近づかず、野本右近、從兵六七騎と與に、馳せ來り、

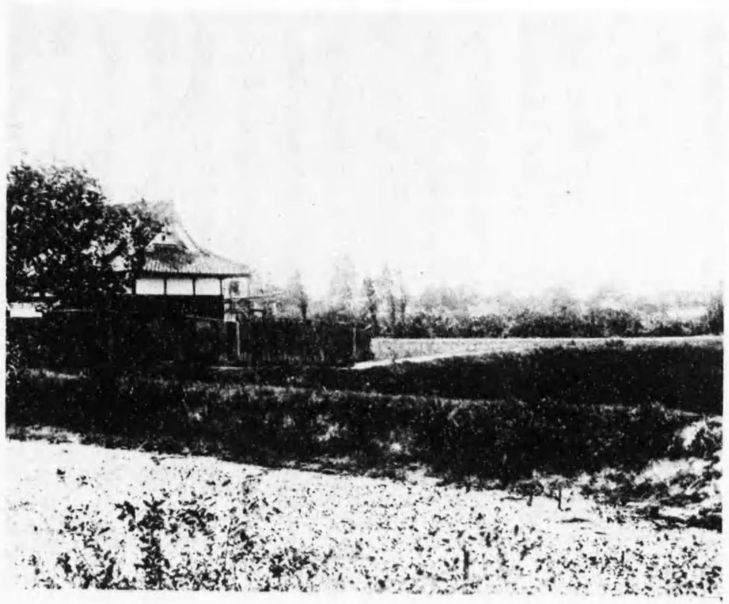
『珍らしや勘兵衞殿、敵味方に分れては、日頃、斷金の交り、效なし、殿の仰せ、是非に及ばず、御邊の首は、右近、申受け候ぞ』

と呼はれば、政友、

『左宣ふは、右近殿よな、今生の見參、祝著にこそ候へ、我れ、今や、深手を負うて、戰場の露と消えんとするところ、古朋輩の御邊に、首を渡さんは、某の本懷なり、越前、不肖と雖も、秀頼公に頼まれ奉つりて、一方の大將を承はる、大御所の見參に、入れ給はゞ、定めて、御感賞も候はん、舊好を思ひ出されなば、一遍の御回向に預かりたし、イザ、近寄つて、討ち給へ』

と言ひつゝ、首を伸ぶ、右近、泣く〳〵、首を落して、劍尖に、突き貫き、其儘、馳せて、富正の陣中に入る。

右近、尋で、其首を家康に獻ず、家康、篤と檢分して後、



安部野　其一
大阪市住吉區安部野町は元の安部野にして、水野勝成等の陣せし處此れは安部野より天王寺の南方小笠原秀政、本多忠朝等の奮鬪せし方面を望むもの

『最早、餘の首は、持つて參るな、穢きに』

と告げて、之れを止む、其親しく實檢せるもの、只、幸村の首と、政友の首とのみ。

本郷左近晴賢、幸村の指揮に從ひて、酒井左衞門尉家次の陣前に、馳せ向ひ、ドウと、銃を放つて突進す、家次、陣頭の赤旗を見るより、幸村なりと思ひ、

『素破や、眞田ぞ、願ふところの幸ひなり、討取つて、高名せよや』

と呼はり、鯨波を作つて、進み擊つ。

晴賢は驍勇の士、部下を勵まして、奮鬪すること數剋、士卒、殆ど、討たれて、餘すところ、僅かに四五十人。

『左らば、僞はり引きて、大御所の人數を、透かさん』

と思ひ、急に、殘兵を率して、瓜生野の南に、引き退く、家次、

『日頃の噂にも似ぬ左衞門佐の振舞かな、引き返して、勝負を決せよや』

と呼はり〳〵、勢ひ嚴しく、逐ひ迫る、晴賢、馬を丘上に立てつゝ、莞爾と、打ち笑み、

『我れを眞田左衞門佐と、見誤まれるこそ、笑止なれ、斯く申すは、本郷左近晴賢、思ふ仔細ありて、此所まで、退きしものぞ、我れと思はんものは、馳せ合はせて、組めや組め』

と呼はれば、家次、赫と怒りて、

『彼奴、生捕つて、なぶり殺しにせよ』

と言ひつゝ、嚴しく、攻め立つ。

越前少將忠直の家士山形伊賀守、味方に離れて、亂軍の中に在り、横合より、突き掛り、終に、晴賢を、突き伏せて、首を取る。

石川數矩、亦、敗れ死し、毛利勝永も、亦、兵を收めて、引き還り、天王寺口の城兵、盡く敗る。

八四　迂回軍の敗北

大阪の迂回軍明石掃部助守重、選兵三百騎を率ゐて、船場に出で、寺町筋より、勝萬院の下を過ぎ、茶臼山の南方より、安部野に達して、將さに家康の陣後を、擣かんと欲す、時に、未の刻、天王寺、岡山兩方面の戰鬪、今や、酣にし

て、喊聲、銃聲、天地を撼かすばかり、守重、

『敵の麾下は、何處に在るぞ』

と思ひつゝ、馬を立てゝ、屹と、前面を見遣れば、紺地に、立葵の旗を建てたる一隊あり、白地に、朱の旗を建てたる一隊あり、又其先には、永樂通寶の旗を建てたる一隊あり、守重、

『扨ては、大和口の諸將本多美濃、松平下總、水野日向等が手なるべし、大御所の麾下を、衝かんには、先づ、此前面の敵を破らでは、叶ふべからず』

と思ひ定め、部下に向ひて、

『我等、是れまで、大野道犬の下知を受けて、左せる合戰の手にも、合はず、心中、甚だ無念に存じつるに、計らずも、眞田左衞門佐の軍配に依りて、此一大事の大將を承はる、是れ、誠に、武士の本懷、生前の面目なり、人、誰かは、百年の命を保たん、右大臣殿の御爲めに、天晴、勇戰して、武名を、後代に殘せよかし、敵の旗章を見るに、東國勢の中にても、皆、名ある大名共ぞ、卑怯の振舞をなして、笑はれな』

と勵ませば、左なきだに、決死の面々、士氣、爲めに振ふこと幾層倍、守重

『左らば、押し寄せよ』

と言ひさま、子持筋の旗、銀の島臺に、兒の字の馬標を、陣頭に、押し立てつゝ、眞一文字に、本多忠政の陣に、押し寄す。

忠政、敵の小勢を見て、物の數ともせず、四方より、押つ取り込めて、討取らんとす。

守重は、元と、浮田秀家の驍將なり、兵を指揮すること、意の如く、鋒を揃へ、蹄を攢めて、縱横自在に、突き立て、斫り立て、士卒と、三度分れて、又三度合す。

守重の勇士今橋傳九郎、桑山權八、生田孫次郎、長船長右衞門等、各〻忠政を目掛けて、八方に、駈け廻はる、鋒先鋭利、當るべからず。

左しもの本多勢も、此勢ひに恐れて、忽ち、左右に披き靡く。

忠政の三男庸之助、時に、年十四、斯くと見るより、憤然として、馬より、飛び降り、槍を揮うて、敵の二騎を、突き落し、尙も、進んで、群がる敵中に、突き入る。

敵兵、四方より、突き來れば、庸之助、勢ひ急にして、槍を揮ふの遑もなく、太刀を拔きて、奮ひ鬪ふ、忠政、斯くと見るより、大音を張り上げて、

『庸之助を討たすな、あれ救へや』

と呼はり〳〵、士卒を叱咤して、又も、嚴しく、攻め立つ。

守重主從、意氣、益〻振ひ、擊てども、突けども、事ともせず、曳々、鯨波を作つて、馳せ進み、終に忠政の兵を、突破して過ぐ。

前面を見れば、水野勝成の一隊あり、守重、一聲、

『あれをも、突き崩せ』

と言ふより早く、馬を駢べて、サツとばかりに、馳せ進む。

水野勝成、それと見るより、士卒を勵まして、進み戰ふ。

士卒、敵の勢ひに恐れて、四散すれば、勝成、怒つて、馬より、飛び降り、

『卑怯武士等、何處に遁ぐるぞ、水野日向守、此れに在り、返せ〳〵』

と呼はりつゝ、麾を揮うて、奮ひ勵ます、廣田儀太夫、

『素破こそ、殿の御大事なれ』

と言ひさま、槍を取つて、眞先に、進み出づれば、杉野數馬、尾關佐次衞門、川村縫殿介、川村新八、及び浪士村瀨作左衞門等、我れも〳〵と、馳せ進み、勝成を隔てゝ、奮ひ鬪ふ。

守重、亦、士卒を勵ましつゝ、勢ひ鋭く、進み擊つ。

守重の勇士柳瀨又右衞門、荒木權之丞、鹽川信濃外一人、槍を揮うて、廣田儀太夫を、突き立て〳〵、終に、馬上より、突き落す、それと見たる勝成、憤然として、馬に跨がり、自ら槍を取つて、突き進む、柳瀨又右衞門、

『天晴、敵や』

と言ひも敢へず、槍を繰つて、突き出だせば、勝成、突と、乘り違へさま、只、一突きに、突き落すを、家臣岸文左衞門、馳せ寄りて、首を取る。

鹽川信濃外一人、左右より、突き來るを、勝成、大喝一聲、

『蠅蟲等、推參なり』

と叱咤しつゝ、右に、左に、突き捲くれば、二人、此勢ひに、辟易して、退き去る、今一人、

『荒木權之丞』

と名乗り掛けつゝ、横合より、槍を扱きて、勝成の脇腹を突く。

勝成、思はず、馬より落つれば、權之丞、透かさず、馳せ寄りて、首を取らんとす。

勝成の從士成瀬久太夫、突と、立ち塞がりて、引つ組み、互に、曳々、揉み合ひ、捻ぢ合ふ、勝成、其隙に、起き上がりて、權之丞を、突き刺し、聲、高らかに、船辨慶の一曲、

『あら珍しや、如何に義經、思ひも寄らぬ浦浪の』

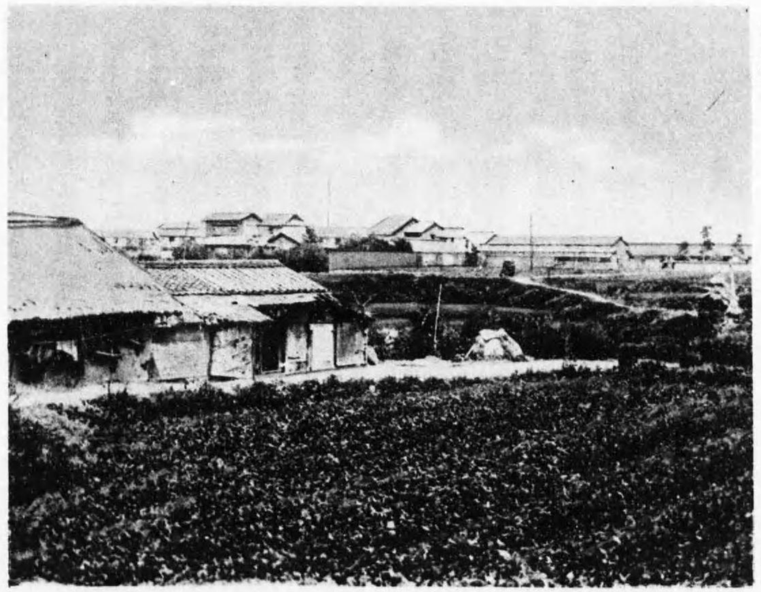
と謠ひつゝ、莞爾と笑ひて、鞍上に、飛び乘り、又も、士卒を叱して、進み戰ふ。

散兵、亦、集まり來り、四方より、守重の兵を、突き立つれば、守重、奮鬪力戰すれども、終に、敵せず、

『此上は　一先づ、城に馳せ歸りて、右大臣殿の御先途を、見屈け奉つらん』

と思ひ、殘兵を率ゐて、瓜生野の方に、引き退く。

勝成、兵を縱つて、追擊す、汀三右衛門、馬を驅つて、眞先に驀進し、守重を、突き落して、其首を取る。



安部野　其二
此れは安部野より天王寺方面を望むの光景なり卽ち明石守重等の奮鬪せしところ

汀三右衛門、明石守重を討ちたるより、功を誇りて、不遜の擧動多く、終に、放逐せらる、一說に守重は、此處を脫して、潛居すること三年、赦に遇ひて後、病死せりとも云ふ。

勝成、此日、住吉に陣す、功名の念止まず、越前兵の戰を開くに及びて、眞先に、兵を進め、圖らずも、守重と戰うて、之を破り、意氣、更に振ふこと、層幾層、

『此上は、眞先に、城に乘り入らん』

其儘、敗兵を逐うて、旗を進む。

八五　岡山口の合戰（一）

天王寺口の激戰に續いて、岡山口に於ても、亦、大戰あり、岡山口の先鋒前田筑前守利常、舍利寺村に在り、天王寺口の銃聲を聞くと、齊しく、

『素破や、合戰は、始まりたるぞ、進め〳〵』

と指揮すれば、其先頭の將本多安房守政重、寺西若狹、山崎閑齋、村井飛驒、篠原出羽、津田和泉等、鯨波を發して、ドッと、馳せ進む。

城將大野主馬首治房の先鋒長岡監物良平、北川次郎兵衛宣勝、山川帶刀賢信、樫野勘解由昌孝、三浦飛驒守義世等、斯くと見るより、亦、兵を督して、馳せ來り、近づく儘に、銃を發して、戰ひを挑む、既にして、大聲疾呼、

『何時まで、矢軍すべきや、槍を入れて、突き破れや』

と指揮すれば、待ち兼ねたる城兵、各〻槍を執つて、本多政重、寺西若狹の隊に、突き進む。

政重、若狹、亦、士卒を勵まして、進み戰ふ、伴八彌、安見右近、篠原織部、丹羽織部、中村左馬介等、眞先に奮進し、右近、先づ、敵首を取つて、

『安見右近、一番槍』

と名乘り掛くれば、八彌等、亦、劣らじと、競ひ掛かる。

城兵、亦、死を決して、奮進し、各〻槍を揃へて、捲くし立つれば、政重、若狹の兵、思はず、崩れ退くこと、一町あまり、城兵、

『素破や、軍に勝つたるぞ、進め〳〵』

と呼はり〳〵、諸兵、一齊に、勇み進む。

利常、切齒しつゝ、屹と、双鐙を踏ん張り、

『此一戰を仕損じては、末代までの恥辱なるぞ、總軍、備を崩して、打ち破れや、日頃の武勇を顯はすは、此時なるぞ』

と呼はれば、二陣、三陣以下、皆、猛然として、奮ひ立ち、曳々、鯨波を作つて、サッと、突き進む。

双方、各〻命を捨て、身を拋つて、進み戰ふ、梅鉢の旗と、鉈の旗と、或は合し、或は離れ、乍ち進み、乍ち退く、人馬の叫び、劍戟の響、天地に轟く。

書院番頭水野隼人正忠清は、白母衣組を率ゐ、青山伯耆守忠俊は黑母衣組を率ゐて、加賀勢と、藤堂、伊井兩勢との間に陣す、

『今日こそ、黑白兩組の剛憶を定めん』

と思ひつゝ、各〻部下を鼓舞して、勢ひ鋭く、競ひ進む。

加賀勢、これを見て、益〻勇み立ち、槍を揮うて、突貫すれば、城兵、忽ち、色めき渡り、死者、傷者、陸續として出づ、治房、

『東國勢を、誘き寄するは、此時なり』

と思ひ、急に、命を傳へて、兵を退く。

舍利寺
大阪市東區舍利寺町舍利寺は元と生野村に屬す本多康紀等此附近に陣す

利常の兵、勢に乘じて、追擊し、秀忠の前衞本多縫殿助康俊、遠藤但馬守慶隆、本多豐後守康紀、石川伊豆守貞政、蒔田權佐廣定、片桐主膳正貞隆、本多越中守忠利も、亦、兵を進めて、同じく追ひ擊つ。

秀忠の本營は、岡山の西方、七八町の丘上に在り、七本の白旗、金の飛龍の馬標を建て、千本槍を、前に聯ねて、鎭西八郎爲朝の矢の鏃の槍を、中央に樹つ。

先鋒の兵、前衞の備、敵の北ぐるを逐うて、續々、北進し、本營前方の兵備、今や、漸く薄し。

天王寺の東北に伏したる七隊長の面々、早くも、此光景を、見て取り、

『時機は、今ぞ、將軍家の麾下を、突き破れ』

と叫べば、飯尾勘十郎、七隊長の一人青木民部少輔一重の部下を督して、眞先に、馳せ出づ。

秀忠の前衞井伊掃部頭直孝、此時、先頭の兵を以て、毛利勝永の兵を破る、斯くと見るより、急に、兵を班し、銃を取つて、側面より、連べ擊つ。

勘十郎、亦、銃を發すること、一二次、忽ち、麾を揮りつつ、

『疾く、槍にせよ』

と呼はれば、部下、各〻槍を揮うて、一齊に、突き進む。

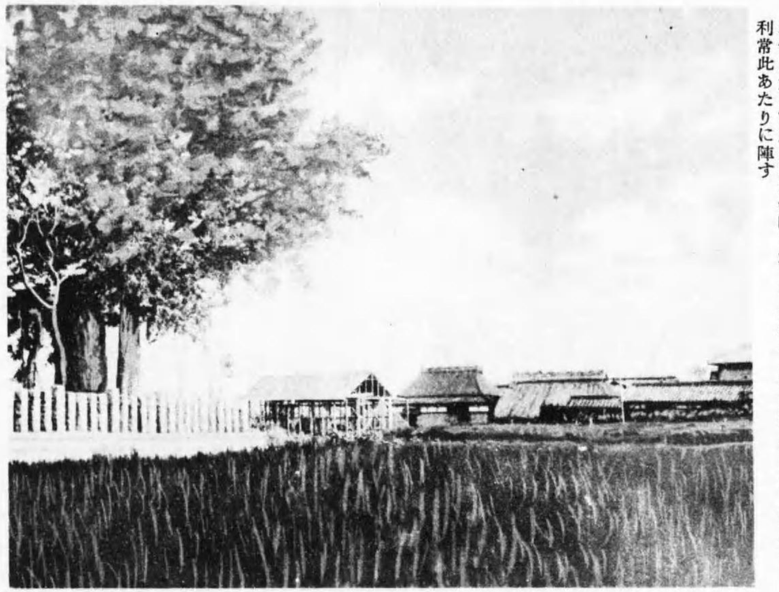
直孝、前日の戰に、創を被むれども、意氣、更に怯まず、自ら陣頭に進み出でて、士卒を、奮ひ勵ます。

左れども、勇士、多くは死して、餘兵、亦、皆、疲れ、諸跙逡巡して、敢て進まず、旗奉行孕石豐前、味方の色めくを見て、齒を切みつゝ廣瀨、左馬介に向ひて、

『扨ても胴勢の疲れて、色めくこそ、無念なれ、此赤旗は、敵に向つて、曾て一度も、後に退きたる例なきに、今此處にて、破れなば、弓矢の恥辱、此上やあるべき、我れは、今年七十五歳、重ねての合戰に逢ひて、今日の恥辱を、雪がんやうもあらず、貴殿は、年も若し、此場を、引き返して、又後日の御用に、立ち給へ、我れは、踏ん込んで、潔よく、討死すべし』

と言へば、左馬介、首を掉りつゝ、

『恥辱は、老若に由るべからず、今、若し、此處を引き退かば、孕石を捨て殺しにしたる卑怯武士など、人に、



林寺
林寺は大阪市東成區林寺町に在りて舍利寺の南に隣る岡山口の先鋒前田利常此あたりに陣す

後指をさゝれ候はん、此處は、我が死すべき所なり、イザ、諸共に、討死致し候はん』

と答へも敢へず、馬標を押し立てゝ、奮進すれば、豐前も、亦、赤旗を押し進めて、敵中に、突き入る。

城兵、前後左右より、突き立つれば、流石の二人も、終に、敵せず、左馬介は、稻葉伊織と戰うて、討たれ、豐前も、亦、亂槍の下に、刺されて斃る。

直孝、此有様を見て、大に怒り、自ら槍を把つて、奮進すれば、士卒、今は、猶豫すべからず、亦、皆、槍を揃へて、突き進む。

赤備の鋭鋒、流石に、衰へず、忽ち、勘十郎を、馬上より、突き落せば、其部下、驚き恐れて、散じ去る。

飯尾勘十郎の、直孝に迫ると與に、城將新宮左馬助行朝、布施傳右衞門の二人、亦、秀忠の麾下を、目掛けて、馳せ進む。

秀忠の前衞藤堂和泉守高虎、それと見るより、拒ぎ戰ふ。

高虎の兵も、亦、作日の戰に疲れて、士氣、甚だ振はず、渡邊勘兵衞了、部下の兵を、勵まして、拒ぎ戰へども、此

新鋭の敵に當ること叶はず、士卒、動もすれば、潰えんとす。

傳右衞門、機に乘じて、益〻突進し、遮ぎる敵を、擊ち攘ひて、直に、高虎の馬前に迫る。

高虎、年六十一、髮鑠たること、壯者の如し、忽ち、目を怒らして、

『汝如きに、太刀は過分ぞ』

と言ひさま、鞭を擧げて、ハッシとばかり、傳右衞門を、撲り落せば、玉置福井之介、透かさず、馳せ寄りて、首を掻く、城兵、今は、敵せず、忽ち、潰え走る。

直孝、高虎、各〻兵を進めて、敗兵を追ひ擊ち、秀忠の前面、兵備、益〻薄し、七隊長の面々、それと見るより、驀然として、急に、襲ひ來る。

堀田圖書助正高、部下三千人を率ゐて、眞先に在り、鯨波を作つて、土井大炊頭利勝の陣前に、押し寄す。

利勝、老中として、將軍秀忠の營に在り、其家臣寺田與左衞門、土井内藏介、長尾但馬等、代りて、兵を指揮す、斯くと見るより、盛んに、銃を發して、拒ぎ戰ふ。

正高は勇猛の士、士卒に先んじて、挺進し、無二無三に、突き入る、鋭鋒、當るべからず、利勝の兵、忽ちに、崩れ立つ。

利勝、遙かに、此體を見て、大に驚き、秀忠に請うて、馳せ還り、自ら陣頭に、躍り出でつゝ、

『大炊頭利勝、此れに在り、恥を知りたる者共は、引き返して、討死せよや』

と呼はれば、寺田與左衞門、眞先に、引き返し、槍を捻つて、群がる敵中に、突き入る。

土井大炊介以下の士卒、亦、皆、馳せ還りて、進み戰ふ。

鳥居土佐守成次、安藤彦四郎重能、成田左馬助氏範、牧野内匠頭信成、永井信濃守尙政、井上主計頭正就等、何れも、秀忠の命を以て、馳せ來り、各〻利勝の兵を援けて、進み擊つ。

正高、今日を、最後と思ひ定め、士卒を勵まし〳〵、死力を盡して、奮鬪すれば、東軍、力支へず、忽ち、揺と崩れ立つ。

大番頭阿部備中守正次、將軍秀忠の右に備ふ、斯くと見る

より、黒白段々の旗、黒餅の馬標を、押し立てゝ、驀地に、馳せ進み、

『扨ても、言ひ甲斐なき人々や、御旗本を捨てゝ、何れへ、遁れん心ぞ、多年の厚恩に、報ひ奉つるは、今日の一戰に在り、引き返して、働き候へ』

と呼はり〳〵、崩れ來る味方を、叩き立つれど、一旦、浮足立ちては、留むべからず、皆、右往左往に、散じ去る、正次、憤然として、

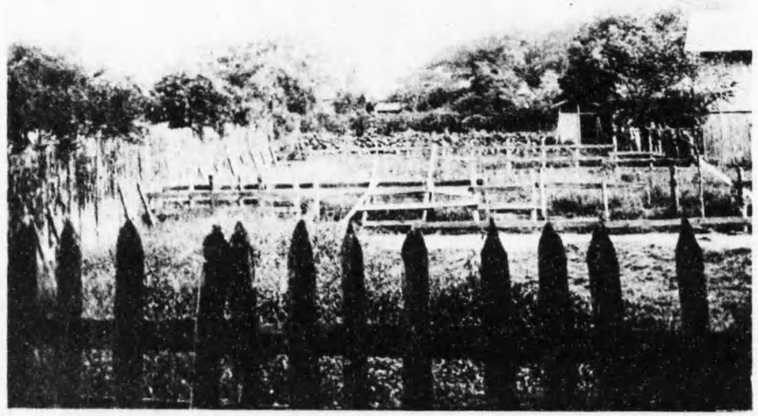
『好し〳〵、此上は、我が一手を以て、敵を突き崩さん』

と思ひ極め、頽れ掛かる味方の敗兵を、押し退け〳〵、十文字の槍を揮うて、眞一文字に突き入り、矢庭に、敵の三騎を突き落せば、老臣内藤角右衛門景次、馳せ來りて、

『天晴、御功名や』

と稱ふれども、正次、合はぬ敵と思へば、答をもなさず、其儘、槍を揮うて、益〻突き進む、景次、及び下宮理右衛門正直、粟飯原庄右衛門高好等、亦、其左右に從ひて、馳せ進む。

正次の嫡男、修理亮正澄、後陣に在り、自ら陣頭に進んで、



岡山
大阪市東成區岡ノ町に在り此れは南方より望めるものにして兩軍の奮鬪せるところ

戰はんとす、左れども、味方の敗兵、道を塞ぎて、進み得ず、正澄、焦らつて、傍の丘上に、馳せ登り、一鞭、馬を驅つて、一丈餘の斷崖を、躍り降る。

勢ひ急にして、撞と、轉び落つれば、正澄、イキナリ、鞍上に、飛び跨がり、サッと、敵中に、躍り入りて、眞先なる敵の一騎を、突き落すを、山本新兵衛、馳せ寄りて、其首を取る。

敵の從者、怒つて、新兵衛に、突き掛かれば、新兵衛、空を突かせて、只、一刀に、斬り倒す。

正高、大に怒り、益〻士卒を、叱咤して、突き來る、其勢ひ猛烈、當るべからず、正次、

『日頃の御恩に、報ゆるは、今日に在り、者共、只、死ねや〳〵』

と呼はりつゝ、奮進すれば、士卒、皆、殊死して、奮ひ戰ふ。

内藤景次、槍を揮うて、敵騎二人を、突き落す、下宮正直、亦、一敵を、突き倒すを、高橋權右衛門、馳せ來つて、一刀を、浴せ掛けつゝ、

『相討ちなり』

と呼はれば、正直、莞爾として、

『それに及ばず』

と言ひさま、又一敵を、突き伏せて、首を取る、粟飯原高好、亦、一敵を突き落し、勢ひに乘じて、益〻進み戰ふ。

七隊長の面々、亦、正高を助けて、來り戰ひ、四方より、押し包んで、正次を討たんとす。

正次の家臣伊藤佐次衛門、岡田伊右衛門、岩原孫兵衛、宇野惣右衛門、富加須治右衛門、梁又兵衛、石川治右衛門、高木治部右衛門、伊川太郎左衛門、神戸七兵衛、津田左近、齋藤勘兵衛、大場六左衛門、柴崎茂左衛門、鹽山茂右衛門、高橋權左衛門、井上八左衛門、輕部半左衛門、山本彦右衛門、矢島八右衛門、萩原五郎兵衛、伊部喜左衛門、朝倉勘右衛門、須田三郎右衛門、關六兵衛等、何れも、鋭を鼓して戰ひ、群がる敵を、逐ひ立て〳〵て、益〻進む、勇氣凛凛として、溢るゝばかり。

麾下の勇士屋代越中守勝永、久世三四郎廣宣、加加爪甚十郎忠澄、豐島刑部、間宮權左衛門、坂部作十郎等、正次父

岡山の展望 其一
此れは大阪市東成區岡ノ町の岡山より南方の平野の方面を望むもの

子の苦戦するを見るより、續々、馳せ來つて戰ひ、各〻槍を揮うて、敵を斃す。

作十郎は、三四郎の弟なり、其獲る所の敵首、兄に及ばざるを見て、

『斯くては、養家の名を汚がさん、不孝の罪、逭れがたし』

と言ひつゝ、又も、槍を取つて、進み戰ひ、終に、敵中に斃る、時に年十五。

今や、戰鬪、益〻烈し、高木主水正正弘、部下を率ゐて、進み來り、槍を揮うて、縱横に、奮ひ鬪ふ、其部下林藤四郎、大岡忠四郎、筒井甚之助、間宮庄五郎等、續々、斃るれども、事ともせず、曳々聲を發して進む。

堀田正高、勢ひ支へずして、引き退く、正次、正弘等、北ぐるを逐うて、進み擊つ。

白樫主馬、秀忠の前面、兵備薄きを見るより、七隊長の一人伊藤長次の兵を率ゐて、驀地に、突進す。

青山忠俊、水野忠清の二人、取つて返して、側面より、主馬を擊つ。

野一色頼母助義、忠俊の部下に在り、忠俊の、

『今日は、我れ、討死せずば、敵を破りがたからん』

と言ふを聞くより、

『仰せ道理に候、我が祖父頼母は、山中の城攻に、戰死し、父頼母は、株瀬川（くろせがは）にて、討死候ひぬ、我れも、今日、只今、第一番に、討死仕つり候べし』

と言ふより早く、槍を提さげて、驀地に、敵陣を衝き、矢庭に、四騎を突き落し、二騎を傷つけ、他の一騎と、格鬪して、偶刺す。

忠俊の小姓島田惣五郎、續いて、馳せ進み、忽ち、兜首を取つて、馳せ歸る。

伊豫田四郎左衛門も、敵首二級を取つて、提さげ來る、松平助十郎、松倉藏人、佐野助左衛門、鈴木兵左衛門以下、亦、各〻進み戰ふ。

黑母衣組の奮鬪、此の如くなれば、白母衣組も、亦、負けず、劣らず、奮ひ戰ふ。

既にして、松平助十郎、松倉藏人、伊豫田四郎左衛門、鈴木兵左衛門、別所主水、服部三右衛門等、相次ぎて、戰死すれども、怯まず、益〻進み擊つて、主馬を斃し、勢ひに乘じて、嚴しく、追ひ擊つ。

野々村雅春、兵一千二百人を、魚鱗に備へて、突進し來る。

松平越中守定綱、部下の兵を勵まして、迎へ戰ふ。

雅春、年六十三、意氣、尙、壯者に劣らず、部下に向ひて、

『如何に面　、能く承はれ、忠義の至極、一死に在ること、武士の道て、故太閤以來の御恩に、報い奉つるは、今日に在り、只、進んで、死ねや死ね』

と勵まし〳〵、自ら眞先に立ちて、馳せ進む。

定綱、亦、馬を驅つて、敵中に、突き入り、鞍上に、格鬪して、敵を馘すること二級、身に、六創を受くれども、事ともせず、尙、部下を叱して、奮ひ戰ふ。

鳥居土佐守成次、敗兵を集めて、側面より、攻擊すれば、定綱、此れに、力を得て、益〻猛擊し、終に、雅春の兵を破る。

眞野頼包、一千人を率ゐて、突進し來る、青山忠俊、水野忠清の二人、白樫主馬の殘兵を、逐ひ捨てゝ、又返り戰ふ。

中島氏種も、亦、二千人の兵を督して、猪突し來る。

岡山の展望　其二
此れは岡山より西方の天王寺、茶臼山の方面を望むの光景

井上主計頭正就、酒井雅樂頭忠世の子阿波守忠行、細川玄番頭興元等、各〻防ぎ戰ふ。

速水守久、亦、兵三千を率して、馳せ來り、藤田能登守信吉、土方掃部頭雄重の兵を、擊破して、益〻進む。

阿部正次、其子正澄、堀田正高の兵を驅逐し、取つて返して、左方より、突擊す。

血戰、鏖戰、一時に、諸所に起つて、砂烟濛々、天を掩ふ、兩軍、互に、入り亂れて、彼我を辨ぜず、正次、

『味方は、長途の旅路を經て、顏は黑く、鎧は汚がるれども、敵は、永の籠城にて、色も白く、鎧も鮮やかなるぞ、それを目當に、討ち取れや』

と呼はれば、部下の士卒、勇んで、進み戰ひ、色の白きものを見れば、容赦もなく、突き立て、斫り立て、首を取ること、五十八級。

藤堂高虎、井伊直孝等、秀忠の麾下急なるを見て、各〻取つて返して戰ひ、松平定綱も、亦、返し戰ふ。

今や、戰鬪、猛烈、其頂點に達す、轟々たる喚聲、風雨の如し。

八六　岡山口の合戰（二）

此時、將軍秀忠の營中、兵備、最も薄し、木村主計頭宗明、素肌の逞兵三十餘人を率ゐて、突然、加賀兵の陣後より、馳せ來り、營中を目掛けて、突入せんとす。

麾下の士野田右京、山田彌三郎の二人、驚き慌てゝ、秀忠の馬前に、遁げ來り、馬を乘り掛けて、兵粮籠を、倒せば、侍臣、亦、皆、駭き散じて、其騷擾、言ふべからず、宗明、此機に乘じて、益〻突進す。

稻垣平右衞門重綱、家人を勵まして、拒ぎ戰ひ、堀伊賀守利重、蔭山彌次右衞門、堀半兵衞以下十餘騎、亦、馳せ來つて、側面より、猛擊し、見る〳〵、八九人を斃す。

宗明、三尺四寸の太刀を、振り被り、隙を見て、營中に躍り入らんとす。

安藤治右衞門正次、加賀の陣に使して、馳せ還り、サッと、太刀を拔きさま、馬より、躍り下つて戰ひ、宗明の前額に、斬り付くること三刀、宗明、亦、同時に、正次の眉間を斬つて、俱に、尻居に倒る。

正次、痛手に屈せず、宗明に、乘り掛かりて、首を取る。

城兵二人、斬つて掛かるを、正次の家人平山吉右衞門、馳せ來つて、逐ひ拂ひ、宗明の首を取つて、秀忠の馬前に、馳せ赴き、

『安藤治右衞門、高名候』

と呼はれば、秀忠、深く正次の功を賞し、徒士六人を附して、平野の陣に、送り還す。

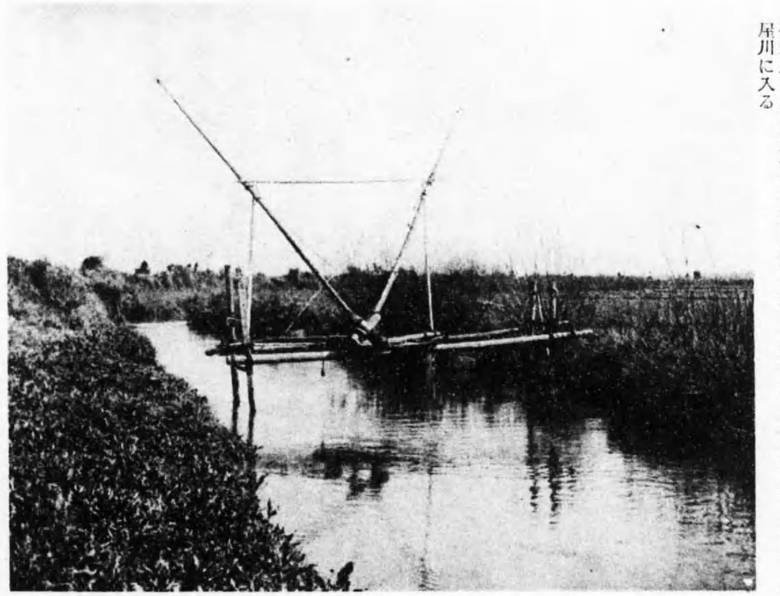
此時、速水守久、遮ぎる敵を、突き拔けて、益〻進み、中島氏種も、亦、井上正就、細川興元等の兵を逐ひ立てゝ、進み來れば、秀忠の麾下、復た再び亂る。

秀忠、怒つて、自ら進み戰はんとす、大平角助、イキナリ、馬の口に、取り縋り、

『這は勿體なき御事かな、君の御馬を進め給ふ時には候はず、暫く御控へ遊ばされ候へ』

と諫むれば、秀忠、忽ち、赫と怒りて、

『面倒なり、そこ放せ、我れ死したりとて諸弟多し、天下の相續に事缺くべからず、放せ〳〵、我れ駈け入つて、逐ひ拂はんに』



平野川　其一
平野川は大阪市東成區平野郷町の方より流れ來り岡山の東方を掠めて淀屋川に入る

と言ひつゝ、鞭を擧げて、ハッシと、擊つ。
角助、尙、放さず。
秀忠、又、足を擧げて、ハタと、蹴る。
角助、尙も、放さず。
本多佐渡守正信、馳せ來りて、此體を見るより、
『大平、能くこそ、仕たれ』
と稱讃し、秀忠に向ひて、
『これ程の、御勝利に候ものを、御自身に、手を下させ給ふことや候』
と諫め止め、更に、孫の出羽守正勝を顧みて、
『大隅守は、腰拔けなり、汝疾く〳〵、敵に懸け合はせや』
と命ずれば、正勝、馬を驅つて、馳せ出づ。
安藤對馬守重信、後拒たり、又士卒を、促がして、馳せ來り、
『懸かれ〳〵』
と呼はりつゝ、進み戰ふ。
旗奉行三枝土佐守昌吉、旗を敵前に進め、沼澤を、前に當

て、控ふ。
加藤左馬介嘉明、黑田筑前守長政の二人、各〻兵を、率ゐ來つて、秀忠を護る。
時に天王寺口の城兵、未だ敗れず、岡山口の戰鬪、亦、酣なり、金瓢の馬標、一たび、戰線に現はれんには、城兵の士氣、俄然として、百倍せん。
勝敗の、岐かるゝところ、此一擧に在り、城兵、皆、鶴首して、旌旆の出づるを待つ。
當時秀忠の營中騷擾し、諸將の勇怯剛臆自ら分れて、人々の笑草となるもの多く、「懸かれ對馬、遁げ大炊、どうとも付かづの雅樂頭」の如きも其一なり、對馬とは安藤重信、大炊とは土井利勝、雅樂頭とは酒井忠世なり、秀忠、後、此時の怯者を投票せしめしを見ても、如何に其狼狽の甚だしかりしを察するに足らん。

八七　城兵の總敗軍

家康、機を見ること敏なり、大野壹岐守氏治を召して、何事をか、命ずるところあり、又、軍使を、四方に發して、益〻諸軍を勵ます。
秀忠の先鋒、前田筑前守利常、既に、大野主馬首治房の先鋒、山川帶刀賢信、北川次郎兵衞宣勝等の兵を破り、勢ひに乘じて、益〻北進し、直に、治房の陣に迫る。
治房の左翼二宮與右衞門長範、岡部大學則綱、岡田縫殿助政繁、中瀨掃部助宗純等、進んで、利常の右側を擊つ。
本多縫殿助康俊、本多豐後守康紀、石川伊豆守貞政、蒔田權佐廣定、兵桐主膳正貞隆、遠藤但馬守慶隆、本多越中守忠俊等、邀へ擊つて、之れを破る。
利常、亦、奮鬪して、治房の兵を破り、北ぐるを逐うて、稻荷明神の祠前に到る。
治房、忽ち、大返しに、返し戰ふ、利常、又擊つて、之れを破る。
治房、今は、敵せず、敗兵を收めて、玉造口より、城中に、引き還る。
速水守久、堀田正高、中島氏種、野々村雅春、眞野頼包等、復た事の濟すべからざるを見て、亦、皆、兵を還す。
細川越中守忠興、寡兵を以て、毘沙門池の附近に在り、斯くと見るより、

平野川　其二
此れは岡山の裏手を流るゝ平野川の光景なり

『あれ逐ひ撃てや』
と呼はり〳〵、士卒を縱つて、追撃し、左右を顧みつゝ、
『無勢なれば、法度を免すぞ、小性共、懸かれ〳〵』
と指揮すれば、小性清田七助、先づ、突進し、續いて、村山縫殿、藪新太郎の二騎、亦、各〻馳せ進む。
田徑、狹小にして、騎馬、駢び進みがたし、新太郎、左方の田間より、馳せ進んで、眞先に、西堤に、驅け上り、馬より、飛び下りさま、
『細川越中守内藪新太郎』
と名乘り掛くれば、敵の一人、
『内匠が子か』
と問ひ掛く、新太郎、
『如何にも』
と言ひさま、槍を揮うて、突き立て〳〵、難なく、突き伏せて、首を取る。
七助、縫殿の二人、亦、徑上を、馳せ來りて、敵を斃すこと二三人。
佐藤將監、都筑庄介、鳴海丹後等、亦、馳せ來りて、敵を

八町目口の木柵まで、逐ひ詰む。
今や、天王寺口の城兵も敗れ、岡山口の城兵も、亦、敗れ、東軍、捷ちに乘じて、益〻逐ひ撃つ、時、正に申の刻。
是より先き、秀頼、一たび出でて、櫻門に在り、女使の來るに及び、本丸に歸り來りて、講和の可否を議すること數刻。
會〻銃聲、喊聲、盛んに、城外に起るを聞きて、戰端の既に開くるを察し、
『又しても、家康の詐術なりしか、今は、是れまでなり』
と思ひ極め、復た本丸を出でて、櫻門に到り、胡牀に、腰を落して、戰報を待つ。
眞田大助幸昌、父の嚴命に依りて、馳せ還り、秀頼の前に出でて、跪づき、
『諸方の合戰、既に、始まりて候、疾く〳〵、御出馬あらせ給へ、味方、御旗影を望み候はゞ、軍氣、日頃に、十倍仕つり候はん、敵兵、多しと雖も、恐るゝに足らず、若し、遲疑し給はゞ、大事、去り候べし、此儀、能く能く、言上せよと、父の申付けて候』

平野川の石橋
此れは岡山の裏手を流るゝ平野川の石橋にして其れを見越して玉造方面を望む光景なり

と述ぶ、秀頼、未だ兎角の言を發せず、近侍の面々、或は是とし、或は非として、事、遽かに決せず。

秀頼の先鋒大野修理亮治長、出でて、天王寺の北方に在り、其弟壹岐守氏治の使者、馳せ來りて、一通の密書を呈す、治長、

『壹岐奴、何事を申し來れるやらん』

と思ひつゝ、急ぎ、封、押切つて、披き見れば、

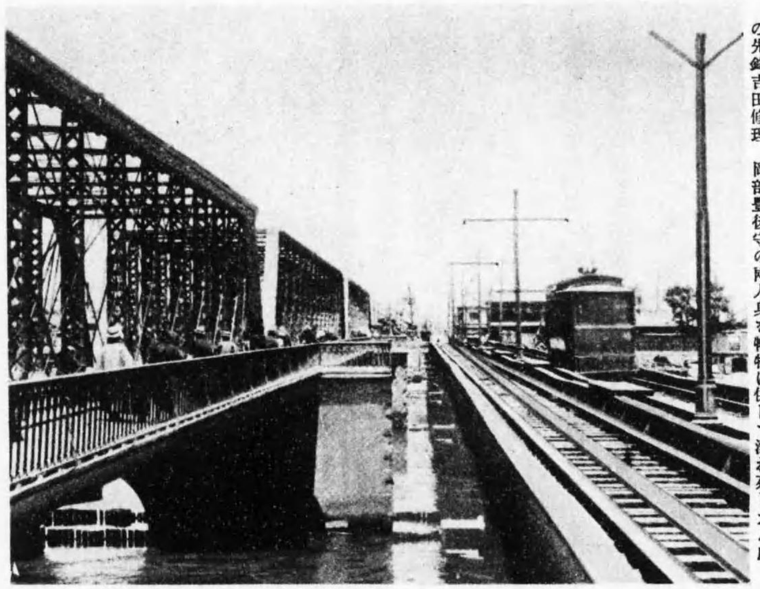
『右大臣殿の御出馬を待ちて、城中に、火を掛け、七隊長の面々、復た裏切仕つるべき約束の候由、確かに、承はり及び候、右大臣殿、御出馬の儀、吳れ〳〵も、御無用に候』

と認めあり、治長、讀み了りて、一語をも發せず、イキナリ、刀を拔きて、使者を、斬つて捨てつゝ、

『此事、一定、大御所の詐略ならん、左れども、城中の一大事、一應、君に言上仕つらんこそ、好けれ』

と思ひ、又も、馬を驅つて、城中に、馳せ歸り、氏治の書を取つて、

『君、これ御覽あらせ給ふべし』



天滿橋
天滿橋は大阪市東區谷町より北區天滿に通ずる淀川の架橋なり松平忠直の先鋒吉田修理、岡部豐後守の兩人身を犧牲に供して溺れ死したる處

と言ひつゝ、秀頼の前に捧ぐる途端、舊創、俄に破れて、鮮血、迸り出で、其儘、ウンと、打ち倒る、人々、

『扨ては、軍に敗れて、手を負ひしと覺えたり』

と思ひて、色を失ひ、益〻秀頼の出馬を、押し止む。

既にして、天王寺口の城兵、敗れ還り、岡山口の城兵、亦、敗れ還れば、秀頼、憤然として、大に怒り、親から旗を進めて、一戰せんとす、守久、

『味方の諸軍、盡く、打ち負けて、寄手の大勢、競ひ懸かり候、今となりて、御出馬あらせ給ふことも、詮なし、一旦、本丸に、引揚げて、最後の御一戰を遂げさせ給ひ、御心、靜かに、御生害あらせ給はんこそ、然るべう候へ』

と諫むれば、秀頼、これに從ひ、

『然らば、供せよ』

と命じ、直に、馬を回して、千疊閣に入る。

八八　東軍の進擊

東軍の諸將、各〻勝ちに乘じて、直ちに、城に薄る。

越前少將忠直、初めより、城中に、先登せんことを期す。

眞田幸村、御宿政友を殪してより、意氣、益〻振ひ、北ぐるを逐うて、生玉口より、三の丸に、突入し、尙も、長驅して、大川の南岸に達す。

京橋門は、其東に在り、忠直、乃ち兵を東に轉じて進む。

忠直の先鋒吉田修理、岡部豐後守の二人、軍令違犯の責を負うて、主家の安全を、計らんと欲す、今や、味方の先登せんとするを見て、相顧みて、莞爾として、打ち笑む、

『今は、我等なしと、仔細あらじ、イデヤ、殿の御爲め、御家の御爲めに、一命を捨て候はん』

と言ひつゝ、天滿橋の燒跡を、眞一文字に、馳せ進み、其儘、水中に陷りて歿す。

忠直、益〻士卒を勵まして、突進し、矢庭に、京橋門を奪うて、二の丸に、侵入し、大野治長の邸に、火を放ちて、ドッと、鯨波を作る、これぞ、先登第一なりける。

家康、後、忠直の老臣本多伊豆守富正、本多飛驒成重の二人を召して、軍令違犯の理由を詰る、富正、謹んで、平伏しつゝ、

『其は、餘の儀にも候はず、上樣にも、御存知の吉田修理、岡部豐後の兩人、何故かは存ぜず、手勢を率ゐて、眞先に、

馳せ出でて候へば、兩人を、見殺しにも、仕つりがたく、總軍、我れも〳〵と、押し出したる次第、何とも以て、恐れ入り奉つる』

と答ふ、家康、

『シテ、兩人は、如何せしぞ』

と詰るを、富正、

『兩人儀は、嚴しく、敵を逐ひ詰め、天滿橋の燒跡へ、乘り掛けて、水中に陷り、其儘、溺死を遂げ候へば、其仔細を、紀明仕つらんやうも候はず』

と答ふれば、家康、頷づきつゝ、

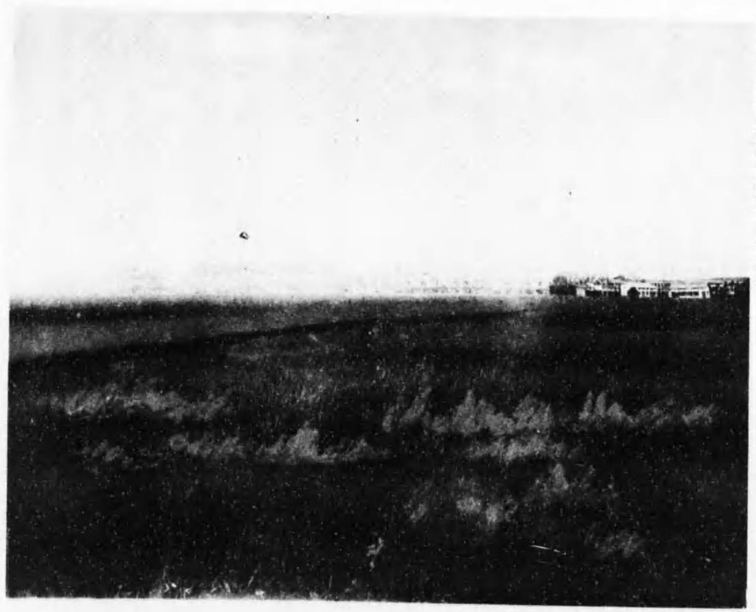
『左もあらん〳〵』

と告げて、復た其罪を問はず、越前家の無事なりしもの、實に、此兩人の力なり。

水野勝成、亦、明石守重の敗兵を、逐ひ擊ち〳〵、大手門より、闖入して、櫻門に、馳せ赴き、敵を門内に、逐ひ込むれば、旗奉行神谷久右衞門、進んで、旗を城門に樹つ、これを先登第二とす。

前田利常以下の諸將、又玉造口に、突入して、直に玉造門に迫る。

城兵北村五助、彈藥函に、火を點じて、之れを門外に投ず



篠山の東方
此れは大阪市東區小橋東町篠山の東方にして大阪城の南に位し大野治房及び岡部則綱等の陣せしところ

れば、忽ち、爆然として、破裂し、其響、萬雷の轟くが如し。

東軍、大に驚きて、引き退き、更に、算用曲輪より、二の丸に、押し入る。

秀頼の本丸に、引き退きてより、復た一人の、二の丸を守るものなく、敗兵の、後れて還るもの、或は、橋上に於て、自殺するあり、或は、東兵の爲めに、斬獲せらるゝあり、逃ぐるもの、降るもの、地に倒るゝもの、數を知らず。

東軍の、二の丸に、進み來るもの、時々刻々に、加はり來りて、人馬、雲の如く、旌旗、霞に似たり。

左れども、郡主馬首良列、津川左近允親行等、固く、諸門を守りて、屈せず、東軍、未だ垣を踰え、門を破りて、本丸に、闖入せるもの、一人もあらず。

斯かる折柄、本丸の方より、突如として、黑烟、渦卷き騰る、是れぞ、厨人大隅與右衞門の、欵を東軍に通じて、火を大臺所に放てるもの。

地勢は高く、風威は猛し、火勢、見る〳〵、燃え擴がりて、宏壯なる千疊閣も、早や、黑烟猛火の中に、包まれ、爆發の音、叫喚の聲、相和して、天地も滅びんばかり。

東軍、此光景を觀望して、敢て、城に迫らず。

八九　搦手の東軍

京極若狹守忠高、京極丹後守高知、石川主殿頭忠總の三將、城の搦手京極口に向ふべしとの命を受く、時に、五月六日申の刻を過ぐ、忠總の大叔父大久保權右衞門忠爲等、

『頓て、日も暮れ候はん、明日を以て、出發せられ候へ』

と說けども、忠總、首を掉つて、肯んぜず、

『イヤ〳〵、今晩中に、橋本に著せずんば、明日の合戰の手に逢ふまじ、是れより、直に、出發せんに若かず』

と答へて、進軍を命ず。

忠高、第一陣たり、高知、第二陣たり、忠總は、第三陣として、最後に在り。

諸軍、次を逐うて、河内の枚岡を發し、夜に入りて、橋本に達す。

此處は、船ならでは、渡るべからず、忠總、代官北見五郎左衞門に託して、小舟二十隻を集め、直に、彼岸に向はん

とす、忠爲等、又

『今夜は、此處に留まりて、明日早朝より、越え候はん』

と說けども、忠總、又肯んぜず。

『人數、多くして、船、少なければ、急速には、越えがたからん、只今より、夜通し掛けて、滅すべし』

と命じ、使者を、先陣に、遣はして、

『早々、御渡しあるべし』

と促がせども、忠高、高知の二人、

『我等は、切處の前に、陣取るべしとの仰せを受けてこそ候へ、此處を越さんこと、叶ひがたし』

と答へて、從はず、忠總、再び使者を遣はし、

『今宵、此處を越さずば、明日の合戰の手に、逢ひがたし、若し、強て、御渡しなくば、忠總、先づ、越え候べし』

と通ずれば、二人、

『貴殿、切處を、越え給はんに、我等、此處に、留まらんも、如何なり、後日、御咎めあらば、貴殿の御指圖なりと、申し開き候はん、此儀、苦しからずば、渡し候べし』

と答ふ、忠總、三たび、使者を遣はして、

『如何にも、其儀は、忠總、一切引受け候べし、御心置きなく、御渡しあるべし』

と申送れば、忠高、高知の二人、初めて、切處を越ゆ、五郎左衞門、其場に在り、

『今宵、此處を越え給はんこと、道理至極に候』

と讃すれば、忠總、

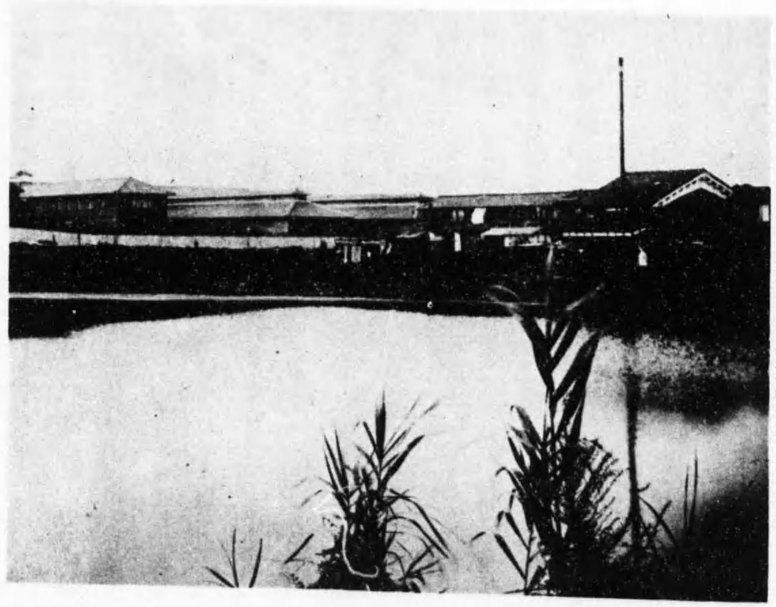
『自儘に、此處を越し候はんも、一戰して、討死を遂ぐれば、後日、御咎めもあるまじく、又一戰に、敵を逐ひ崩さば、尙、以て御咎めのあらん筈なし、孰れにせよ、是れほど、心安き請けに、立つことはあるまじ』

と言ひつゝ、大笑し、其儘、此處を越ゆ。

忠高、高知の二人は、街道より、兵を進め、忠總は、

『敵、若し、京極勢を切り崩さば、我れは、横合より、擊ち掛からん、勝利を得んこと、疑ひなし』

と思ひ、態と、左方の田圃中より、兵を進め、行く〳〵、候騎を放つて、敵情を窺ふ、須臾ありて、一騎、馳せ還り、



篠山の西南
此れは篠山の西南にして北川宣勝、山川賢信等の陣せしところ

『敵の大軍、一里程先きに、押し出し候』

との旨を報ず、會〻城南の方に當りて、遙かに、銃聲、喊聲の起るを聞くより、忠總、今は、遲疑せず、田となく、畑となく、馳せに、馳せて、進めば、野江の堤上に、敵兵三千餘人あり、これぞ、仙石豐前入道宗也、津田主水、今津圖書、竹光伊豆守、大場土佐守、淺香長門守、家所帶刀、生田茂庵等の率ゐるもの。

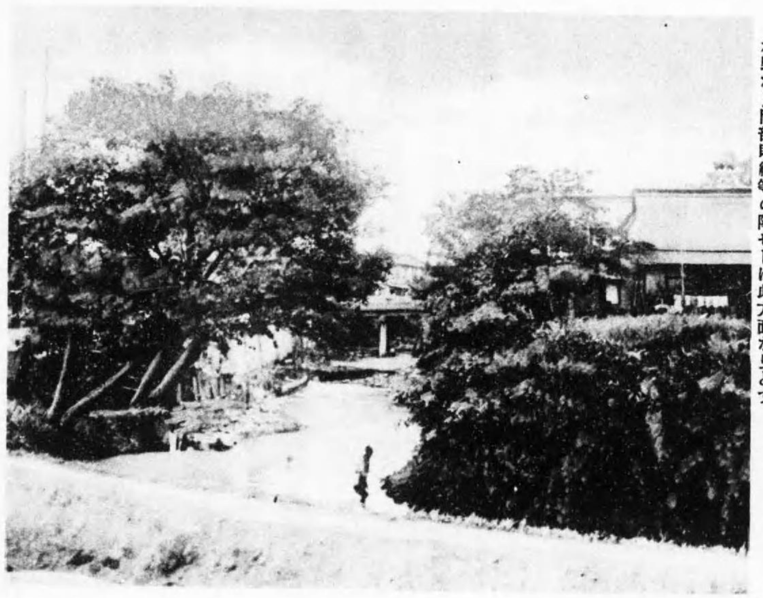
忠總、不圖、城中より、黑煙の騰るを、望み見て、益〻勇み立ち、

『素破や、落城せしぞ、進め〳〵』

と呼はりつゝ、驀地に、敵陣に、突擊すれば、城兵、敢て、拒ぎ戰はず、先きを爭うて、潰え走る。

忠總、兵を縱つて、追ひ擊ち〳〵、敵首を獲ること、二百七十三級、其他、切り捨てしもの、數を知らず。

忠高、高知の二軍に、先だちて、片町に入り、亦、兵を勒めて、城に迫らず。



木野の北方
此れは大阪市東區木野町の北方にして中央は平野川、右は猪飼野、左は木野なり岡部則綱等の陣せしは此方面なりとす

九〇　大阪の落城（一）

郡主馬首良列、櫻門に在りて、敵を防ぐ、本丸の火煙を、望み見るより、部下に向ひて、

『素破や、御館に、火の掛かりたるぞ、汝等、此れにて、防矢射よ』

と命じ置き、金瓢の馬標を取つて、急き、千疊閣に、馳せ還り、秀頼の前に、平伏しつゝ、

『今は、早や、是れまでと思召され候へ、愚昧の某、故太閤殿下の御厚恩を蒙むり、剩さへ、御馬標を預かり、黄母衣をも、許され候こと、冥加、身に餘りて覺え候、今こそ、先君の尊靈に、返し奉つり候べけれ』

と言ひつゝ、馬標と、黄母衣とを取つて、床の上に置き、

『これにて、思ひ殘すことあらず、此上は、皺腹、掻き切つて、累年の御厚恩に、報い奉つらん、但し、御面前にては、恐れ多し』

と獨語ちつゝ、白洲に、飛び下り、家人黑木平左衞門を召して短刀を示し、

『これは、黑田筑前守長政より、我れに贈れるもの、我れ死せば、筑前に返すべし、介錯頼む』

と言ひさま、肌、押し脱ぎて、腹に、突き立つれば、平左衞門、其首を打ち落して、袋に納め、其儘、忍びて、城外に、遁がれ出づ。

堀田圖書助正高、野々村伊豫守雅春は、櫻門の西方、石壁の中段に於て、自盡し、中島式部少輔氏種、眞野豊後守頼包等も、亦、其處此處にて、自殺す。

渡邊内藏助糺、今日の戰鬪に、重傷を負ひ、二子を携へて、千疊閣に、馳せ來れば、其母正榮尼、見て、

『急ぎ、腹を切るべきか』

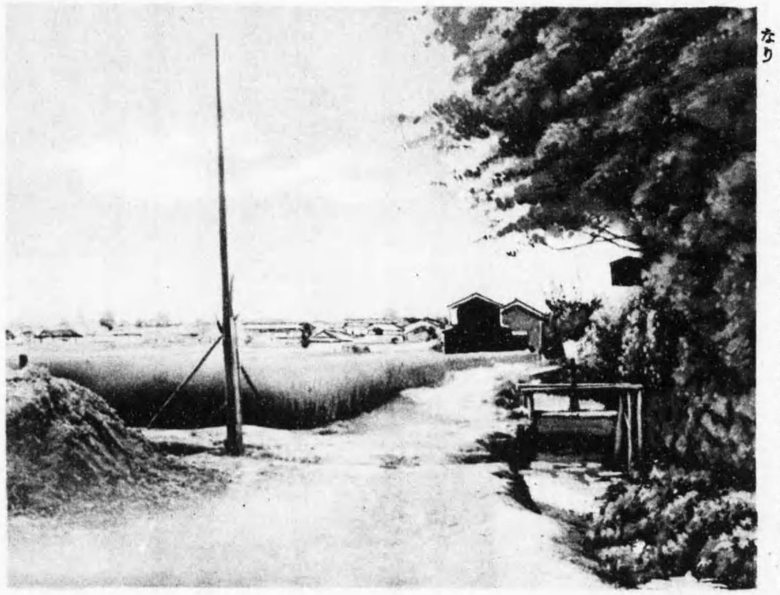
と問へば、糺、

『御身の先途を、見奉つらん爲めに、暫し、延引候べし』

と答ふ、正榮尼、

『イヤ〳〵、我身は、女なれば、如何やうにても、苦しからず、汝は、日頃、御厚恩を蒙むるもの、若し、仕損じなば、後代までの恥辱ぞ、早々、自害仕つれ、』

と勸むれば、糺、



木野の西南
此れは木野町より西南桃谷、天王寺の方を望む光景にして亦當時の戰跡なり

『然らば、御先へ御免』

と言ひも敢へず、刀を抜きて、自盡し、正榮尼も、亦、續いて、自殺し、一族渡邊半左衞門、母子の介錯を行ふ。

兎角する間に、猛火、早や、千疊閣を、燒き立つれば、今は、此處にも、居るべからず、秀頼、其母淀君と與に、天主閣に登りて、自盡せんとす、速水守久、

『君、御逃らせ給ふべからず、大敗の後、不意の援軍、來つて、開運したる先例も候、姑らく、時機を、見合はせ給へ』

と諫むれば、秀頼、悵然として、

『亡父太閤の築かれたる金城鐵壁、今や、兵火の爲めに、燒け失せんとす、復た何を頼みてか、生き存へん、左れども、故老の申すところ、強て拒むべきにあらず』

と告げ、天主閣を降りて、月見櫓に移る、尋で、此處にも、火の移れば、更に、山里丸の帶曲輪に避けて、糒倉の中に入る。

城兵、京橋口の圍み弛めるを見て、先きを爭うて、潰え散じ、後に留まるもの、僅かに、親臣二十餘人、侍女八九人に過ぎず。

眞田大助幸昌、亦、從うて、此處に來り、糒倉の入口に坐す。

山里丸は、本丸の北に在りて、火粉も、來らず、烟氣も、亦、來らず、左れども、火光、天を焦がし、風勢、地を捲きて、慘澹の色、凄愴の氣、乾坤を鎖す。

九一　大阪の落城（二）

秀頼母子の運命、如何に、成り行くやらん、侍臣も、侍女も、皆、其前途を危みて、更に、安き心もあらず。

淀君は、千姫を留めて、人質となさんと欲するの心あり、天主閣に在るの時も、月見櫓に在るの時も、千姫を、其側に、引き付け、振袖の端を、聢かと、我が膝下に敷きて、自由に、動かさず。

糒倉は、三間に、五間にして、屏風を以て、其中を、三室に劃し、中央の室には、侍女を置き、其左右の室を以て、秀頼と、淀君との座所と定む。

大野修理亮治長は、千姫を以て、秀頼母子の助命を、請はんと欲し、密に、姫の侍女刑部卿局に向ひて、

『斯くなりては、御簾中の御力を、頼み奉つるの外はあらず、如何にもして、城中より、落し參らせ、秀頼公、并に御母公御助命の儀を、兩御所へ、聞え上げさせ給はんやう、御計らひ候へ』

と言ひ含む、左れども、淀君、例の如く、嚴しく、千姫を見守り居れば、兎角に、機を得ず、刑部卿局は、心利きたる婦人なり、突然、

『あれ〳〵上様が』

と叫び立つれば、淀君、

『素破や、生害ぞ』

と思ひ、我れを忘れて、秀頼の室に、馳せ行けば、刑部卿局、其隙に、千姫の手を携へて、倉外に、走り出づ。

倉前には、城兵の逃げ後くれて、慌て騒ぐもの、尚、多し、刑部卿局、馳せて、倉後に到り、此處より、城外に遁がれ出でんとす、偶〻一士の、通り掛かるを、見るより、

『これに在しますは、秀頼公の御簾中なり、關東へ御願ひの筋ありて、立ち越え給ふところぞ、御介抱申して、御供せよ、然るにても、此儀、汝の力に叶はんや、名は、何と申す』

と問へば、其武士、

『某は、紀州の住人新宮左馬助の弟堀内主水と申すもの、茶臼山まで、必ず、御供仕つり候はん、これへ召され候へ』

と答へつゝ脊を受けて、千姫を負ふ、折柄、南部左門も、亦、來合せ、刑部卿局を負うて、俱に、走り退き、塀を越え、石垣を傳うて、東の壕端に出づ。

石州津和野城主阪崎出羽守成正、此處に在り、其尋常の落人にあらざるを見て、

『御止まり候へ、如何なる御方にて候ぞ』

と遮り止む、主水、

『これは秀頼公の御簾中に在はし候、正しく、關東の姫君にて候へば、此れまで、救ひ出だし奉つりて候、將軍家の御本營へ、御供申され候へ、必ず、重き恩賞の候はん、聊爾あるべからず』

と告ぐれば、成正、大に驚き、直に、千姫、及び刑部卿局

を扶けて、家康の茶臼山の本營に、送り屆く。

千姫、本多佐渡守正信に賴りて、秀賴母子を、助命せんことを請へば、家康、姫の無事に、歸還せしを見て、其悅び、大方ならず、

『姫の願ひとあれば、聞かずばなるまじ、秀賴母子を、助け置きたればとて、何程の事かあらん、汝、大樹にも、申して見よ』

と命ずれば、正信、直に、岡山に、馳せ行きて、其旨を述ぶ、平生、溫厚の秀忠、

『要らざる事を申すものかな、何とて、秀賴と一所に、兎も角もならざりしぞ』

と怒りて、敢て許さず。

大野治長、千姫の既に家康の本營に著ける頃を、見計らひ、老臣米村權右衞門を、使者として、本多上野介正純、後藤庄三郎光次の許に、遣はし、

『今日の一戰に、城中の浪人共、盡く、討死仕つり、速水甲斐守、大野修理亮の二人、秀賴母子を、介抱して、山里帶曲輪の糒倉に、罷り在り候、御簾中は、先刻、御退去あらせ候、寬仁の御思召を以て、秀賴母子の一命を、助け給はゞ、甲斐、修理の二人、早速、城を出でて、切腹仕つり候べし』

と請ふ、正純、此旨を披露すれば、家康、

『此事、大樹の胸に在り、我等の一存を以て、定めがたし、先づ、事の決定するまでは、庄三郎に於て、預かり置くべし』

と告げて、權右衞門を、光次に、引き渡し、井伊掃部頭直孝を召して、

『汝は、是れより、城中に、馳せ入りて、糒倉を守るべし』

と命じ、又安藤對馬守重信を召して、監使を命ずれに、二人、直に、士卒を率ゐて、城中に、馳せ入る。

九二　茶臼山の本營

家康は、本營を、茶臼山に進め、秀忠は、岡山に移る、大工頭中井大和守正次、家康の茶臼山に進むと共に、豫て、切り組み置ける小屋を、運び來りて、建築せんとす、本多上野介正純、見て、

『斯やうに、廣くては、御意に叶ふまじ』

と告げ、直に、家康の前に出でて、伺へば、

『間口九尺、奥行二間にて、可なり、六疊より廣きは、無用なり』

と命ず、正次、乃ち急に、切り詰めて、六疊となし、幕を以て、其中を隔て、上の三疊の室を、家康の座所とし、下の三疊の室を、諸侯參謁の時の座所とす。

工事、忽ち成りて、家康、此れに入る、諸侯、續々、來りて、戰捷を賀す。

秀忠、亦、岡山より來りて、祝辭を述ぶれば、家康、

『大樹、此度の勳功、比類あるべからず』

と答へて、氣色、特に、麗はし。

越前少將忠直、續いて、馳せ來れば、家康、其手を取りて、

『今日、城中に、一番乘りせしこと、武勇の程、感ずるに餘りあり、斯くてこそ、我が孫なれ』

と告げ、感賞、最も深し。

越後少將忠輝、亦、來り謁すれども、家康、更に、見向き

野江
此れは大阪市東成區野江町にして元は榎並に屬す石川忠總の城兵を破りし處＝網島驛より望む＝

もせず、正純、

『上總介殿、御參候候』

と披露すれば、家康、冷然として、

『上總介が、何と致せしぞ』

と言ひしばかり、復た一語をも、交へず、稍〻ありて、

『界浦の方に、落人ありと申すに、切めて、花井主水でも、遣はして、討ち取れよ』

と命ずれば、忠輝、赤面して退く。

尾張宰相義直、駿河宰相頼宣、亦、來り謁す、頼宣、二條城に在りし日、自ら先鋒たらんことを請ひしも、家康、

『大樹、先陣たれば、大阪表の事は、別に、氣遣ひなし、大和、紀伊、和泉、河内の鄕民等、秀頼に、一味して、味方の後より、押し寄せんも、計りがたし、尾張と、汝とは、後陣に在りて、後の敵に備へよ』

と告げて、許さず、此時、家康、二人の來るを見るより、

『何として、遲かりしぞ』

と聲を掛くれば、頼宣、ハラハラと、涙を垂れつ〻、

『上意とも存ぜず候、二條の御城にて、御先きを望み候へるも、斯かる事あらんと、存じたればこそに候へ』

と述べて、怨めし氣に、家康の方を見遣る、家康、ハタと窮して、

『好し〳〵、汝の申す通りぞ、我等が、無理なり』

と和むれども、頼宣の意、尙、釋けず、松平右衞門大夫正綱、側より、

『今日、御手に合ひ給はざればとて、左な御嘆きあらせ給ひそ、まだお十四に候、御一代の中には、斯樣の御合戰は、幾度も候べし』

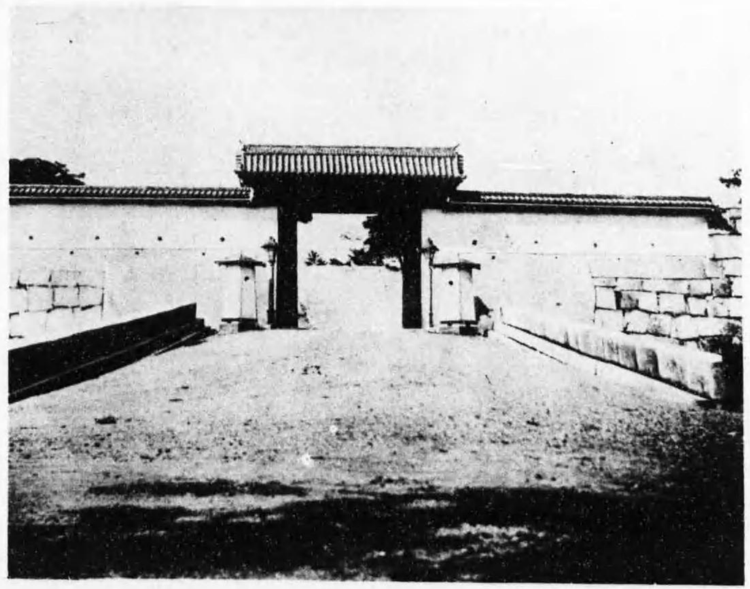
と慰むれば、頼宣、忽ち、涙を拂つて、

『右衞門、何と申す、我等十四の時、復たとあるべきか』

と言ひつ〻、ハッタと睨む、家康、

『常陸殿、只今の言葉が、槍にて候ぞ』

と賞讃すれば、居合はす諸侯、亦、皆、感嘆せざるはあらず。



櫻門
此れは大阪城本丸の大手門にして其南方に在り秀頼の馬を進めて戰報を待ちしところ

九三　秀頼の處分

城中の猛火も、酉の刻過ぐる頃より、次第々々に、衰へ行きぬ。

井伊掃部頭直孝、其家臣百田助右衞門、龜岡吉右衞門の二人に命じ、弓手二十人を率ゐて、秀頼の所在を、搜索せしむ。

二人、燒け殘りの樓櫓を、一々、搜し索め、秀頼母子の、正しく、糒倉に在るを、突き止めて、報告すれば、直孝、士卒に命じて、嚴重に、其周圍を守る。

今は、囊中の鼠、遁れ出でんこと、叶ふべからず、殺活の權、一に、家康の手に在り。

侍女大藏卿局、饗庭局以下、打ち揃うて、淀君の前に出で、

『扨て〳〵、御運も、早や、末とこそなりて候へ、其期に及び候ひては、唯、心、急くのみに候はん、唯今、御暇乞を、申上げんと存ずるにこそ、正榮尼は、今日、自害仕つり候ひぬ、早く、覺悟を極め候へるこそ、羨ましう候へ』

と言ひつ〻、泣き崩るれば、淀君も、亦、流石に、心弱く、

『實にも、頼みなきこそ、浮世なりけれ、天下の主と、生れ來給ひながら、物心、覺えし頃より、一日片時の安

堵とてもなく、終に、空しくなり給はんこと、今生の悲み、此れに過ぐるはあらず、思へば、果報拙なき秀頼が御身の上にこそ』

と言ひさして、よゝとばかりに、泣き沈む、主從倶に、

『今宵ばかりの命ぞ』

と覺悟は、頓みに、定めながらも、若しやと思ふばかりに、惜しからぬ命を存ふるこそ、果敢なけれ。

七日の夜も、涙の中に明けて、今日は、八日となりぬ。

秀頼の運命、愈〻此日にこそ、決すべけれ、日は、熱つけれども、人の心の冷たきを思へば、空は晴るれども、胸の曇は、霽れ遣らず。

實に測りがたきは、家康の心なり、本多佐渡守正信を召して、

『如何に佐渡、秀頼の一命を、助けずばなるまじいかの』

と問へば、正信、

『御道理に候、御誓紙あれば、御果し給はんは、如何に候』

と答ふ、家康、

『なれども、佐渡』

と言ひつゝ、沈吟すること暫し、頓て、

『我れは、最早、七十四なり、罰が當らば、當るも儘ぞ、大樹にさへ、仔細なくば、それにて好からずや、秀頼は、切腹さすかの』

と述べて、又首を傾く。

家康の意は、既に決す、本多上野介正純を召して、

『汝、秀頼母子に、相違なきや否やを、見極め來れ』

と命ずれば、正純、直に、馬を驅つて、城中に、馳せ赴く、稍〻ありて、歸り來り、

『篤と、容子を窺ひ候へるに、正しく、秀頼公御母子に、紛れも候はず』

と申せば、家康、打ち頷づくこと數多度、重ねて、加々爪甚十郎忠澄、豐島主膳信滿を、城中に遣はして、淀君の侍女二位局を、召し寄せ、

『秀頼は、如何なる裝束を著せるぞ、淀殿は如何に、糒倉に籠れる男女は、幾人なりや』

と問ひ糺し、二位局、一々、答辯すれば、

『それにて好し、緩々、休息せよ』

と告げ、其儘、留めて、還さず、これぞ、其一命を助けん爲めと、知られぬ。

二位局は、渡邊筑後守勝の母にして、太閤秀吉の薨去以來、常に、城中の消息を、家康に内報せり、家康の、局を助けんとするは、是が爲めなり。

九四　秀頼の自殺

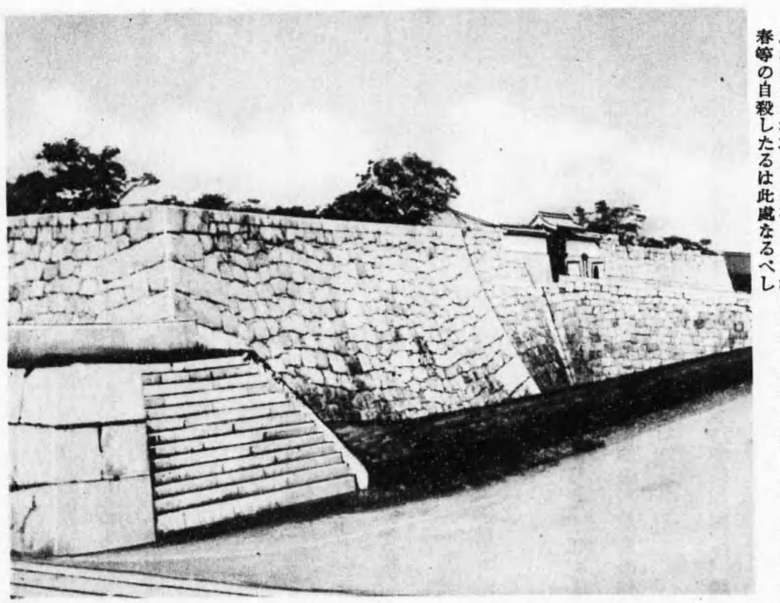
既にして、家康より、秀頼母子處分の命あり。

井伊掃部頭直孝、乃ち近藤登之助秀用を以て、速水甲斐守守久を、倉外に、呼び出だし、

『太閤以來の舊好を、思召され、秀頼母子は、助命せらるべし、懸命の食邑を、宛行はるべければ、早々、出城あるべし』

との旨を傳ふ、守久入つて、此旨を申せば、秀頼、慨然として、

『今は、只、自害するばかりぞ、此期に及んで、何ぞ、敵の虜となつて、我が名を汚さんや、思ひも寄らぬことかな』



櫻門の中段
此れは大阪城本丸の大手門たる櫻門附近の中段なり堀田正高、野々村雅春等の自殺したるは此處なるべし

と述べて、更に、聞き入れず。

淀君、泣く〳〵、家康の意に従はんことを、掻き口説きて、止まず、治長、守久も、亦、切に諫むれば、秀頼、心ならずも、終に、此れに従ふ。

治長、出でて、異議なく、出城すべき旨を答ふれば、直孝、直に、其旨を、家康に報ず。

家康、重ねて、加々爪甚十郎忠澄、豐島主膳信滿を、遣はして、糒倉に籠れる男女の人名を問へば、治長、筆を執つて、一々、書き認む、乃ち秀頼、淀君を初めとして、此れに従ふもの、舊臣には、

大野修理亮治長
大野修理亮治長嫡子　大野信濃守治德
速水甲斐守守久
速水甲斐守守久子　速水出來丸十三歳
津川左近允親行
竹田永翁
堀對馬守直連
武田左吉
高橋半三郎十五歳
高橋十三郎十三歳
埴厚八藏
埴原三十郎
寺尾庄右衞門
小室武兵衞
土肥庄五郎十七歳
加藤彌平太
森島長意
片岡十右衞門
伊藤武藏守

浪士には、

眞田大介幸昌十六歳
毛利豐前守勝永
毛利勘解由
荻野入道道喜
中方將監
中方平兵衞
舊名氏家內膳正行廣

又淀君の侍女には、

伊勢國司北畠氏一族　阿其局
大野道犬妻　大藏卿局
淺井石見守明政女　饗庭局
木村長門守重成母　右京大夫局
內藤新十郎長秋母　宮內卿局
湯川孫左衞門姉　阿玉局
阿末局

の三十餘人なり、家康、尋いで、出城を命ずれば、速水守久、出でて、乘物二挺を賜らんことを請ふ、直孝、

『乘物は、唯、一挺あるのみ、秀頼公には、御馬を召さるべし』

と答へて、肯んぜず、守久、又入つて、秀頼に申し、双方押問答の間、時刻を移す、直孝、監使安藤對馬守重信、及び阿部備中守正次に向ひて、

『大御所の舊好を重んぜさせらるゝは、然ることながら、秀頼母子を、生かし置かんは、禍を後日に貽すものに候はずや、後日、御咎めを、蒙むれば、蒙むれ、天下の動亂には、換へがたし、此儀、如何思され候ぞ』

と問へば、二人、言下に、之れを贊す、直孝、

『左らば、斯うぞ』

直に、部下に命じて、大砲を、糒倉の中に放つこと二發。

今は、一樓の望みも、斷えぬ。

『扨ては、御臺の願ひも、叶はざりしか、此上は、潔よく、自害せん』

とは、主從一同の愈〻思ひ極めしところ。

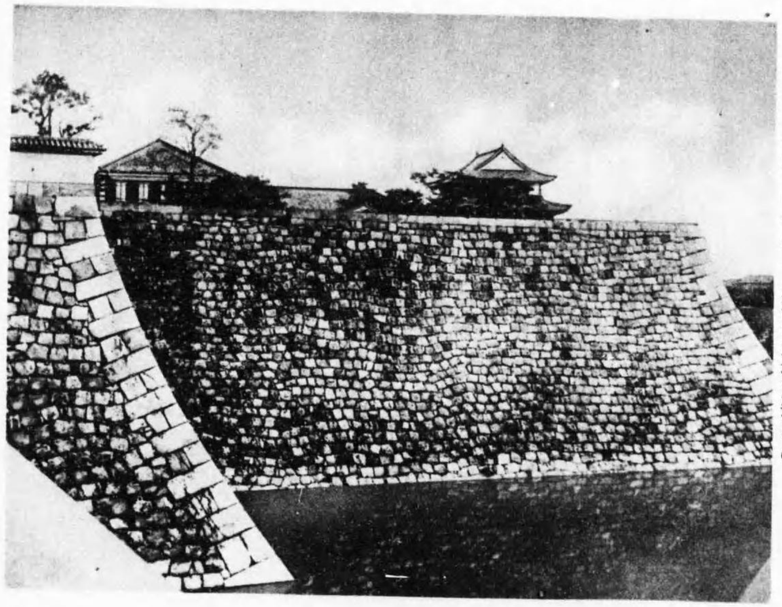
倉中には、枯草多し、

『屍骸を、敵に渡さんは、末代までの恥辱ぞ、火を掛けて、燒き拂へ』

と言ひさま、これに、火を點ずれば、炎烟、忽ち、渦卷き起る。

眞田大助幸昌、此時までも、糒倉の入口に坐して、動かず、人々、見て、心の中に、憫れみ、

『今は、譜代恩顧のものさへ、皆、落ち行き候ぞ、御身は、近頃、入城せられしばかり、何も、重恩を蒙むりしと申すにもあらず、特に、年さへ、少なきに、此處を遁



大阪城の西側　其一
此れは大阪城大手門の南手より城西の石垣を望むもの

れ給へばとて、誰れが、何と申すべきや、疾く〳〵、城外へ、立ち退き、伯父伊豆守殿を頼みて、一命を全うし給へ』

と說き諭せども、幸昌、首を掉りて、聞き入れず、

『イヤ〳〵、父は、冥途黄泉までも、君の御供せよ、必ず、降人に出でて、父の忠志を空うすべからずとこそ、申し殘して候へ、此處を遁れんは、父の意にもあらず、某の志にも候はず』

と答へて、更に、其意に從ふべき色もあらず、秀頼、聞きて、

『左らば、其志に任せよ、大助と、兒小性三人は、年も少なし、加藤彌平太、武田左吉の兩人、介錯して、取らせよ』

と命じ、鎧を脱して、傍に置き、短刀を取つて、腹に突き立つれば、毛利勝永、これを介錯す、淀君、亦、後れじと、首、差し延べ、

『それ〳〵』

と指圖すれば、荻野入道道喜、其首を落す、秀頼、年二十三、淀君四十三。

幸昌、及び兒小性土肥庄三郎、高橋半三郎、高橋十三郎の三人、齊しく、鎧を脱して、腹、寛ろげ、西に向ひて、合掌念佛し、頓て、刀を取つて、腹に、突き立つれば、彌平太、左吉の二人、涙ながらに、其首を落す。

斯かる間に、猛火、益ゝ燃え盛りて、今は、一刻も、猶豫すべからず、治長、守久、勝永以下、皆、思ひ〳〵に、自殺すれば、侍女、亦、刃に伏して斃れ、三十餘人の男女、誰れ一人、遁がれ去りしものあらず。

十五坪の一倉、忽ち、一團の火焔となつて、揑と、崩れ落つ、後には、秀頼佩用の骨喙（ほねはし）と稱する一尺九寸五分の脇差を留めしばかり、復た一片の骨をも、殘さず。

家康、駿府に歸りて後、左右に向ひて、

『不義非道を行へるものは、縱令、一時、榮ゆることありとも、子孫に至りて、其應報を免かれず、故太閤は、織田殿の重恩を受けながら、其子に辛らし、三七郎信孝の如きは、尾張の内海に遁れて、

昔より主をうつみの野間なれば
むくいを待てや羽柴筑前

との一首を殘して、自殺せり、秀頼の生害こそ、五月八日なれ、豐臣の滅亡は、正しく、三七郎の自殺と同じ五月七日なりしも、不思議の因緣ならずや』

と語り示せば、侍臣、何れも、皆、其奇に驚かざるはあらず。

秦を亡ぼすものは、秦か、あらずか、威名、海外を壓せし豐臣家も、哀れ、其子に至りて、忽ちに、滅びぬ。

九五　家康の歸洛

茶臼山には、諸將士の來つて、戰捷を賀するもの、引きも切らず。

將軍秀忠、亦、其二弟尾張宰相義直、駿河宰相頼宣の二人と與に、來りて、家康に對面し、

『昨年と言ひ、今年と申し、御老體をも、厭はせられずして、御自ら御出馬あらせ給ひければ、左しもの兇敵も、速かに、亡滅仕つり候ひぬ、天下一統の大慶、これに過ぐるは候はず』

と謝すれば、家康、

『今より後は、專ら政道を正し、仁恩を施して、天下の

泰平を、心掛け給へ、諸侯に對しては、三ヶ年が間、徭役を免され候べし』

と說き諭す、秀忠、謹んで、敎を奉じ、間もなく、辭して、岡山の本營に還る。

大野修理亮治長の老臣米村權右衞門、昨日より、後藤庄三郎光次の許に在り、家康、人を遣はして、城中の金銀財寶、幾何ありやと問はしむれば、權右衞門、

『一向、存じ候はず』

と答へて、實を言はず、

『汝は、大野修理の家老なるに、何ぞ、知らずと言はさんや、言はずば、責めて、問ふべきぞ』

と詰れば、權右衞門、忽ち、昂然として、首を擧げ、

『これは、御言葉とも存じ候はず、主人修理は、軍陣の成敗を掌り、運命の存亡を計り候も、曾て金銀財寶を、心とせず、是を以て、我等、亦、敵を擊ち、首を取らんと存ずるばかり、他を顧みるの遑あらず候、道理を以て申さば、城中、戰に負け候ひなば、首をも保ち候はず、千萬の財寶ありとて、何の益か候はん、若し、軍に勝つ時は、兩將軍の御腰の物まで、我が物に候、求めずして、財寶に飽き候べし、且つや、申すべきことあらば、卽座に申さん、申すべきの理なくば、口を裂かれ、舌を拔かるゝとも、申すべきや、責めて問ふことは、何事に候ぞ』

と答へて、憚かる色もあらず、家康、聞いて、

『實に無類の剛の者ぞ、彼れが如きは、兵衞＝義直＝、常陸＝賴宣＝にも、附け置きたきものなり』

と語りて、之れを赦す。

此日、天氣、晴れ渡りて、碧空、拭ふが如し、家康、

『大合戰の終りは、豪雨のあるものぞ、今日の夕刻には、暴雨洪水あらん』

と告げ、午の刻過ぎ、板倉內膳正重昌を隨へて、俄かに、茶臼山を出發し、城中の燒跡を、檢分して、京橋口より、京街道に出で、其儘、輿を急がせて、京都に歸る。

守口に到る頃より、ポツリ〳〵と、雨降り出で、枚方（ひらかた）に到れば、大雨、沛然として、盆を覆へすが如し。

今は、輿を進むべからず、家康、淀の木村惣右衞門勝正の家に入り、雨具を整へ、馬に乘じて、又發す。

鳥羽に到れば、雨歇み、雲散じて、星斗、光、更に燦たり。

亥の刻、京都に著して、二條城に入る。

大阪の諸軍、絕えて、之れを知るものあらず。

九六　二條城の恩賞

將軍秀忠、尙、大阪に在りて、後事を處す。

阿部備中守正次、高木主水正正弘は、大阪の城址を警衞し、水野隼人正忠淸、靑山伯耆守忠俊、內藤若狹守淸次、松平越中守定綱は、櫻門極樂橋を警衞し、桑山左衞門佐一直は、住吉附近に赴きて、敗兵の亂暴を警しめ、小出大和守吉英は、界浦に到りて、逃竄の城兵を討じ、又西國の諸軍は、城中の掃除を擔任す。

金森出雲守可重、岸和田に在り、大阪の落城を聞くより、部下を率ゐて、大阪に向ふ、偶〻櫻井村に於て、大野主馬首治房の敗兵に逢ひ、直に進み擊ちて、之れを破る、捕虜八人、斬首二百八級。

毛利甲斐守秀元、四月下旬を以て、長門の長府を發し、五月七日を以て、長柄川を越ゆ、水軍の將向井將監忠勝を援

大阪城の西側　其二
此れも大阪城の西側にして大手門より西北を望むもの越前少將忠直の敗兵を追うて前進せしところ

けて、敵の番船十餘隻を奪ひ、更に、進んで、高麗橋より、極樂橋に向ふ、會〻城兵の遁がれ出づるを見て、一擊、之れを殲し、首を獲ること、三百級。

九日、秀忠、岡山の本營を發して、伏見城に還る。

尾張宰相義直、駿河宰相頼宣の二人、亦、此れに從ふ、關ケ原の佳例に由りて、別に凱歌を奏せず。

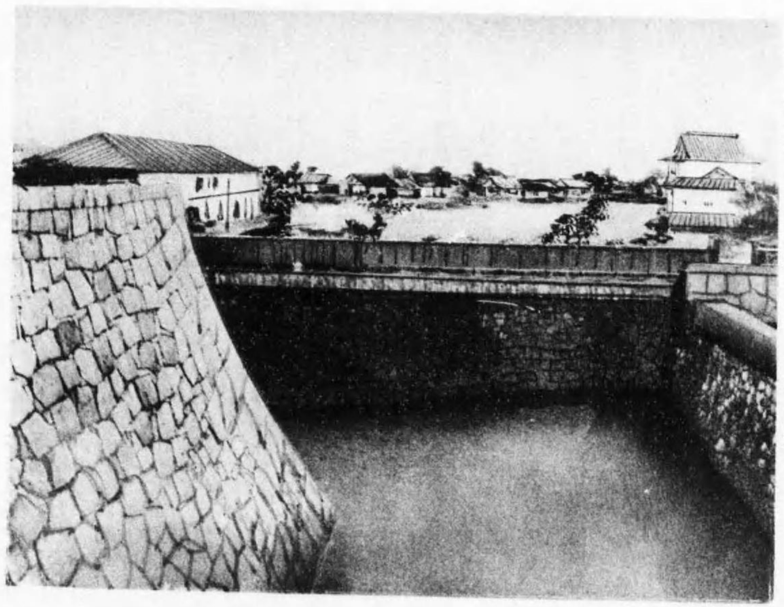
島津陸奥守家久、上阪の途中に在り、依りて、其兵を班し、自ら上洛して、慶賀すべき旨を命じ、又高野山文珠院應昌に對して、山中の餘黨を、搜索すべき旨を命ず。

十日、秀忠、二條城に登りて、家康に對面す、越前少將忠直、其弟出羽守直政〻淺野但馬守長晟、蜂須賀阿波守至鎭、池田宮内少輔忠雄、生駒讃岐守一正以下の諸將、續々、來りて、凱旋を賀す。

忠直、直政は、上段の席を距ること、一疊半ばかりの左方に在り、家康、親しく、忠直先登の勳功を賞し、又直政の幼弱を以て、二敵を、生擒せし武勇を賞す。

忠直の次弟伊豫守忠昌、衆中に在り、忽ち、大音を揚げて、

『松平伊豫守忠昌、此れに候』



大阪城の空堀
此れは大阪城の空濠にして本丸と二の丸との間に在り

と呼はれば、家康、

『オ〻、汝は、其れに在りしか、多勢群參の中にて、見落したり、今度の合戰に奮鬪し、特に、無双の剛敵を討取りたること、拔群の軍功ぞ』

と賞し、重ねて、忠直に對して、

『汝の父中納言秀康、常に、忠孝を勵み、汝も、亦、武勇を重んじて、城中に先登し、其軍功、諸將に冠たり、感狀を授くべき筈なれども、家門なれば、其儀に及ばず、子々孫々に至るまで、逆意を除くの外は、如何なる事ありとも、努め〳〵、疎略あるべからず、恩賞は、追て沙汰すべし、これは、當座の褒美ぞ』

と告げて、初花と稱する茶壺を賜ひ、秀忠よりは、別に、貞宗の脇差を賜ひ、尙、其家臣本多飛驒守成重、本多伊豆守富正、荻田主馬等を召して、恩賞を賜ふ。

家康、又淺野長晟に對して、信達の軍功を賞し、家臣上田宗古、龜田大隅、多胡助左衞門、安井喜内、岸九兵衞等を、面前に召して、褒詞を加ふ。

家康、又特に阿部備中守正次を、其面前に召して、

『去ぬる七日、味方苦戰の際、汝、踏み留まりて、奮鬪し、終に、頽勢を盛り返せし段、拔群の忠勤なり、去ぬる天正十八年、小田原征伐の時は、大須賀の備に屬し、酒勾川の伏兵となりて、大功を奏す、此兩度の軍功は、他人の十度、二十度の武功にも、優るべきぞ』

と告げて、深く、其功を賞す。

此役、東軍の獲たる敵首、一萬四千五百七十五級、家康、諸將より、陪臣に至るまで、最も公平に、其功を賞すべき旨を告ぐ。

九七　殘黨其他の始末（一）

大阪の諸將中、大野道犬も、逃亡し、大野主馬首治房も、遁走し、長曾我部宮内少輔盛親、新宮左馬助行朝、山川帶刀賢信、北川次郎兵衞宣勝以下、奔竄せるもの、少なからず。

特に、秀頼の庶子國松丸、幷に女兒の所在も、亦、分明ならず。

秀忠、乃ち嚴命を、諸侯、及び代官に下して、大阪の殘黨

を、逮捕すべき旨を命ず。

長曾我部盛親は、其家臣中内宗右衛門と與に、山城八幡の里、科手の民家に潜みて、家康歸洛の途中を、要擊せんと欲し、宗右衛門は、路傍の蘆中に匿れ、盛親は、北手の窓下に在りて、日々に、家康の過ぐるを待つ。

近隣に、井筒屋と呼ぶ一茶店あり、宗右衛門の、時々、餅を求めて、蘆中に入るを見、心に、深く之れを怪しむ。

十一日、蜂須賀阿波守至鎭の家臣長阪三郎右衛門來つて、井筒屋に憩ひつゝ、

『如何に、此あたりに、怪しき者共の、潜み居らずや』

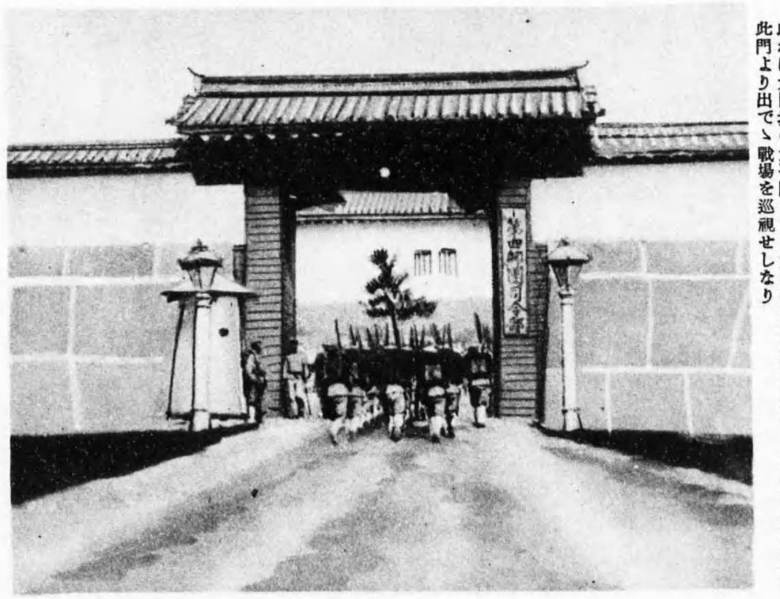
と問へば、主人、

『左ればに候、此頃、此あたりに、見馴れぬ一人の武士、毎朝、店に來りて、餅を求め候、特に、此前の蘆の中へ、出入する體、何さま、仔細候べし』

と答ふ、三郎左衛門、部下に向ひて、

『そは、必定曲者なり、疾く、搦め取れや』

と命ずれば、部下の歩卒、蘆中を搜し索めて、宗右衛門を捕へ、嚴しく、責め問ひて、實を得、



大阪城の大手門
此れは大阪城の大手門にして第四師團司令部の在るところ當年豐臣秀頼此門より出でゝ戰場を巡視せしなり

『左らば、宮内少輔を捕へよ』

と勇み立ち、其隱家を圍みて、難なく、盛親を捕へ、直に、繩を掛けて、伏見に送る。

將軍秀忠、井伊掃部頭直孝、土井大炊頭利勝、安藤對馬守重信の三人に命じ、盛親を、白洲に、引き出だして、鞫問せしめ、親から、戸外に在りて、之れを聞く。

直孝、屹と、盛親を見下しつゝ、威儀、儼然として、

『御邊は、數千人の大將たるべき身分にあらずや、合戰に打ち負けなば、討死をもなすべきに、左はなくして、落ち延びたる仔細、如何に』

と詰り問ふ、盛親は、年頃、四十ばかりの大入道にして、身には、鹽垂れたる木綿の袷を著す、身幅狹くして、膝の露はるゝをも、意とせず、

『去ぬる六日の夕方、是非に、今、一戰して、有無の勝負を、決せんと存じつるに、赤備の一隊、横槍を入れん體にて、堤を登り來り候べば、疲れたる味方の、叶ふべくもあらずと存じ、是非なく、引き取りたるにて候』

と述べて、答へを反らす、直孝、

『其赤備こそ、我等なれ』

と言へば、盛親、其顏を見上げて、

『扨ては、御邊なりしか、盛親、殘念に候ぞ』

と述べつゝ、感慨の色を浮ぶ、直孝、重ねて、

『御邊の討死もせず、自害もせずして、城中を落ち延びしこと、返す〳〵も、不審なり、其仔細を申し候へ』

と詰れば、盛親、何時しか、秀忠の戸外に居るを察して、屹と、其方を見遣りつゝ、

『盛親、不肖なりと雖も、一方の大將なり、何ぞ、葉武者と同じく、輕々しく、討死、又は自害仕つるべきや』

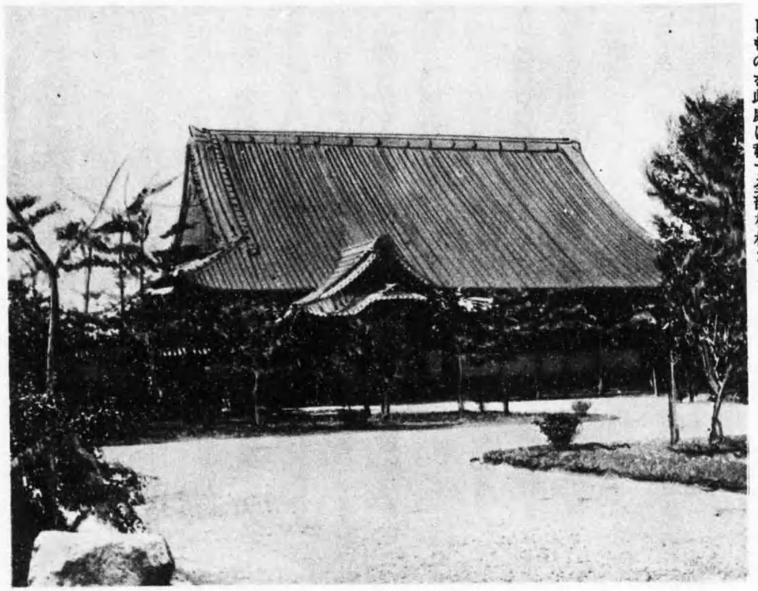
と言ひ放つ、其再擧を計らんと欲するの意、言外に溢るれば、直孝等、

『此者、助け置かんこと、然るべからず』

と決して、白洲を閉ざす、警固の武士、再び繩を掛けて、柱に繫ぎ、嚴しく、其周圍を守る。

頓て、食時に及べば、折敷に、黑き飯と、赤鰯を添へて給す、盛親、一見して、色を正し、

『古來、名將と言はるゝ人も、運盡きて、生捕らるゝこ



千疊閣跡の建物
此れは大阪城中千疊閣跡の建物にして明治十八年中紀州和歌山城にありしものを此處に移す全部檜材なり

と、其例、少なからず、我れ、斯くなればとて、露ばかりも、恥とは思はず、然るに、斯かる賤しき食物を、据うるとは、何事ぞや、疾く〳〵、首をこそ刎ね候へ』

と詰る、直孝、會〻其前を過ぎて、此容子を見聞し、

『扨て〳〵、法もなき振舞かな』

と警固の武士を叱し、急ぎ、其繩を解きて、別室に延き、更に、清き料理を饗して、

『暫し、骨を休め給へ』

と慰むれば、盛親、

『斯くてこそ、禮を知りたる武將の道なれ』

と述べ、自若として、箸を執る。

十五日、家康、命じて、盛親を、京師に徇へ、六條河原に誅して、首を三條河原に梟す。

九八　殘黨其他の始末（二）

城兵の物色、日を逐うて、嚴しく、毎日、餘黨の首を斬つて、獻ずるもの數百級。

北川次郎兵衛宣勝、山川帶刀賢信の二人、八幡の瀧本坊に

匿る、十二日、秋元但馬守泰朝の、士卒を率ゐ來りて、逮捕せんとするを聞くより、二人、累を寺僧に及ぼさんことを虞れ、

『關東の討手、來らば、潔よく、名乘り出でて、自害すべし』

と語りて、其來るを待つ、寺僧、

『イヤ〳〵、此處は、一先づ、落ち延び給へ、若し、討手來らば、只、一宿は、許せしも、其後、何處へか、出立して、行方を存ぜずと答へ、其上は、御計らひに、任せ候べし、愚僧の事は、御案じあるべからず、只、速かに、立ち去り給へ』

と說き勸むれば、二人、其意に任せて、何處へか、立ち去る。

間もなく、泰朝、入り來り、遍ねく、寺中を搜し索むれども、獲ず、寺僧を捕へ歸りて、獄に投ず、二人、此事を聞くより、

『我等の爲めに、瀧本法印を、罪に落さんは、義にあらず、イザ、名乘り出でん』

と心を決し、十七日、宣勝は、知恩院、賢信は、本能寺に入り、人を京都所司代板倉伊賀守勝重の許に、遣はして、

『我等、謹んで、御仕置を受け候べし、瀧本法印をば、赦され候へ』

と訴ふ、勝重、二條城に、馳せ行きて、旨を請へば、家康、其志を義として、直に、寺僧を、縱ち還す、勝重、

『兩人をば、如何仕つるべく候や、番人を付け置き申すべきや』

と伺へば、家康、

『兩人は、名聞を重んじて、自ら訴へ出でし程のものぞ、番人を付けざればとて、姿を隱すべきものにあらず、兩人は、定めし、大阪に在りて、好き茶をくらひつけしならん、これ取らせよ』

と告げて、名茶を賜ふ、後、家康、使を遣はして、

『大名、小名の中には、密かに、大阪に、志を通じたるものあらん、包まず、申し述べ候へ』

と糺せば、二人、

『我等は、外樣者に候、左樣なる祕密の儀は、何事も、

存じ候はず』

と答へて、實を吐かず、使の者、

『物は、左樣に申したきことなれども、公儀は、左樣には、相成らず、存ぜらるゝ通り、神妙に申され候へ』

と賺かし問へども、二人、

『如何に、公儀なればとて、存ぜざる事は、存ぜずと申すの外は候はず、此上の御尋ねは、無用なり』

と答へて、取り合はず、使の者、

『貴殿の御爲めを、存ずればこそ、申すにて候へ、包まるゝは、益なし』

と尙も、說き賺かす、二人、

『人も、賴まぬことを、埒もなき事や』

と言ひ放ちて、空嘯く、使の者、大に怒りて、馳せ歸り、百方、二人の事を、讒すれども、家康、

『うひ奴かな』

と稱へて、一切、取り合はず、後、京都を發するに臨み、命じて、二人の罪を赦す。

淀姫の墳墓
此れは大阪城中に在りしに先年大阪市北區北野太融町太融寺に移す

大阪町奉行水原石見守、京都二條の邊に匿る、五月十四日、藤堂和泉守高虎、士卒を遣はして、逮捕せんとす、石見守、其遁るべからざるを察し、太刀を抜きて、躍り出で、矢庭に、捕卒三人を斬り、數人を傷けて、自殺す、因りて、其首を、二條門外に梟す。

新宮左馬助行朝、大阪を脫して、諸所に潛伏し、十四日、大和五條城主松倉豐後守重政の番所を、過ぎんとす、山本權兵衞義安、それと見るより、一聲、待てと叫んで、躍り掛かる、天野半之助可古、亦、力を戮はせて、取つて押へ、繩を掛けて、伏見に獻ず。

行朝は、石田治部少輔三成の黨堀內安房守氏善の子にして、曩に、紀州の一揆を煽起して、和歌山の城を襲はしむ、淺野但馬守長晟、之れを怒り、其領地に檻送して、磔殺せんことを請ふ、家康、其弟堀內主水氏久の、千姬を救ひ出せる功に依りて、特に、死一等を赦し、後、召して、大番となし、祿五百石を賜ふ。

淺野長晟、紀州の殘黨を、物色し、二十日、眞田左衞門佐幸村の妻を、伊都郡中に捕ふ、秀賴より、幸村に賜ひたる來國俊の副刀、幷に黃金五十七枚あり、長晟、之れを添へて、二條城に獻ず、家康、其罪を赦し、副刀、並に黃金を、長晟に賜ふ。

幸村の妻は、竹谷三位の庶子なり、大谷刑部少輔吉隆、養うて、女となし、之れを幸村に嫁す、岩城但馬守宣隆、其姿色あるを聞き、三位の邸に、寡居するに及び、關東に請うて、之れを娶る。

大野道犬、各所に潛居して、京都に出で、二十一日、大佛殿の一茶店に憩ふ、家康の臣野間金三郎重成、小林田兵衞元長の二人、伏見より、二條に赴かんとして、此處を過ぐ、元長は、曾て大阪に事へて、道犬と相識る、早くも、それを見知りて、重成に向ひ、

『あれなる大入道こそ、豫々、御尋ねの大野道犬なれ、我れ往きて、賺かすべし、好き時節に、聲を立つべければ、手早く、駈け付けて、生捕り給へ』

と囁き、重成を、側に隱して、只、一人、茶店に入り、

『珍らしや、大野殿』

と聲を掛くれば、道犬、大に驚きて、只、一刀に、斬つて捨てんとす、元長、

『ヤレ待ち給へ大野殿、我れは、御邊の恩誼を受け候もの、爭かで、敵意を懷き候はんや、御心安かれ、某の一命に換へても、御身を申し宥め候べし』

と語れば、道犬、漸く、意を安んじて、席に復す、元長、

其油斷せる隙を計りて、合圖の聲を、掛くれば、重成、飛び來つて、ムヅと、道犬に、組み付く。

大力の道犬、矢庭に、重成を振り放ざんとすれば、元長、亦、力を合はせて、取つて押へ、二條城に、引き行きて、駒寄に繫ぐ、人々、來り見て、

『これが大野道犬なりとや、聞き及びしよりも、大男なり』

と評すれば、道犬、

『武士にも、似げなき物の言ひやうかな、あの者共を、此體に縛しめんと存ぜしに、扨て〳〵、口惜しき次第なり』

と述べて、更に、恐るゝ色もあらず、界浦の市民、其家屋を燒かれたるを怨み、

『大野道犬は、先きに、界浦を燒き拂へる惡人に候、昔時、平中將重衡を、南都に賜はりし例も候、道犬をば、界浦の住民に、下し賜へ』

と請へば、家康、之れを許す、六月二十七日、界浦奉行長谷川左兵衛藤廣、道犬を市に徇へ、之を磔殺して、其首を梟す、市民、觀て、皆、快とす。

秀頼の近臣湯淺右近忠壽、赤座内膳正直規、木下左京秀親、山口休庵等の十人、大阪を脱して、京都に入り、秀親の子、其會下に候するの故を以て、妙心寺に詣り、海山和尚の一偈を受けて、自殺せんと欲し、氏名を記して、二條城に獻じ、

『御檢使を賜はらば、一同、速かに、生害仕つり候べし』

と請ふ、家康、具さに、其氏名を一覽し、

『先年、石田治部の逆意に與みし、此度、又秀頼の催促に應じたるものは、再犯の罪、最も重し、假令、其武勇は、惜しむべしと雖も、國法は、枉ぐべからず、餘儀なく、誅伐を加ふべしと雖も、右近、内膳等は、然らず、只、秀頼の近臣として、忠を其主に盡したるもの、其志、憐れむべくして、其罪、憎むべき所なし、佞奸にして、其主家を誤まりたる大野父子の輩とは、其情、同じからず、因りて、盡く、其罪を赦す、何地なりとも、隨意に、退散すべし』

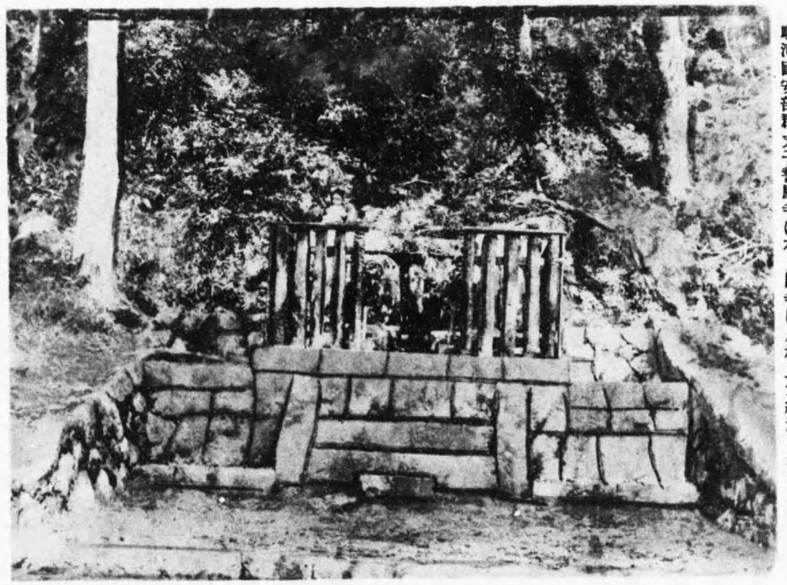
との命を傳ふれば、何れも、皆、感涙を流して、立ち去る。

增田右衞門尉長盛、曩に、石田治部少輔三成に與みせるの故を以て、武州岩槻に幽せらる、其子兵部盛次、赦されて、尾張宰相義直に仕ふ、去年の役、從うて、陣中に在り、城兵、勝てば喜び、敗ぶるれば憂ふ、家康、聞いて、其志を憐れみ、今回の事、起るに及び、

『盛次には、似合はしき志かな、籠城せんと思はば、心に任せん』

と命ずれば、盛次、大に悅びて、城に入る、秀頼、其志を感じて、錦の陣羽織、並に太刀二口を賜ふ、五月六日、此陣羽織を著して、出戰し、終に磯野平三郎の爲めに討たる、是に於て、五月廿七日、岩槻城主高力左近大夫高房に命じて、其父長盛に、死を賜ふ、年七十一。

片桐市正且元、常に、豐臣家の無事を計らんと欲す。事、志と違ひて、東西、釁を開き、且、其身、東軍に屬するの止むを得ざるに至る、其心中の憂悶、言ふべからず、夏陣の起るに先だち、其子出雲守孝利と與に、駿州鞠子の誓願寺に居り、疾、篤しと稱して、軍に從はず、大阪の城、陷いり、秀頼母子、自盡せしと聞きて、感慨、胸に溢れ、



片桐且元の墓
駿河國安部郡丸子誓願寺に在り同寺は片桐且元終焉の地なり

五月二十八日、自ら刃に伏して死す、年六十三。

古田織部正重然、大阪に内應して、京都を燒き拂はんと欲し、事、露はれて、捕へられ、伏見木幡(こばた)に幽せらる、六月十一日、鳥居土佐守成次、内藤右衞門佐正重の二人を、遣はして、重然、及び其長子山城守重廣に、死を賜ふ。

使番青山石見守清長は、七隊長の一人眞野豐後守頼包の弟なり、初め、福島左衞門大夫正則に事へて、祖父江五郎左衞門定翰入道法齋と曰ひ、關ヶ原の役に、功あり、後、家康に仕へて、今の名に改む、去年、城濠埋却の時、清長、亦、渡邊半四郎家綱、山田十太夫重利等と與に、監使として、夫卒を指揮す、會〻城中より、盛裝せる侍女、出で來りて、

『其人々の中に、青山石見殿や在はする』

と問ひ、清長に逢ひて、

『御城にては、上々様方、安らかに渡らせ給へば、其許にも、安心せられ候へ、先は、東西御和睦相調ひし段、祝著に候』

と述べて、立ち去る、清長、ハッと、赤面し、

『某の一族、城中にも候へば、彼の女房も、其由緣にて、物語り候ひけん、各〻の思はれんことも、恥かしく候、努め〳〵、人になる漏らし給ひそ』

と述べて、固く、他言を止む、家康、聞きて、査檢し、城中に、内應せし事實、盡く露はる、因りて、閏六月十一日を以て、死を賜ふ。

大阪殘黨の首を斬つて、獻ずるもの、六百餘級、捕虜、降人の首を斬つて、梟するもの、七十餘人、家康、尙、畿内の諸侯に對して、嚴に、其餘黨を追捕すべきを命ず。

九九　遺孤の處分

關ヶ原役の後、秀頼に寛大なりし家康、大阪陣の後には、復た其遺孤に對して、寛大ならず。

秀頼の女の、年甫めて八歳なるもの、京極若狹守忠高の母常光院の許に在り、成田五兵衞助直の女の生むところ、忠高、今は、庇護すること能はず、五月十二日、これを伏見城に獻ず。

秀頼の一子國松丸、名は秀勝、年八歳、亦、助直の女の生むところ、去年、若狹に在りしも、和議成るに及んで、復た城に還る。

落城の當夜、大野主馬首治房、密かに、國松丸を奉じて、城外に、遁がれ出づ、土賊、治房を途に要して、之れを殺し、其懷中の金を奪うて、逃げ去り、復た國松丸を顧みず。

國松丸、諸所を漂泊して、伏見に到る、市民、其常人に、あらざるを察し、憐れみて、農人橋畔の家に、伴ひ歸り、食を侑めて、懇ろに劬はる、其名を問へば、

『若君様』

と答へ、父の名を問へば、

『上様』

と答ふ、近隣の兒女、

『扨ても、可笑しき名よ』

と打ち興じ、皆、呼んで、若君様々と云ふ、關東の物色、急なるに及び、其近傍の市民、

『彼の若君様こそ、正しく、秀頼公の御子なるべけれ』

と思ひ、五月二十一日、密かに、伏見城に、訴へ出づれば、秀忠、直に、人を遣はして、之れを捕ふ。

國松丸の侍童、年十二三歳なるもの、先きに、既に、伏見に捕はる、秀忠、命じて、侍童を見せしむれば、二人、相懷かしみて、打ち悅ぶ、

『今は、國松丸に、紛れなし』

と思ひ、其儘、留め置く。

山口休庵の談に依れば、國松丸は、京極若狹守忠高に託し、忠高より、研屋彌左衞門の妹に、預けたるに、後、東西和談の成るに及び、城中に還る、落城の夜、其傅田中六左衞門、乳母、侍童の三人、國松丸を奉じて、城を脫し、枚方堤に到りし時、妻木雅樂介の番所に於て、生捕られたりと云ふ、一說として揭ぐ。

忠高の家臣田中六左衞門は、國松丸の若狹に在りし時、其傳たり、二十二日、國松丸の捕へられしを聞き、京都所司代板倉伊賀守勝重の邸に出でて、國松丸と共に、死せんことを請ふ、勝重、自ら延見し、

『自ら訴へ出づるの條、神妙なり』

と賞し、命じて、酒二獻を給す、頓て、繩を掛けんとすれば、六左衞門、

『自身、訴へ出でたるものゝ、何とて、逃げ隱れ仕つる

べきや、御縄御無用なり』

と拒むを、勝重、

『御作法なれば、是非なし』

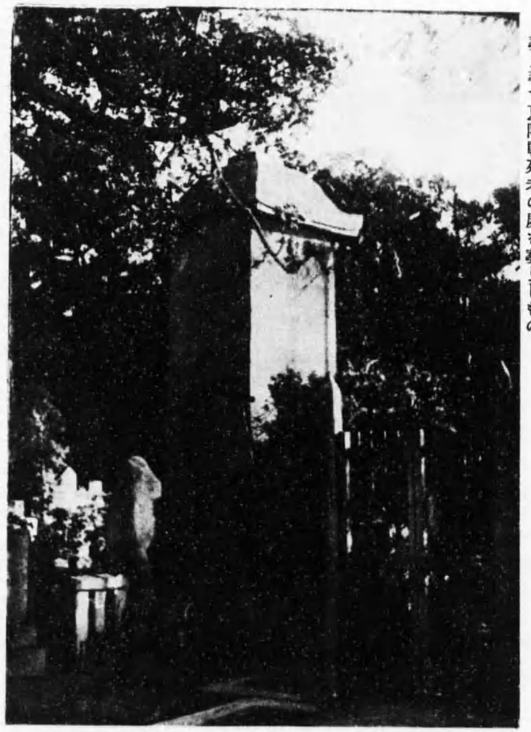
と諭し、六左衞門を引きて、伏見に到る。

二十三日、國松丸、及び六左衞門を、六條河原に引き出だし、穢多に命じて、其首を斬らしめ、遺骸を、三萬人塚大阪市天王寺區逢坂上之町一心寺の境内に在り存牟上人家康に請ひて冬陣戰死者の屍を葬り尋で夏陣戰死者の屍を葬りしもの條誓願寺の塔頭護正院に葬る、寺僧、謚して、漏世院雲山知西童子と曰ふ。

秀頼の女は、特に、赦免せられ、千姫、養うて、子となす。長ずるに及びて、尼となり、鎌倉松岡臨濟宗の尼院東慶寺に住し、天秀和尚と呼ぶ。

凡そ、婦人の夫を虐せらるゝもの、遁れて、此寺に入り、住居三年に及べば、其意に任せて、離別し、復た之れを拒むこと能はざるもの、實に、其寺法たり、秀忠、天秀尼の外孫に當るを以て、其望むところを問ふ、尼、

『方外の身、別に、望む所とても候はず、唯、永く寺法を許し給へ』



と請へば、秀忠、之れを許し、爾後、傳へて、明治維新の時に至る。

一〇〇　天下の一統

天下、今や、徳川家の一統に歸しぬ、復た誰れに憚かる所

もあらず。

六月十八日、本多佐渡守正信、家康の前に出でて、

『豐國明神は、大阪鎮護の爲めに、建てたるものに候、大阪滅亡の上は、最早、要らざることかと存じ奉つる、速に取り壞ち給へ』

と述ぶれば、家康、

『實にも、汝の申す通りぞ、去りながら、其社は、破却するに及ばず、神號、祭禮を廢し、釋徒の法を以て、沙汰せしむ』

と告げ、有職の公卿、及び宿德の諸門跡をして、其處分を議せしむ。

既にして、其議、決す、七月九日、二條城に、南光坊僧正天海、金地院崇傳、板倉伊賀守勝重を召して、

『豐國の社を廢して、大佛殿廻廊の裏に移し、別當照高院興意は、聖護院に遷らしめ、今より後、妙法院門跡常胤法親王を以て、大佛殿の住職となし、寺領千石を、寄附すべし』

と告ぐれば、天海、崇傳、

『御諚、道理至極に候』

と答へて、其事を贊す、雄威、一世を蓋ひし故太閤も、今は、豐國大明神の神號を廢せられ、國泰院殿俊山雲龍大居士と謚せられて、大佛殿後に、其廟塔を建てらる。

戰後の處分、全く終る、將軍秀忠は、七月十九日卯の刻を以て、伏見城を發し、八月四日を以て、江戸に還る。

家康、亦、此日午の刻を以て、二條城を發し、二十三日、駿府に還る。

越前少將忠直、水野日向守勝成、阿部備中守正次、松倉豐後守重政以下、軍功あるものは、隨時、增封せられ、越後少將忠輝は、逗撓、事に會せざりしを以て、嚴譴せらる。

其他、麾下諸士の剛憶を査して、賞を行ひ、罰を加ふること、各〻差あり。

家康の駿府に歸りて後、五ヶ月、元和二年正月二十一日、鷹を田中に放つ、偶〻急症を發して、駿府に歸り、百方、看護すれども、効なく、四月十七日巳の刻を以て、溘然として薨ず、年七十五。

大阪の君臣、斯人なくば〳〵と咀ひ居たる家康の、匆々世

を捐つること、秀頼亡滅の日を距ること、僅かに一年ばかり。

誰れか知らん、君臣豐樂の一句、豐臣の爲めに、佑ひせず、國家安泰の四字、却つて、家康の爲めに、幸あらんとは。

秀頼、大阪に死せず、眞田幸村と與に、密かに脱して、薩摩に走り、秀頼は、谷中に居り、幸村は、顆娃に居る、世に稱する谷山の醉人、顆娃の山伏、是れなりと云ふ、其他、肥後に脱せりとの説あり、後藤基次、薄田兼相等、亦、大阪に死せずとの説あり、然れども、是れ、多くは、源義經、蝦夷に走れりと云ふの類なり、憑據薄弱、遽かに信ずべからず。

日本史蹟大系
第十三卷

昭和十一年七月十六日印刷
昭和十一年七月二十日發行
〔二四八十錢〕

著者　熊田葦城
發行者　下中彌三郎　東京市日本橋區吳服橋三ノ五
印刷者　齋藤道太郎　東京市日本橋區吳服橋三ノ五
印刷所　單式印刷株式會社　東京市芝區芝浦一ノ二三
發行所　株式會社平凡社　東京市日本橋區吳服橋三ノ五
振替　東京二九六三九番
電話日本橋（二一五七番）（二一五八番）（二一五九番）

終